西合志町文化財調査報告　第４集

石立遺跡

八反田Ｃ遺跡

生坪第３地区農業基盤整備事業に伴う文化財調査（II）

１９９４

熊本県西合志町教育委員会

西合志町文化財調査報告　第４集

石立遺跡

八反田C遺跡

生坪第３地区農業基盤整備事業に伴う文化財調査（II）

１９９４

熊本県西合志町教育委員会

序

町教育委員会では、生坪・弘生地区を中心に行われた地域改善対策農業基盤整備事業による土地基盤整備工事に伴い、工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査を平成元年度から平成３年度にかけて行いました。

ここに報告する「石立遺跡・八反田C遺跡」は、平成２年度に発掘調査を行った調査記録であります。調査では、弥生時代後期の環濠の一部と考えられる溝と竪穴住居跡それに古墳時代前期から中期にかけての方形周溝墓や円墳などの墓と共に多くの遺物が出土し、当時の暮らしや墓制を考える上で大きな成果をあげることができました。

この報告書が、文化財の保護や郷土の歴史に対する理解ならびに学術・研究上の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および報告書作成に際しましては、各方面から多くの方々にご協力やご努力を賜りましたことに対して、厚くお礼を申し上げます。

平成６年３月

西合志町教育長　本　田　　孝

例　言

1．本書は、熊本県菊池郡西合志町大字合生（生坪・弘生台地）に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。

2．調査は、生坪第三地区地域改善対策農業基盤整備事業に伴う事前の発掘調査で、平成元年度～3年度まで継続して実施した。

3．調査は、西合志町役場産業振興課の委託により、熊本県教育庁文化課の協力のもと西合志町教育委員会が行い、浦田信智が担当した。

4．本書は、平成2年度分（6月25日～10月19日まで調査）石立遺跡・八反田遺跡C地区の調査報告を収録している。平成元年度分については、既に刊行済みで、平成3年度分については今後刊行予定である。

5．発掘調査での、遺構の実測および遺物の取り上げは各調査員が分担して行い、写真撮影は浦田が行った。

6．本書で使用した遺物の実測は、浦田・奈須和貴・本山千絵が、トレースは前川真由美・瀬丸伸子・六田育子・丹生英里が分担して行った。

7．本書で使用した写真の焼き付けは、浦田が行った。

8．本書で使用した遺構配置図及び全体測量図は、熊本県土地改良事業団体連合会に委託し、作成した。

9．調査で出土した遺物は、西合志町教育委員会で保管している。

10．本書の執筆は、主に浦田が行い、第1章2節は大住清昭（前社会教育課長）が行った。

11．本書の編集は、西合志町教育委員会で行い浦田が担当した。

凡　例

1．グリッドは、工事が広範囲にわたり実施され、調査対象地区が年度によってはかなり離れることから、各調査区のグリッドの統一と、各調査区を正確に地図に落とし込む目的のために、台地全体に国土座標（X＝－9.00・Y＝－22.00）を基準に100m四方の大グリッドを設定し、更に100mの大グリッドの中に10m四方の小グリッドを設定した。大グリッドは、北から南に向かってアルファベットのA・B・C……を付け、西から東に向かって数字の1・2・3……を付けた。

2．小グリッドは、北西隅を基準に東へ1・2・3……と付け、10まで来たら一段下がって西側にまた戻るというように、1番から100番まで千鳥式で設定している。

（例）2－B－45グリッド

大グリッドの2－B地点で、その大グリッドの中の45番の小グリッドを表している。

3．本書の遺構図版及び遺物写真に付した遺物の番号は、遺物実測図の図版番号並びに遺物番号と符号する。

（例）遺物番号　45－3

図版第45図の遺物番号3番の遺物

4．本文中に使用した遺構の略記号は、以下の通りである。

SD－溝遺構

SK－土壙

本 文 目 次

第Ⅰ章　序説 …… 1
　第1節　調査組織 …… 1
　第2節　調査に至る経緯 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 3
第Ⅲ章　遺跡の層位及び調査経過 …… 7
　第1節　遺跡の層位 …… 7
　第2節　調査日誌抄 …… 7
第Ⅳ章　石立（こくりゅう）遺跡の成果 …… 11
　第1節　遺跡の概要 …… 11
　第2節　遺構と遺物 …… 12
　　1．弥生時代 …… 12
　　（1）竪穴住居跡と出土遺物 …… 12
　　（2）溝遺構と出土遺物 …… 18
　　2．古墳時代 …… 35
　　（1）箱式石棺 …… 35
　　（2）方形周溝墓と出土遺物 …… 39
　　（3）円墳と出土遺物 …… 49
　　（4）土壙と出土遺物 …… 55
　　3．奈良・平安時代 …… 59
　　（1）土壙と出土遺物 …… 59
第Ⅴ章　八反田（はったんた）遺跡C地区の成果 …… 61
　第1節　遺跡の概要 …… 61
　第2節　遺構と遺物 …… 63
　　1．古墳時代 …… 63
　　（1）方形周溝墓と出土遺物 …… 67
　　（2）円墳と出土遺物 …… 68
　　（3）土壙と出土遺物 …… 75
　　2．平安時代 …… 77
　　（1）土壙と出土遺物 …… 77
第Ⅵ章　まとめ …… 79

挿図目次

第1図　周辺遺跡図 …… 4
第2図　土層模式図 …… 7
第3図　調査遺跡位置図 …… 9
第4図　石立遺跡グリッド図 …… 11
第5図　石立遺跡遺構配置図 …… 12
第6図　1号住居跡実測図 …… 13
第7図　1号住居跡内出土土器実測図 …… 13
第8図　2号住居跡内出土土器実測図 …… 14
第9図　2号・3号住居跡実測図 …… 15
第10図　4号住居跡内出土土器実測図 …… 16
第11図　4号住居跡実測図 …… 17
第12図　溝遺構配置図 …… 18
第13図　3号溝（SD）内出土鉄器実測図 …… 18
第14図　4号溝（SD）実測図（1）…… 19
第15図　4号溝（SD）実測図（2）…… 20
第16図　4号溝（SD）実測図（3）…… 21
第17図　4号溝（SD）実測図（4）…… 22
第18図　4号溝（SD）内出土土器実測図（1）…… 23
第19図　4号溝（SD）内出土土器実測図（2）…… 24
第20図　4号溝（SD）内出土土器実測図（3）…… 25
第21図　4号溝（SD）内出土土器実測図（4）…… 26
第22図　4号溝（SD）内出土土器実測図（5）…… 27
第23図　4号溝（SD）内出土土器実測図（6）…… 28
第24図　4号溝（SD）内出土土器実測図（7）…… 29
第25図　7号溝（SD）実測図（1）…… 34
第26図　7号溝（SD）実測図（2）…… 35
第27図　7号溝（SD）内出土土器実測図（1）…… 36
第28図　7号溝（SD）内出土土器実測図（2）…… 37
第29図　1号石棺周辺地形測量図 …… 39
第30図　1号石棺実測図 …… 40
第31図　1号方形周溝墓測量図 …… 41
第32図　1号方形周溝墓周溝内遺物出土状態及び土層断面図 …… 42
第33図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（1）…… 43
第34図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（2）…… 44
第35図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（3）…… 45
第36図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（4）…… 46
第37図　1号方形周溝墓周溝内出土鉄器実測図 …… 47
第38図　1号方形周溝墓出土玉類実測図 …… 48
第39図　2号円墳測量図及び土層断面図 …… 49
第40図　3号円墳測量図及び断面図 …… 49
第41図　3号円墳周溝内遺物出土状態及び土層断面図 …… 50
第42図　3号円墳周溝内出土土器実測図（1）…… 51
第43図　3号円墳周溝内出土土器実測図（2）…… 52
第44図　4号円墳測量図及び断面図 …… 53
第45図　4号円墳周溝内遺物出土状態及び土層断面図 …… 53
第46図　4号円墳周溝内出土土器実測図 …… 54
第47図　4号円墳周溝内出土鉄器実測図 …… 55
第48図　1号・3号土壙（SK）実測図 …… 56
第49図　3号土壙（SK）内出土土器実測図 …… 57
第50図　4号・5号土壙（SK）実測図 …… 58
第51図　4号土壙（SK）内出土鉄器実測図 …… 59
第52図　2号土壙（SK）内出土土器実測図 …… 59
第53図　2号土壙（SK）実測図 …… 60
第54図　八反田遺跡C地区グリッド図 …… 61

第55図　八反田遺跡C地区遺構配置図 …… 61
第56図　1号方形周溝墓測量図 …… 62
第57図　1号方形周溝墓主体部実測図 …… 62
第58図　1号方形周溝墓周溝内遺物出土状態及び土層断面図 …… 63
第59図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（1） …… 64
第60図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（2） …… 65
第61図　1号円墳測量図 …… 68
第62図　1号円墳周溝土層断面図 …… 68
第63図　1号円墳周溝内遺物出土状態実測図 …… 69
第64図　1号円墳周溝内出土土器実測図（1） …… 70
第65図　1号円墳周溝内出土土器実測図（2） …… 71
第66図　1号円墳周溝内出土土器実測図（3） …… 72
第67図　1号円墳周溝内出土土器実測図（4） …… 73
第68図　1号土壙（SK）実測図 …… 75
第69図　2号・3号土壙（SK）実測図 …… 76
第70図　3号土壙（SK）内出土土器実測図 …… 77

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表 …… 5
第2表　1号住居跡内出土土器観察表 …… 14
第3表　2号住居跡内出土土器観察表 …… 16
第4表　4号住居跡内出土土器観察表 …… 16
第5表　3号溝（SD）内出土鉄器観察表 …… 18
第6表　4号溝（SD）内出土土器観察表 …… 30
第7表　7号溝（SD）内出土土器観察表 …… 38
第8表　1号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 …… 45
第9表　1号方形周溝墓周溝内出土鉄器観察表 …… 48
第10表　1号方形周溝墓出土玉類観察表 …… 48
第11表　3号円墳周溝内出土土器観察表 …… 51
第12表　4号円墳周溝内出土土器観察表 …… 53
第13表　4号円墳周溝内出土鉄器観察表 …… 55
第14表　3号土壙（SK）内出土土器観察表 …… 57
第15表　4号土壙（SK）内出土鉄器観察表 …… 59
第16表　2号土壙（SK）内出土土器観察表 …… 60
第17表　1号方形周溝墓周溝内出土土器観察表 …… 66
第18表　1号円墳周溝内出土土器観察表 …… 73
第19表　3号土壙（SK）内出土土器観察表 …… 78

図版目次

図版1	石立遺跡遠景（東より）	1号住居跡（石立）
	2号・3号住居跡（石立）	4号住居跡（石立）
	4号溝遺物出土状況（石立）	4号溝土層断面
	4号溝遺物出土状況	4号溝遺物出土状況
図版2	7号溝遺物出土状況（石立）	7号溝遺物出土状況
	7号溝調査後	1号石棺調査前（石立）
	1号石棺検出状況	1号石棺検出状況
	1号石棺墓壙	1号方形周溝墓（石立）
図版3	1号方形周溝墓遺物出土状況（石立）	1号方形周溝墓遺物出土状況
	1号方形周溝墓遺物出土状況	1号方形周溝墓遺物出土状況
	2号円墳（石立）	3号円墳（石立）
	3号円墳遺物出土状況	3号円墳遺物出土状況
図版4	4号円墳（石立）	4号円墳遺物出土状況
	3号土壙（石立）	4号土壙（石立）
	5号土壙（石立）	1号方形周溝墓（八反田C）
	1号方形周溝墓主体部石材出土状況	1号方形周溝墓主体部
図版5	1号方形周溝墓遺物出土状況（八反田C）	1号方形周溝墓遺物出土状況
	1号円墳（八反田C）	1号円墳
	1号円墳遺物出土状況	1号円墳遺物出土状況
	1号土壙（八反田C）	3号土壙（八反田C）

第Ⅰ章　序　　説

第1節　調査の組織

発掘調査（平成2年度）

調査主体　西合志町教育委員会

調査総括　園村　元三（教育長）

調査責任者　大住　清昭（社会教育課長）

調査事務　辻　末義（社会教育課社会教育係長）・安武　俊朗（社会教育課文化係長）・西川　正則（社会教育課主事）・松並　逸郎（社会教育課主事）・三苫　洋子（社会教育課主事）

調査主任　浦田　信智（社会教育課技師）

調査員　丸山　武水・宗須　和貴・前川真由美

調査指導　田辺　哲夫（日本考古学協会会員・町史編集委員長）・三島　格（肥後考古学会々長）・白木原和美（熊本大学文学部教授）・田中　義和（菊池市教育委員会）・熊本県教育庁文化課・宇土市教育委員会

調査協力

町文化財専門委員　後藤　文明・藤本　巌・加茂　商生・平田　錠一

町産業振興課・熊本県土木部耕地二課・熊本県菊池土木事務所

発掘作業

本田　哲郎・池田　記道・松岡　繁喜・池田　賢哲・池田　章・本田　照代

池田　洋子・宮本ツナグ・松岡　景隆・松岡ヤスエ・松川カナエ・野口キンチ

宮田アヤメ・宮本シオリ・松岡美智子・松岡　政次・松川　斉・池田　盛幸

松川　ミヤ・池田トメ子・上田ミツヨ・池田　光江・野口アヤ子・本田マチエ

池田　明子

報告書作成（平成5年度）

主　体　西合志町教育委員会

総　括　本田　孝（教育長）

責任者　松下　広美（社会教育課長）

事　務　安武　俊朗（社会教育課文化係長）・三苫　洋子（社会教育課参事）

主　査　浦田　信智（社会教育課技師）

整理作業

宮田　京子・緒方　敬子・正泉寺直美・上原　和子・宮本　繁子・大山　英子・村上　照美・前川真由美

調査にあたり、地元の区長さんを始め地権者の方々、役場の関係各位、その他多くの方々に多大な協力を得ました。本報告書を刊行するにあたり、ここに記して深く感謝いたします。

第2節　調査に至る経緯

西合志町では、農業の土地生産性向上のため土地基盤整備を積極的に推進してきたが、この地区は未整備で地区内道路も狭く、大型機械の利用も遅れていた。町では、この地に地域改善対策農業基盤整備事業を実施することにより、区画整理や道路及び用排水路を完備し、大型機械の導入を図り、労力の節減や土地生産性の向上に努め、農業所得の安定と近代的農業経営の確立を計画した。

この計画地域（約48.2ha）内及びその周辺には「周知の埋蔵文化財包蔵地」として生坪塚山古墳、生坪古墳、生坪石立遺跡、八反田遺跡、弘生原遺跡、八反畑遺跡、追原ハヤマ古墳が登録されていた。町は、この事業が「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」に基づくものであり、平成3年3月31日までの期限付き事業ということで、大規模な埋蔵文化財の散在には苦悩の極みをみた。しかし、事業の趣旨を深く思うとき、事業の着手と文化財の発掘調査は至上命題ということで、地元はもとより、県の文化課、農地管理課、県菊池事務所等関係者の協力体制が必要となった。具体的には、地区内の踏査を行い、必要な部分の試掘調査を実施して、調査対象面積を把握し、地元の協力を求め、工事での工法の工夫、発掘調査員の確保、県の文化課の支援等々により、平成元年8月より3ケ年の予定で発掘調査を開始した。

（大住）

第II章　遺跡の位置及び環境

西合志町は、阿蘇外輪山に発する白川などの河川より発達した沖積平野である熊本平野のほぼ中心部に位置する熊本市のすぐ北部に所在している。行政区では、菊池郡に属し、北側を泗水町、東側を合志町と菊陽町、南側と西側を熊本市と植木町にそれぞれ隣接している。当町は、海抜標高70m前後の平坦な台地上にあり、東西約4km、南北約8kmで北側が広がる逆三角形を呈し、面積は24.28km²、人口約24,000人である。

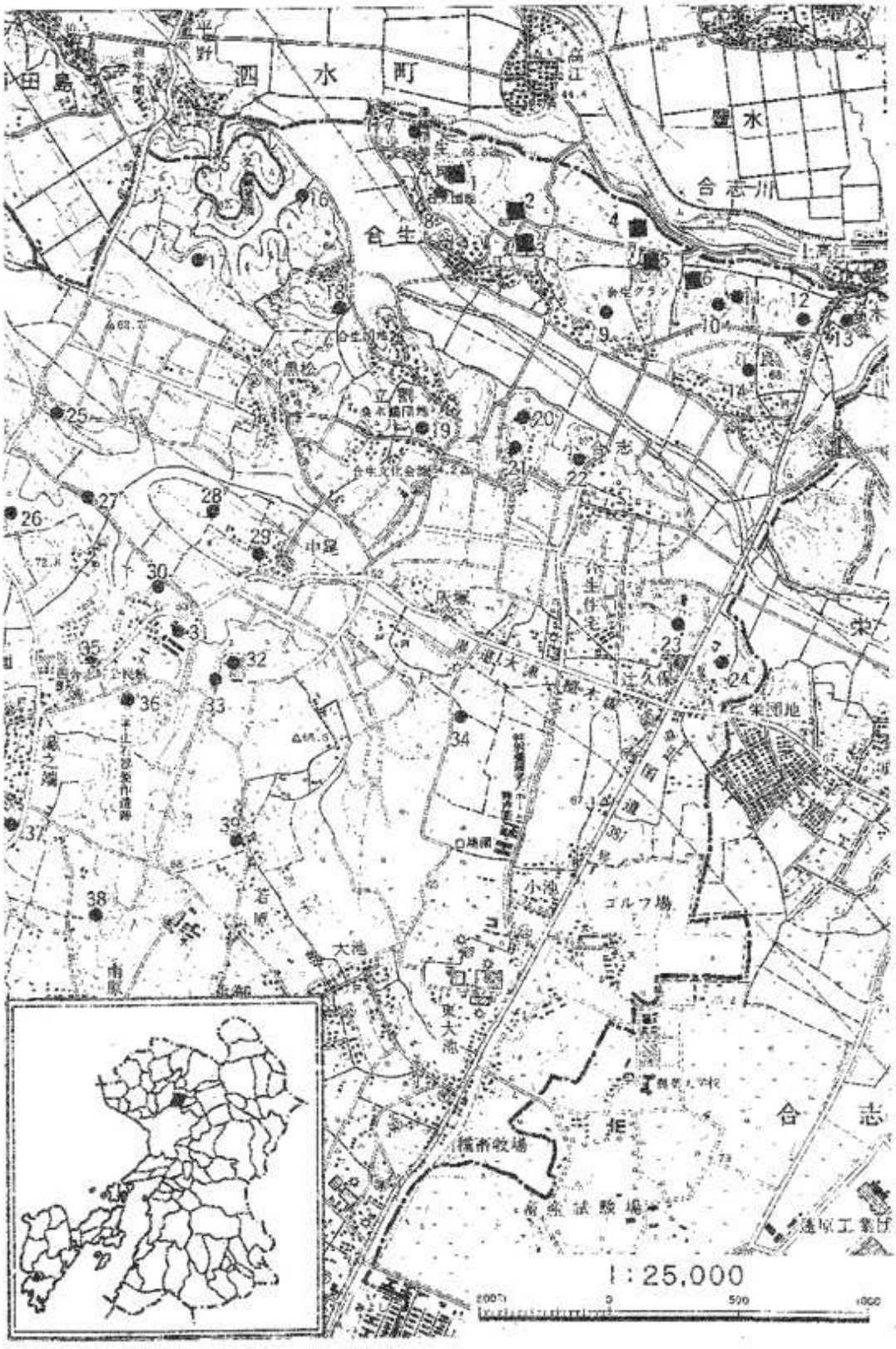
町の北部地域には、菊池川の支流である合志川と塩浸川・中尾川があり、この三本の川を中心に水田地帯が広がり、米・たばこ・すいか等を中心とした農業が盛んに営まれ産業の中心をなしている。町の南部地域は、熊本市と隣接しているため熊本市のベッドタウンとして住宅が密集し人口増加が著しいのが特徴である。

今回調査した遺跡は、町北部で泗水町との町境に流れる合志川の左岸台地にあり西合志町大字合生字漆崎、字石立に位置する。この台地は、海抜70m前後で水田面及び河川との比高差は約20～25mを測り、ほぼ平坦な台地が隣の泗水町まで続く。台地上には、縄文時代から中世にかけての古代の遺跡が多く点在しており、ほぼ台地全体が遺跡であると言っても過言ではない。

西合志町には、多くの遺跡があり現在約80カ所確認されている。遺跡の中で、最古の時期は縄文時代早期の遺跡でそれより古い旧石器時代に属する遺跡・遺物は、現在のところ確認されていない。

縄文時代の遺跡は、古い時期では早期に属し遺跡の西側の上生地区に位置する上生上の原遺跡がある。上生上の原遺跡は、県文化課により昭和63年から平成2年にかけて継続的に調査が行われ、押型文土器を伴う集石群が多数検出されている。さらに、遺跡の南で野々島地区に位置し、後期末の御領期に属し国指定史跡に指定されている二子山打製石器製作遺跡がある。二子山打製石器製作遺跡は、昭和40年から42年にかけて3回の調査が行われ、金峰山系の玄武岩質安山岩の母岩露頭の確認と、その周辺から安山岩製打製石斧の製品と未製品が多数出土し、また、菊池地方を中心に二子山製の石斧が広範囲に渡り分布していることも判明し、縄文時代の交易範囲を知ることのできる全国でも希な打製石斧の製作跡として、昭和47年に国指定史跡として指定を受けている。他にも、辻久保遺跡や中尾遺跡、枇杷山遺跡などの包含地がある。

弥生時代の遺跡は、著名な遺跡として高木原遺跡が上げられる。高木原遺跡は、同台地上で当遺跡の東側に位置しており、故坂本経堯氏により発見され弥生時代後期から平安時代にかけての遺物が採集されている。また、同時期の竪穴住居跡も調査されている。他には、昭和55年に田添夏喜氏により調査され、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出された小合志原遺跡や包含地



第1図　周辺遺跡図

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	概要
1	石立遺跡	弥生～古墳	H2年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
2	八反田C遺跡	弥生～古墳	H2年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
3	八反田A・B遺跡	弥生～平安	H元年調査　集落跡　方形周溝墓
4	八反原遺跡	弥生～平安	H2～3年調査　集落跡　方形周溝墓　円墳
5	八反畑遺跡	弥生～平安	H元年調査　集落跡
6	迫原遺跡	古墳～平安	H3年調査　集落跡　方形周溝墓
7	生坪城山古墳	古墳	円墳
8	石立家形石棺	古墳	S22年発見調査　蓋に並列三角文の線刻　人骨及び装飾品が出土
9	弘生城跡	中世	
10	迫原石棺	古墳	S58年調査　勾玉・ガラス玉・鉄刀等出土
11	迫原ハヤマ古墳	古墳	消滅　円墳　主体部は箱式石棺
12	迫原長塚古墳	古墳	消滅　箱式石棺
13	菊水原遺跡	弥生～古墳	集落跡
14	江良遺跡	弥生～古墳	包含地
15	黒松古墳群	古墳	スレ観音古墳など円墳6基
16	塚口横穴群	古墳	S46年調査　横穴墓3基　金環・鉄鏃品・土器等副葬品多数出土
17	黒松殺の迫遺跡	弥生	包含地　甕棺など
18	萩の迫横穴墓	古墳	横穴墓
19	宮園横穴群	古墳	横穴墓
20	玉蓮寺跡		寺院跡
21	合志郡家跡推定地	奈良～平安	
22	小合志古墳	古墳	消滅　円墳　横穴式石室　鉄刀・金環等副葬品出土
23	小合志原遺跡	縄文～弥生	S55年調査　集落跡
24	辻久保遺跡	縄文	包含地
25	笹塚古墳	古墳	円墳
26	永田石棺	古墳	箱式石棺
27	神田遺跡	古墳	H3年調査　集落跡
28	黒松岡原遺跡	縄文	包含地
29	中尾遺跡	縄文～古墳	包含地
30	永田原遺跡		包含地
31	八反田遺跡	縄文～弥生	包含地
32	枇杷田遺跡	縄文	包含地　押型文土器
33	中原支石墓	弥生	
34	後山遺跡	縄文	包含地
35	永田支石墓	弥生	1基
36	二子山石器製作遺跡	縄文	国指定　打製石器製作場　円墳2基
37	花岡遺跡		包含地
38	野出原遺跡		包含地
39	若原石棺遺跡	縄文～古墳	箱式石棺　縄文包含地

文献一覧

1．「全国遺跡地図　熊本県」　文化庁文化財保護部　1981年
2．「小合志原遺跡」　日本電信電話公社九州電気通信局　1981年
3．「迫原箱式石棺」　西合志町教育委員会　1983年
4．「菊池の文化財」　山中一義　菊池の文化財保存会　1965年

である江良遺跡、それに二子山石器製作跡の近くには水田支石墓や中原支石墓等がある。

古墳時代は、集落跡として古墳時代前期から後期にかけての竪穴住居跡が検出された沖田遺跡と、同じく古墳時代の竪穴住居跡が検出された上生上の原遺跡が上げられる。沖田遺跡は、県文化課により平成2年に調査が行われ、弥生時代後期の住居跡の特徴であるベッド状の遺構が残る古墳時代前期の住居跡が3軒検出されている。古墳は、町北部地域に集中しており、南部地域には現在のところ全く確認されていない。当町の代表的な古墳として、当遺跡の西側で合志川の左岸台地上にある黒松古墳群がある。黒松古墳群は、6基の大小円墳により構成されるが、道路を挟んだ西側にも泗水町に属するゴッテサン古墳など3基の円墳があり、同じ台地上に作られていることから黒松古墳群に属する古墳と考えられる。この古墳群の中でも、ヌレ観音古墳（1号）は主墳と考えられ、直径約40m、高さ約7mと熊本県内でも最大級の円墳として知られている。この古墳は、未調査のため内部主体などは不明である。また、ヌレ観音古墳の東約30mに所在する2号・3号墳は直径が10m前後、高さが1mの小円墳で、これも未調査であるが内部主体が木棺または箱式石棺と考えられる。このような古墳が、墳丘を築造当時に近い形で残しているのは珍しく貴重な古墳である。尚、黒松古墳群が所在する台地の北側崖面には平野横穴群や塚口横穴群、荻迫横穴群等の横穴墓が多数作られている。この中で、塚口横穴群は昭和46年に調査され、金環や鉄剣などの鉄製品、須恵器が多量に出土している。当遺跡が位置する台地上にも多くの古墳や石棺がある。まず、台地の西側先端部には直径約30m、高さ約4mの円墳（前方後円墳との説もある）である生坪塚山古墳があり、内部主体は不明だが墳頂部に立ててある石材が、この古墳の石棺の蓋石と言われている。当遺跡付近からは、少女の人骨と滑麻櫛が出土し、凝灰岩製の家形石棺蓋石に連続三角文を線刻した装飾石棺である石立家形石棺（姫塚とも呼ばれている）が調査されている。さらに、当遺跡の東側には、昭和56年に調査が行われ、箱式石棺の中から勾玉や丸玉などの装飾品、刀や鉾それに鹿角装刀子・鉄鏃などの鉄器類が豊富に出土した迫原石棺、さらに東にはハヤマ塚古墳などが多く点在している。

奈良・平安時代は、当遺跡の周辺台地上に点在する遺跡からはだいたい土器が混在して採集されていることから、周辺台地上にも大規模な集落が営まれていたと考えて良い。

中世の遺跡は、同台地上で南側に、記録がないことから詳細は不明であるが、堀りが残る弘生城跡がある。さらに、町の南部地域で須屋地区には須屋市蔵の居館跡とされ、土塁や堀りが一部残る須屋城跡がある。須屋城跡は、全国的に珍しい平城である。

第III章　遺跡の層位及び調査経過

第1節　遺跡の層位

層位は、今回の調査区も平成元年度調査区と同台地上に位置しており、基本的な遺跡の層序は昨年と同様の火山灰土層で、アカホヤやクロボクは耕作により削平され消滅している。このことから、遺構確認面は昨年と同じく第II層の明褐色粘質土層（クロニガ）で行った。

第I層　耕作土　（厚さ20～30cm）

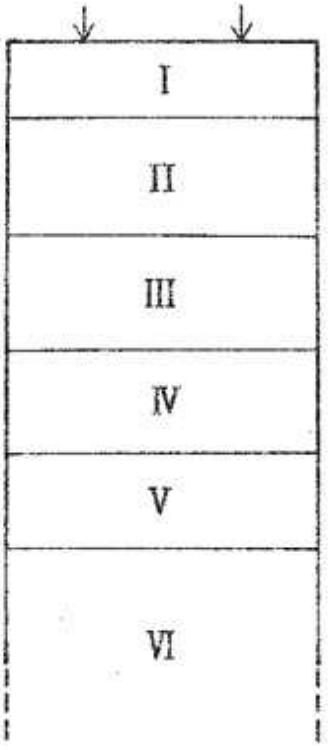
第II層　明褐色土（クロニガ）　（厚さ30～40cm）粘性を帯び、遺構確認面である。

第III層　褐色土　（厚さ30～40cm）粘性を帯び、中には同色のブロック状の塊が少量含まれる。

第IV層　明黒色土（ニガシロ）　（厚さ20～40cm）粘性を帯び、中には同色のブロック状の塊が多量に含まれる。

第V層　黄色土（ニガシロ）　（厚さ20～35cm）粘性を帯び、中には同色のブロック状の塊が多量に含まれる。

第VI層　赤黄色土（ローム）　粘性が強い。



第2図　土層模式図

第2節　調査の経過

調査は、昨年調査を行った八反田遺跡B地区のすぐ西側部分から台地の最も西側に位置している生坪塚山古墳付近までが本年度の工事対象区域で、試掘調査の結果工事対象区域の最も西側の台地縁部と東側の八反田遺跡B地区の近くに遺構の残存が認められたことから、この二カ所を今年度の発掘調査対象とし、前者を石立遺跡、後者を八反田遺跡C地区と遺跡名を付けた。

この調査対象区域より他の部分については、近年赤土の採土が行われかなりの深さにわたって旧地層は撹乱を受け遺構は破壊されており完全に消滅していた。

調査開始時期は、対象区域に麦やたばこ等の作付けが行われていることから、収穫が終わる

6月の下旬を予定とし準備を行い、6月25日より石立遺跡に機械を入れ調査を開始した。

以下、調査日誌に従い調査経過を説明する。

6月25日　機械（ユンボ・ブルドーザー各1台）を使い、石立遺跡の表土剥ぎを開始する。

6月27日　機械による表土剥ぎを終了。遺構検出作業を開始する。溝遺構が、確認され始める。

7月4日　調査区北側に位置し、調査前に確認していた箱式石棺の墳丘測量を開始する。また、表土剥ぎを行った部分から竪穴住居跡や墳丘が削平された古墳の周溝が検出され始めた。

7月6日　残っていた箱式石棺の墳丘の断面調査を開始する。

7月7日　墳丘を、地山まで下げた所ビニールなどが出土したことから、墳丘は近年の盛り土であることが判明。盛り土を全て剥し、石棺と周溝の確認作業を行う。

7月13日　石棺の床面を確認。床面まで、撹乱されていたが、床面には安山岩の割り石が敷かれているのを確認する。写真撮影を行い、実測を開始する。

7月17日　町広報の取材。石棺周辺の表土を剥ぎ、周溝の確認を行ったが周溝は無い。

7月18日　表土剥ぎ部分の遺構検出作業がほぼ終了。竪穴住居跡4軒と溝遺構3本、円墳3基、方形周溝墓1基、土壙などの遺構を確認する。調査区の一番南側にある、2号円墳の周溝から調査を開始する。

7月20日　2号円墳は、削平が著しく周溝が浅い。遺物の出土は、全く無い。また、併せて竪穴住居跡の調査も開始する。

7月23日　方形周溝墓の周溝の調査を開始

7月26日　竪穴住居跡は、4軒検出しており形態的特徴や出土遺物からすべてが弥生時代の竪穴住居跡と考えられる。

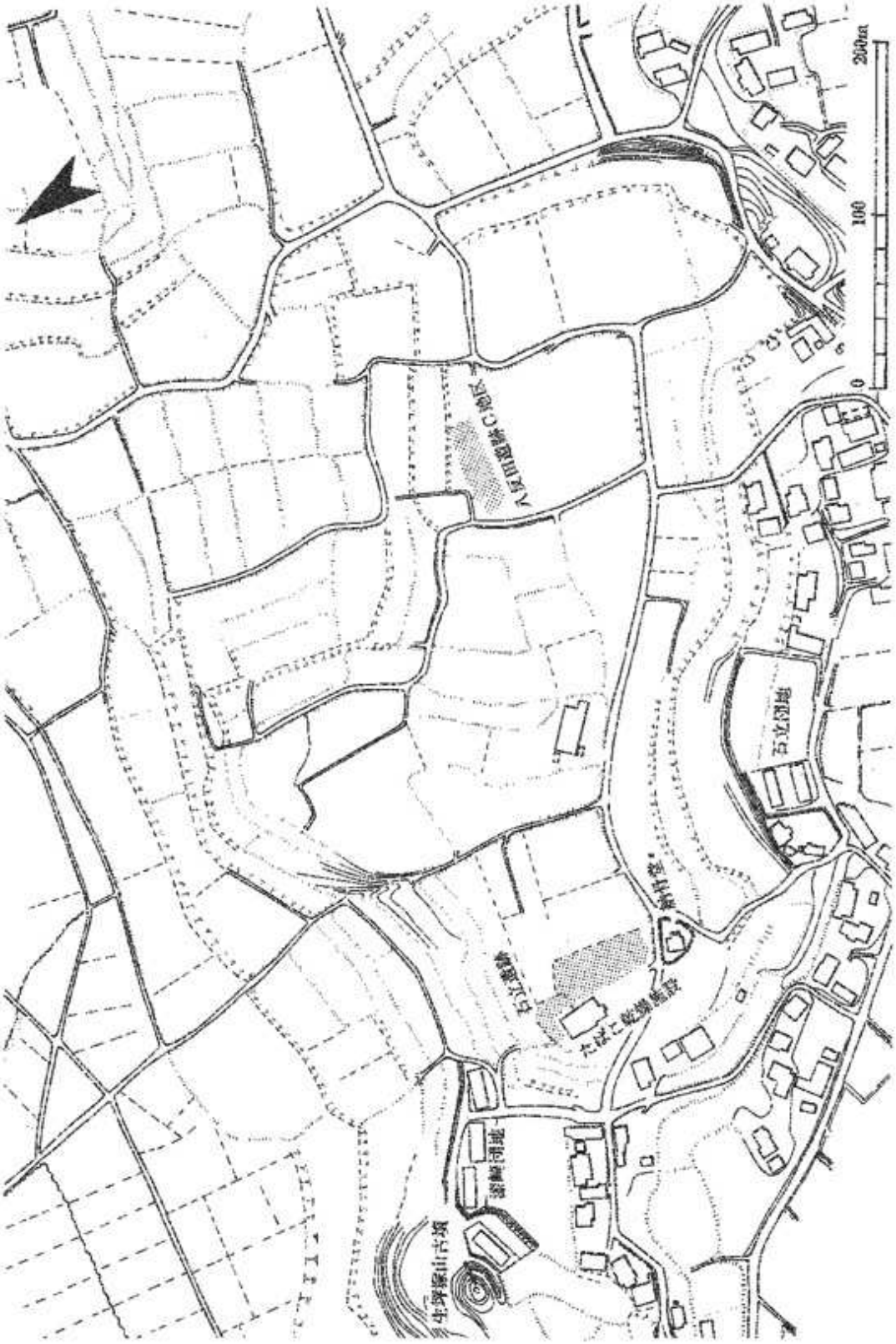
7月30日　方形周溝墓の主体部があったと考えられる撹乱部分から、阿蘇溶結凝灰岩の石片が出土、更に硬玉製の管玉が1点出土したことから、方形周溝墓の主体部の石材である可能性が高い。

7月31日　凝灰岩片の廃棄の土をふるいにかけたところ、勾玉1個と碧玉1個、管玉3個検出。4号円墳の周溝内基底面より土師器の小型丸底壺が出土。

8月1日　合志中学校1年生の生徒による遺跡発掘調査体験学習（3日まで）

8月2日　検出された3本の溝遺構の内、北東側にある7号溝より調査を開始。方形周溝墓の陸橋部付近と西側の周溝内より、土師器の高坏、壺、小型丸底壺、鉄製刀子などの遺物が出土。

8月6日　7号溝の埋土上層より、多量の弥生時代後期の土器が出土。埋土下層からは全く出土しない。また、本日より八反田遺跡C地区の表土剥ぎを開始する。



第3図　調査遺跡位置図

8月7日　八反田遺跡C地区の表土剥ぎを終了する。

8月14日　4号溝の基底面付近より、多量の弥生時代後期の土器が出土。しかし、上層面には全く出土しない。

8月27日　3号円墳の陸橋部付近の周溝内基底面より土師器の甕が出土、甕内には赤色顔料が残っており、甕に塗った痕跡が認められないことから、何らかの目的で甕に入れて運んで来たのであろう。

9月4日　部落開放同盟熊本県連合会委員長他視察

9月5日　石立遺跡の調査と平行して八反田遺跡C地区の遺構検出作業を開始する。

9月7日　八反田遺跡C地区の遺構検出作業がほぼ終了。遺構は、方形周溝墓1基と円墳1基それに土壙3基を検出。竪穴住居跡はない様である。円墳周溝の調査にはいる。

9月14日　調査員1名増員。

9月18日　円墳は、南側に陸橋部があり、北側部分は削平され周溝は残っていない。

9月21日　石立遺跡の調査は全て終了。

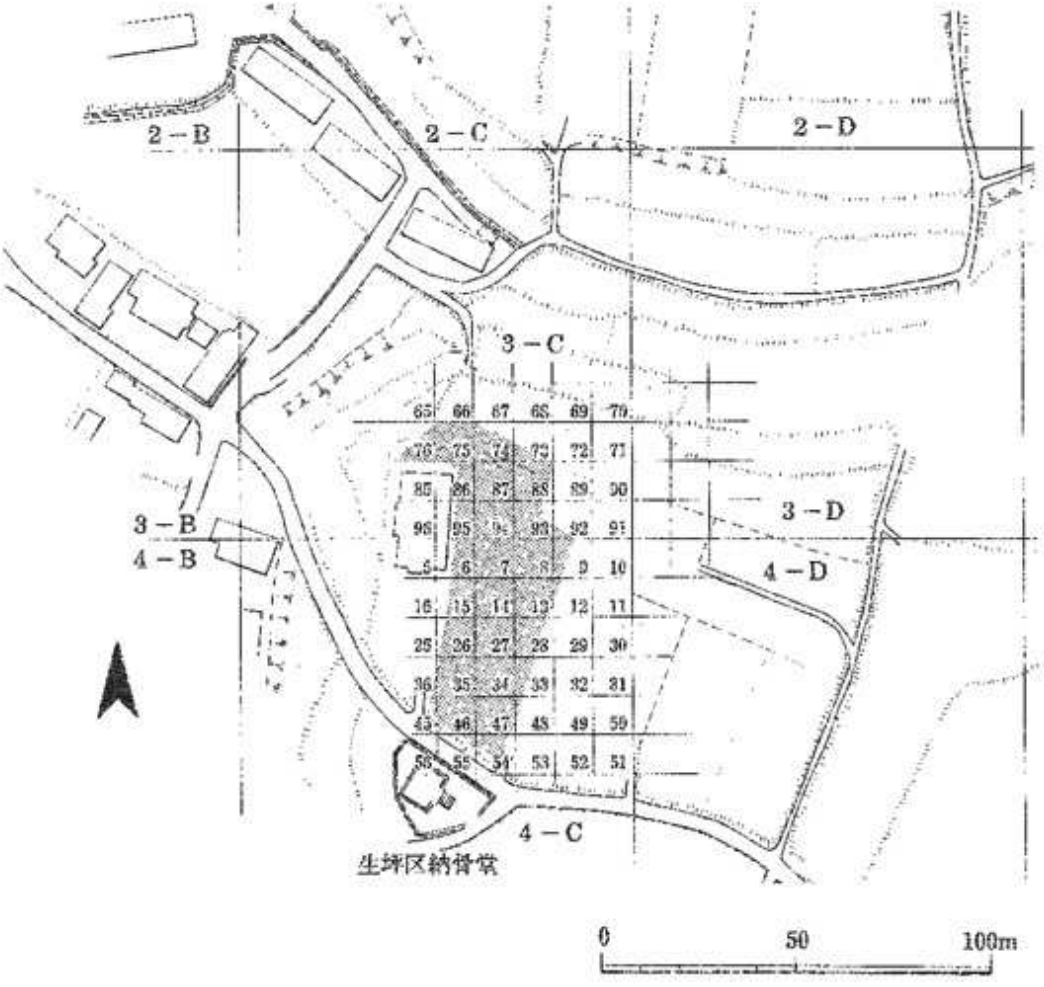
9月28日　方形周溝墓の主体部は、阿蘇溶結凝灰岩製の石棺と考えられ、半分程が攪乱を受け消滅している。

10月19日　八反田遺跡C地区の調査が全て終了。

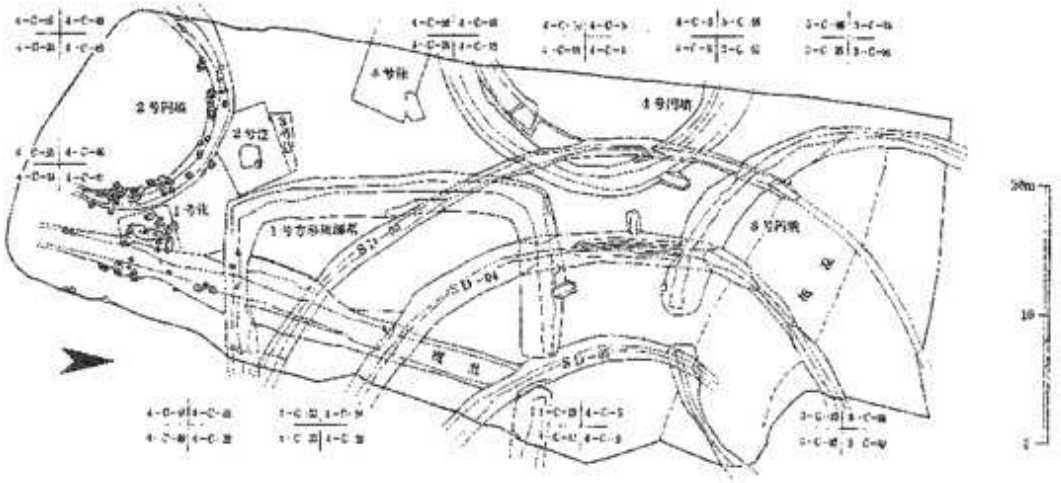
第Ⅳ章　石立（こくりゅう）遺跡の成果

第1節　遺跡の概要

石立遺跡は、平成元年度に調査を行った八反田遺跡A・B地区のさらに西側約400mの地点で、台地の一番西側端部の大グリッドでは3－Cグリッドと4－Cグリッドにまたがって位置している。さらに、北西へ約150m離れた地点には直径約30m、高さ約4mで円墳と考えられる生坪塚山古墳がある。古墳は、標高約65mの地点で調査地より一段下がった台地の西端部に築造されており、古墳の西側は水田面まで急激に段落ちする。調査面積は、約2,500m²で、調査地の東側部分については遺跡が広がるものと考えられるが、試掘調査により開墾や赤土取り



第4図　石立遺跡グリッド図



第5図　石立遺跡遺構配置図

により削平や撹乱を受け、遺跡が消滅していることが判明したことから、調査対象区域より除外している。遺跡は、弥生時代後期から奈良・平安時代にかけてのもので、検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居跡4軒それに環濠と考えられる溝遺構3本、古墳時代の方形周溝墓1基と円墳3基さらに単独の箱式石棺1基、奈良・平安時代の土壙墓1基である。遺跡の海抜標高は、遺構検出面で68m前後を測り、水田面との比高差は約27mである。

第2節　遺構と遺物

1．弥生時代

（1）竪穴住居跡と出土遺物

1号住居跡

遺構（第6図）　　出土遺物（第7図・第2表）

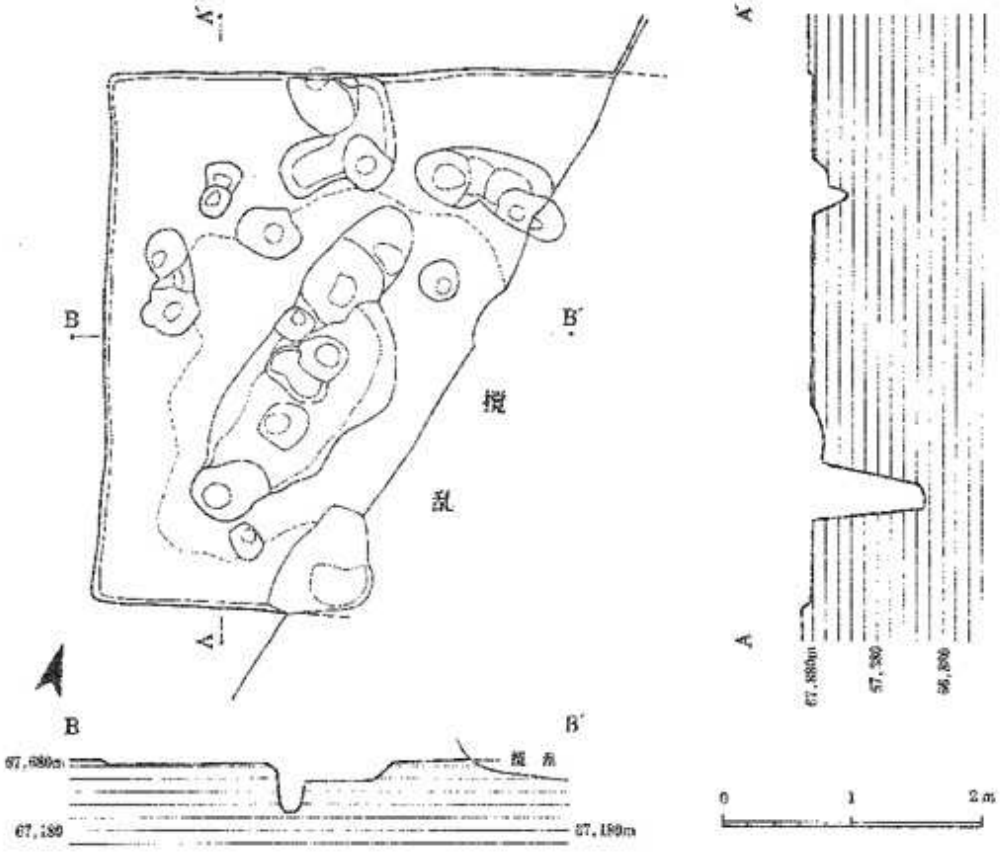
調査区の一番南側で、4－C－47グリッドに検出された住居跡で、東側が撹乱により破壊されていることから、全体規模は不明であるが短辺3.86mで長辺4.50m前後の隅丸長方形を呈するものと考えられる。全体的に削平が著しく、また後世のピットが多く掘り込まれていることから残存状態は非常に悪い。主軸は、N－70°30′－Eを取る。住居跡内には、中央付近に広がる硬化面と柱穴を確認しており、配置状況から4本柱の住居跡と考えられる。

遺物は、量的に少いが壺や甕が出土している。

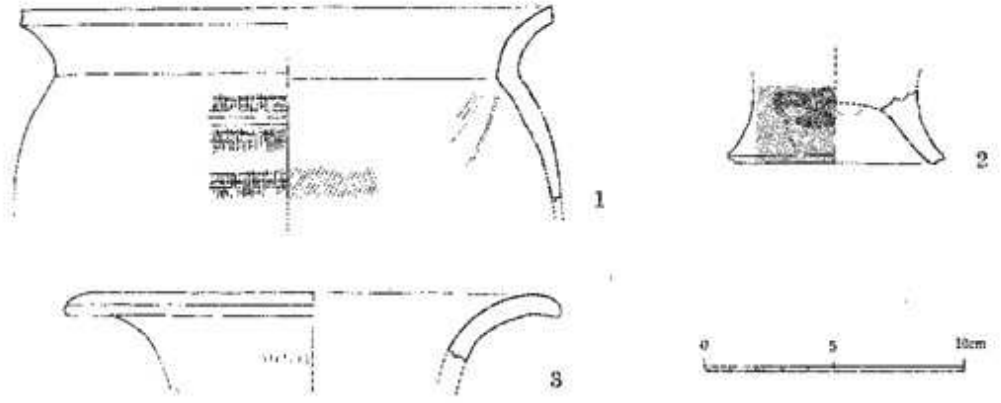
2号住居跡

遺構（第9図）　　出土遺物（第8図・第3表）

4－C－34・35グリッドに検出された住居跡で、西南側コーナーを2号円墳の周溝により削



第6図　1号住居跡実測図



第7図　1号住居跡内出土土器実測図

平されている。また、3号住居跡と切り合っており、3号住居跡が古く、当住居跡が新しい。全体規模は、長辺5.84m、短辺4.44mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸は、N－65°15′－Eを取る。住居跡内には、東側の壁際にベッド状の高まりが確認され、また、中央には炉跡と炉跡を中心にベッド状遺構の際まで広がる硬化面、それに柱穴を確認している。住居跡は、柱

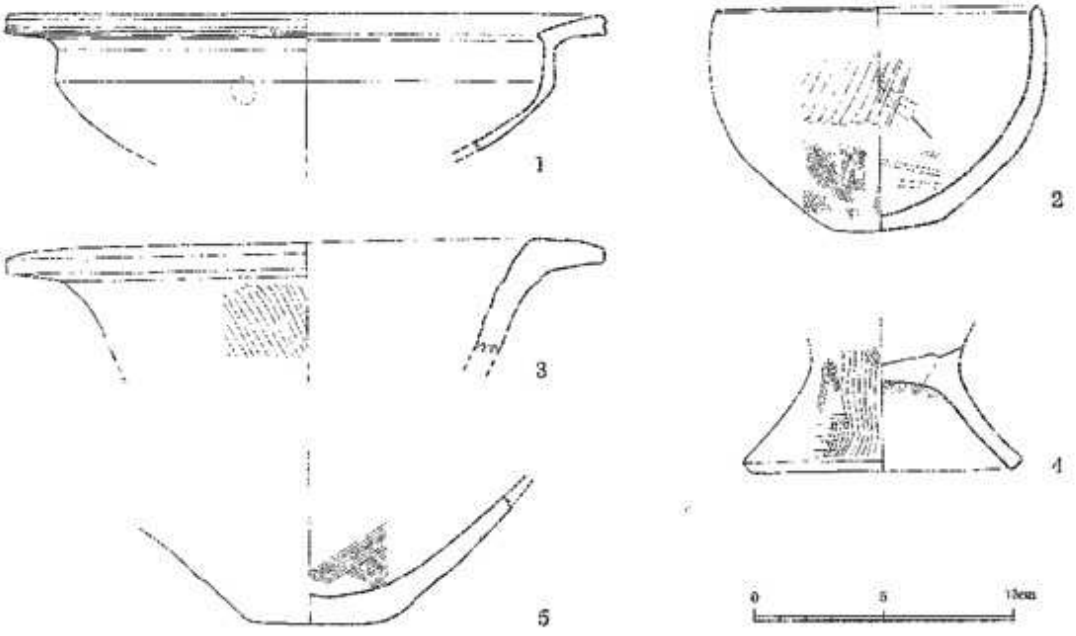
第2表　1号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
7-1	甕	口径 20.5 現存高 7.4	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は外反しながら外に開き端部はナデで平坦にしている。	金雲母及び長石、小石を多量に含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○胴部下半欠失
7-2	甕	現存高 3.0 底径 8.4	胴部に向ってやや外反気味に外に開く。端部はナデで平坦にしている。	角セン石を多く含み、金雲母及び小石を少量含む	淡赤褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○脚台
7-3	壺	口径 19.1 現存高 2.6	長頸壺の口縁部で外反しながら大きく開き、端部は丸味をもつ	角セン石及び長石、金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生

穴の配置状況から2本柱の住居跡と考えられる。

また、住居跡のほぼ中央で炉跡の部分に、奈良・平安時代と考えられる方形の2号土壙が掘り込まれている。

遺物は、量的に少いが壺や甕、浅鉢などが出土している。

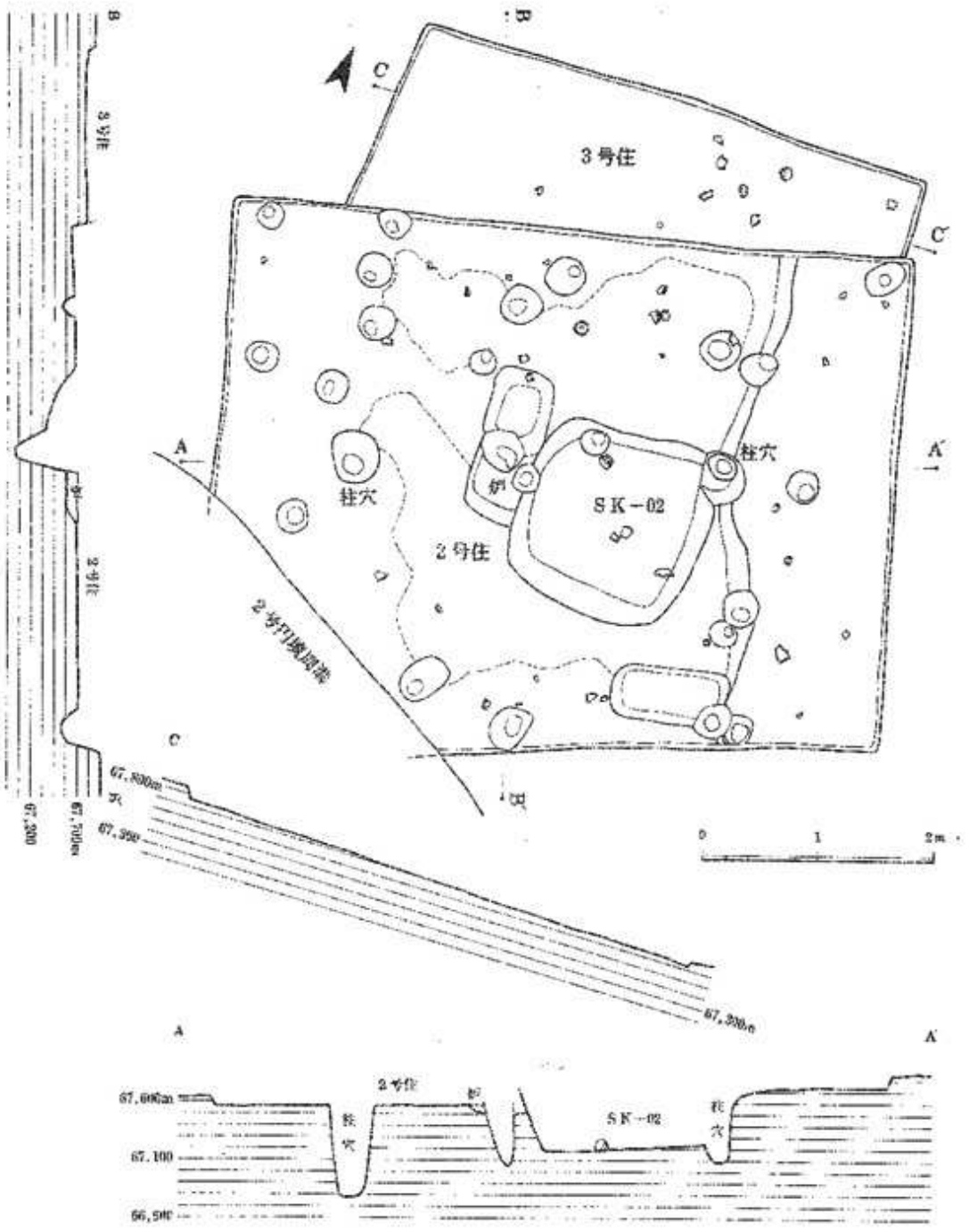


第8図　2号住居跡内出土土器実測図

3号住居跡

遺構（第9図）

4－C－34・35グリッドに検出された住居跡で、2号住居跡と切り合っており、2号住居跡より古い。住居跡は、2号住居跡に切られ3分の1程を検出しただけで全体規模は不明である



第9図　2号・3号住居跡実測図

が、一辺4.62mの隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。主軸は、N−81° 30′ −Eを取る。住居跡内からは、炉跡や硬化面それに柱穴などの検出は無い。

遺物は、量的に少く、また細片であることから図化出来なかったが、甕などが出土している。

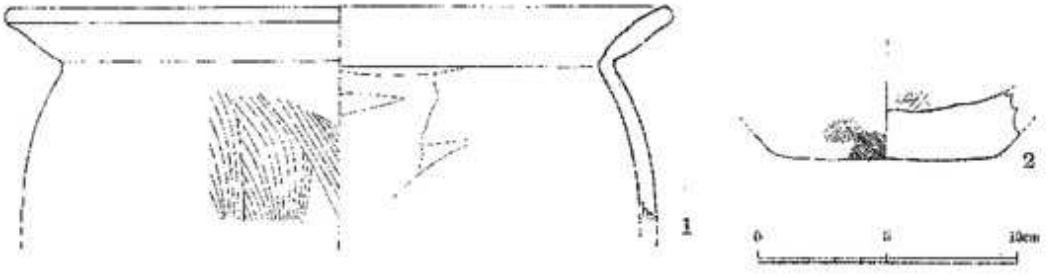
第3表　2号住居跡内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
8－1	浅鉢	口径 23.2 現存高 5.3	口縁部がほぼ近くに大きく外側に開き、端部に沈線を巡す。器壁が薄い。	長石及び小石を多く含み、角セン石を少量含む	淡黄色	良	ナデ	ナデ	○弥生
8－2	鉢	口径 12.4 器高 5.2 底径 4.2	体部は内湾しながら立ちあがり口縁部が内傾する。端部は尖がる。底部は丸底気味でレンズ状に膨らむ。	金雲母及び角セン石を少量含む	淡茶褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生
8－3	壺	口径 23.0 現存高 4.4	口縁部がほぼ直線に大きく開き端部は平坦である。長頸壺か？	角セン石及び金雲母、長石を多量に含む	淡黄色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目	不明	○弥生
8－4	甕	現存高 10.7 底径 4.7	端部に向って直線的に外に開き、端部はナデで平坦面を作り出している。内面の底部天井付近に砂が多量に付着している。	角セン石及び金雲母を多く含む	淡黄褐色	良	ハケ目	ナデ	○弥生 ○搬入
8－5	甕	現存高 4.9 底径 5.2	底部は丸底気味でレンズ状に若干膨らむ。	角セン石を多く含み、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	ナデ	ハケ目	○弥生

4号住居跡

遺構（第11図）　　出土遺物（第10図・第4表）

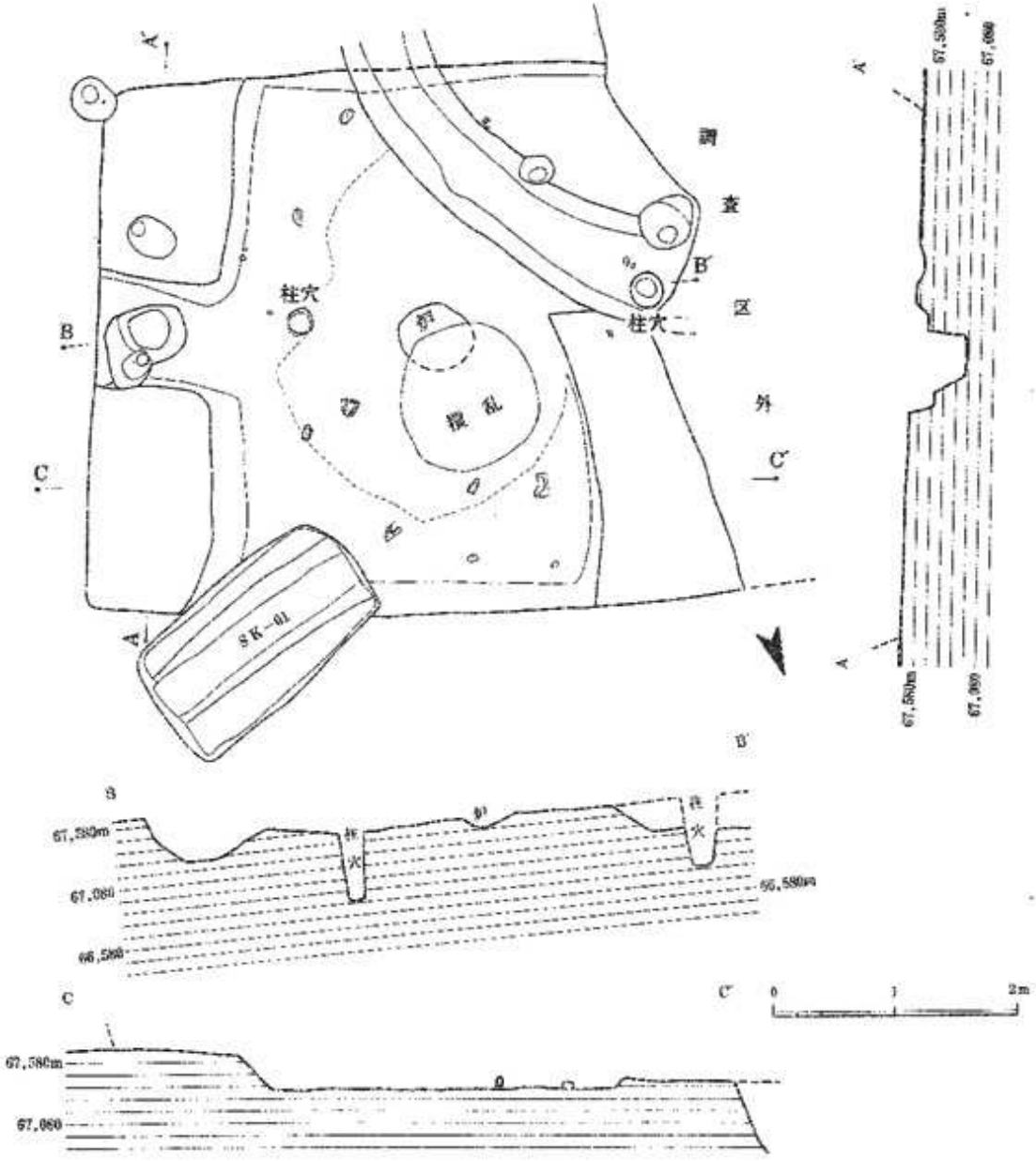
4－C－26グリッドに検出された住居跡で、西側部分は削平され全体の4分の3程を検出して



第10図　4号住居跡内出土土器実測図

第4表　4号住居跡内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
10－1	甕	口径 25.6 現存高 8.3	頸部でくの字に屈折した後口縁部がほぼ直線的に大きく外側に開き、端部は丸くなる。	角セン石及び金雲母を多く含み長石を少量含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目	ナデ	○弥生
10－2	壺	現存高 2.6 底径 8.7	若干丸底気味の底部	角セン石及び白色小石を多く含む	淡黄色	良	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生



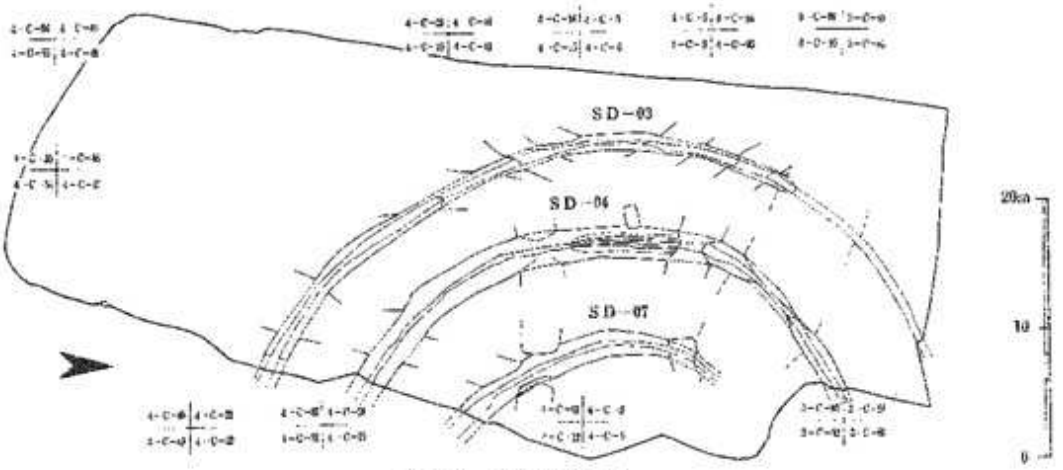
第11図　4号住居跡実測図

いる。住居跡の規模は、不明だが短辺4.50m、長辺5.50m程の隅丸長方形を呈するものと考えられる。主軸は、N－70°00′－Wを取る。住居跡内には、東側と西側の壁際にベッド状の高まりが確認され、また、ほぼ中央には円形の炉跡とそれを中心に広がる硬化面、それに柱穴を確認している。住居跡は、柱穴の配置状況から2本柱の住居跡と考えられる。

また、住居跡北側の壁の部分に古墳時代のものと考えられる、長方形の1号土壙が掘り込まれている。

遺物は、量的に少いが壺や甕などが出土している。

（2）溝遺構と出土遺物

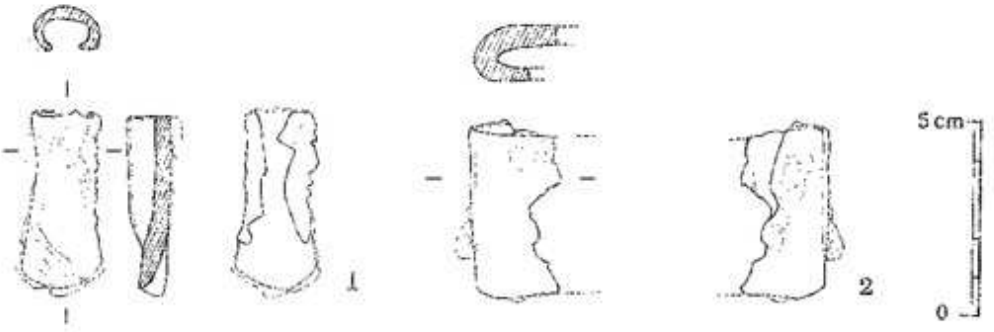


第12図　溝遺構配置図

3号溝

遺構（第12図）　　出土遺物（第13図・第5表）

遺構は、この時期のもので検出された3本の溝の内一番西側にあたり、調査区南側の4−C

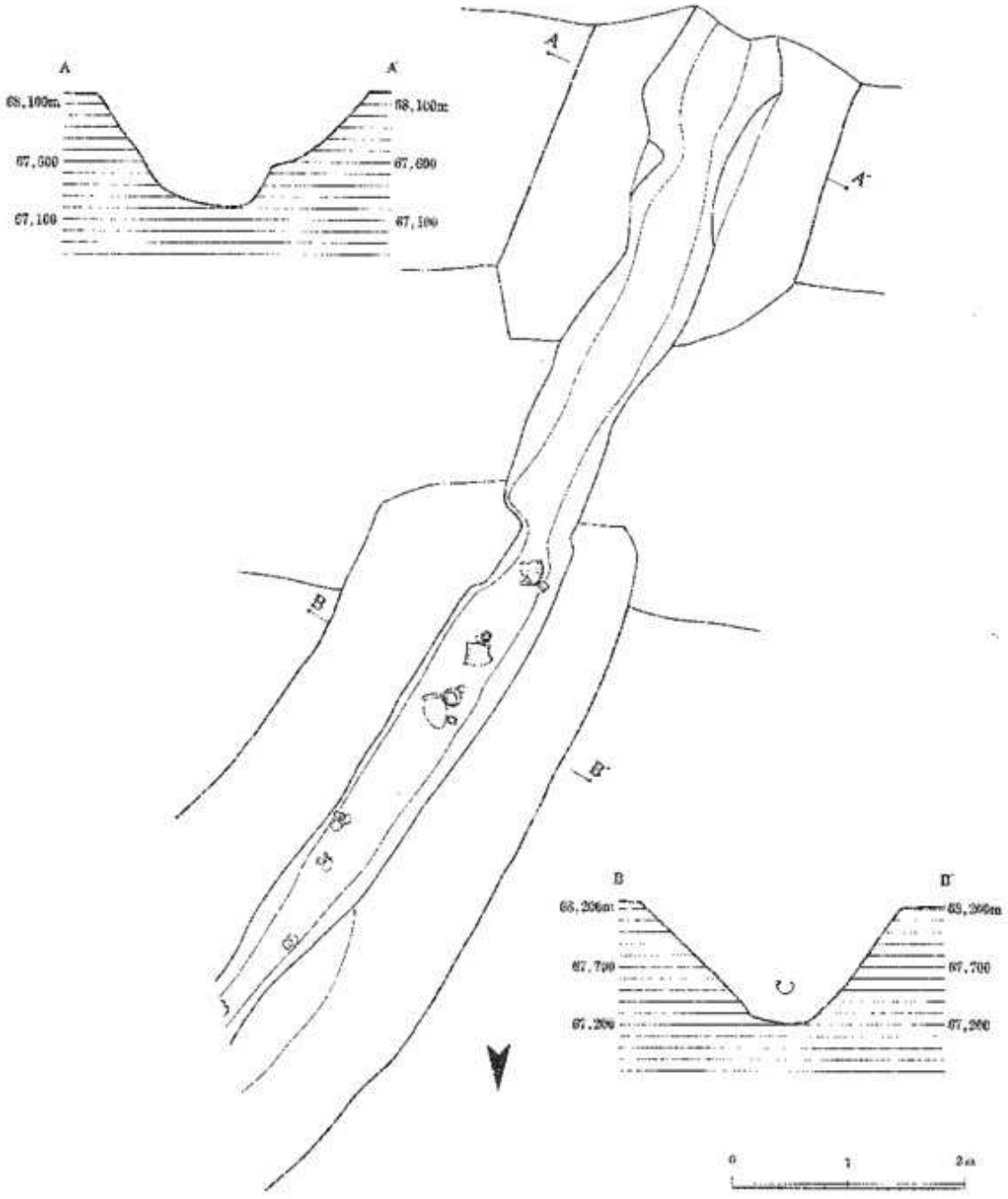


第13図　3号溝（SD）内出土鉄器実測図

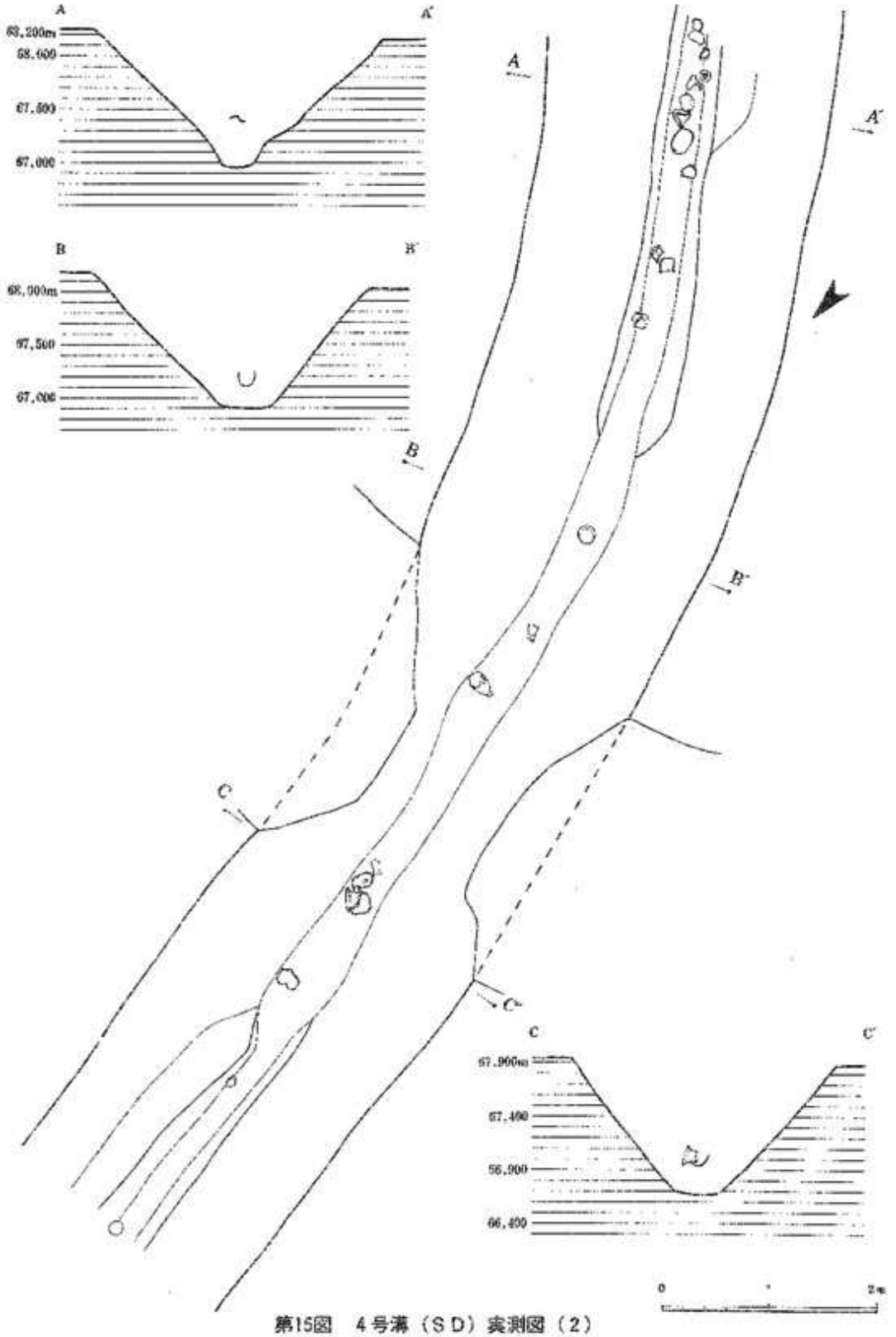
第5表　3号溝出土鉄器観察表

図版番号	種類	法量（cm）	特徴	備考
13 − 1	鉄斧	全長 4.5 幅 1.7〜2.1 厚 0.5	袋状斧でソケット部分は両側から折り曲げて作り出している。刃は両刃	完存品
13 − 2	鏃か？	長さ 4.5 現存幅 2.3 厚 0.4	袋状に折り曲げ鏃茎部を作り出している。	

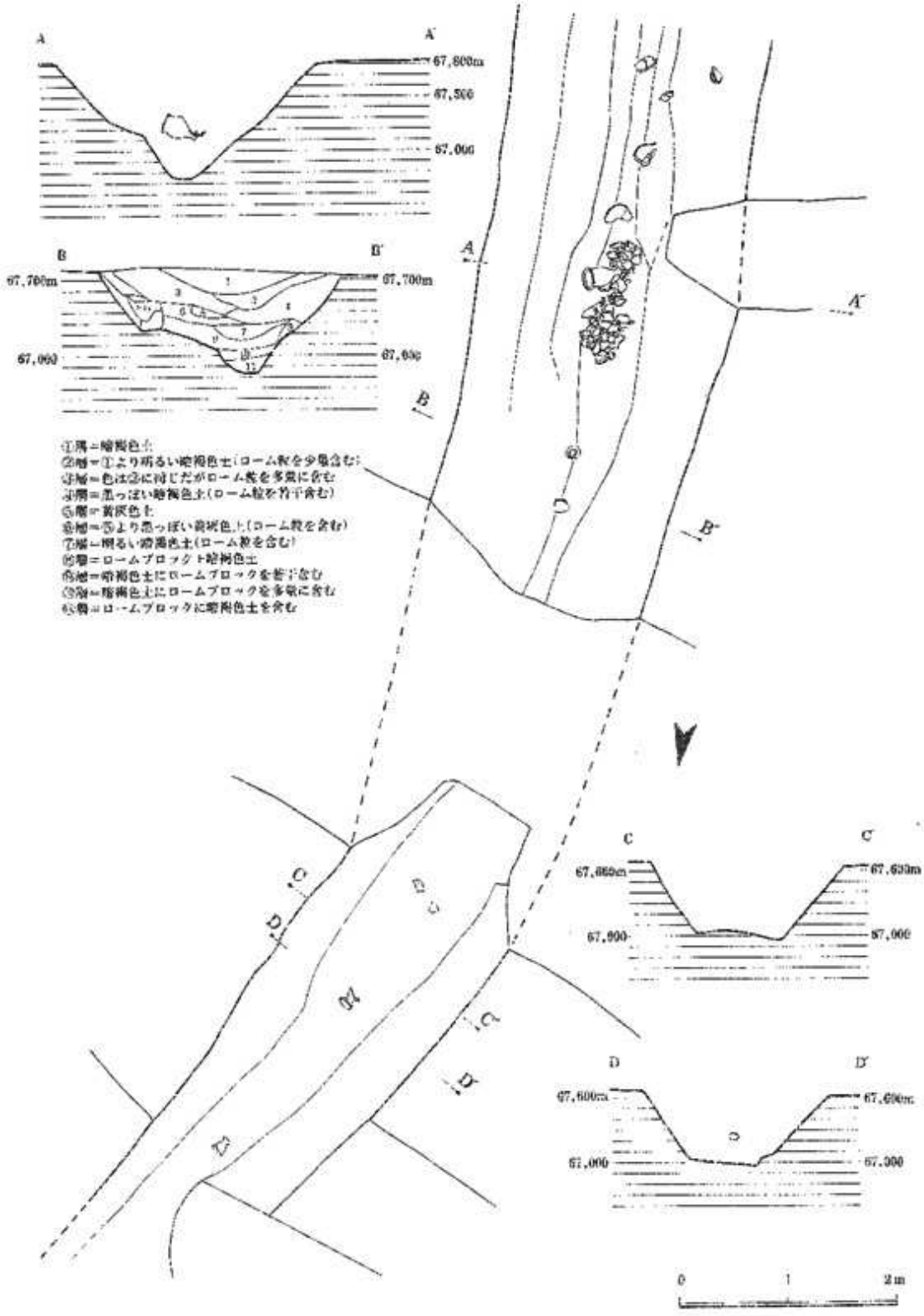
－33グリッドから北側の３－Ｃ－88グリッドにかけて半円状に巡る。溝は、４号溝より約4.5ｍ～６ｍ西側に掘られており、この溝より西側には溝の検出はない。溝の長さは、約60ｍ分を検出しており、両側共に開墾により削平を受け消滅していることから全体を伺い知ることは出来ないが、地形から考えて楕円形に巡るものと考えられる。溝の規模は、最大幅1.87ｍ、深さ



第14図　４号溝（ＳＤ）実測図（１）



第15図　4号溝（SD）実測図（2）



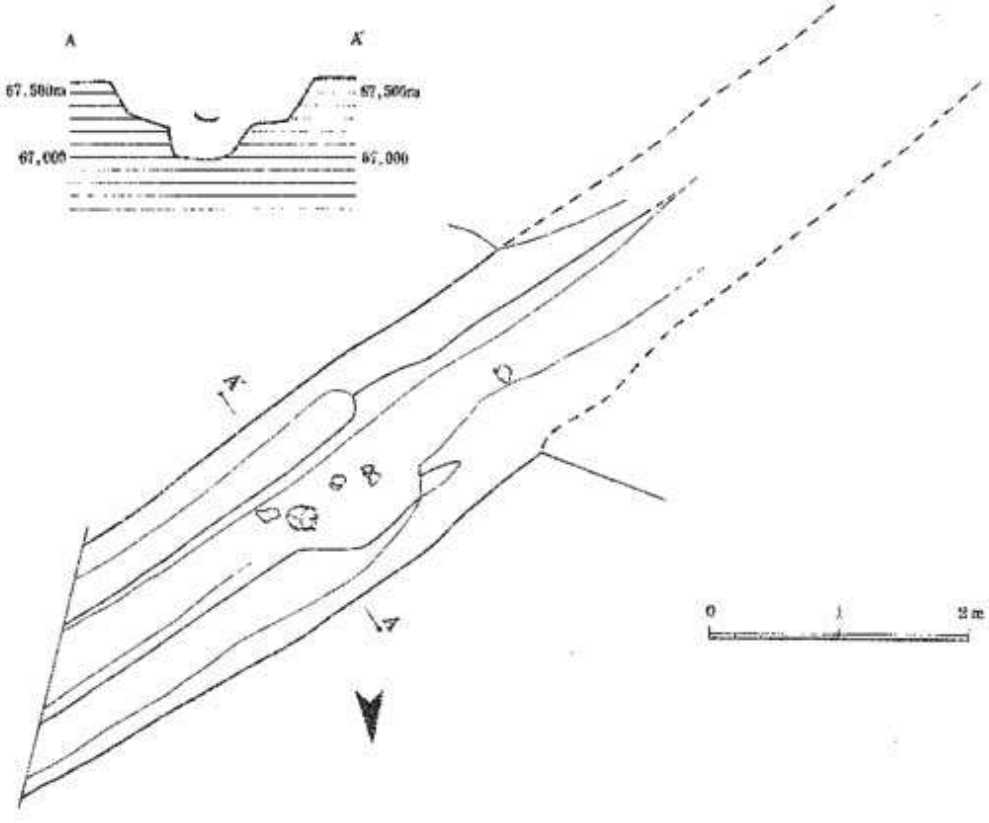
第16図　4号溝（SD）実測図（3）

0.71mを測り、断面形はU字形を呈する。遺構内からは、土器の出土は全くないが、埋土中で溝中位層よりやや上位から鉄斧と鋤先または鍬先と考えられる鉄器が2点出土している。溝内からは、土器の出土がないことから時期の判断はできないが、4号溝や7号溝を意識したように掘られていることから同時期で弥生時代後期の溝と考えた。

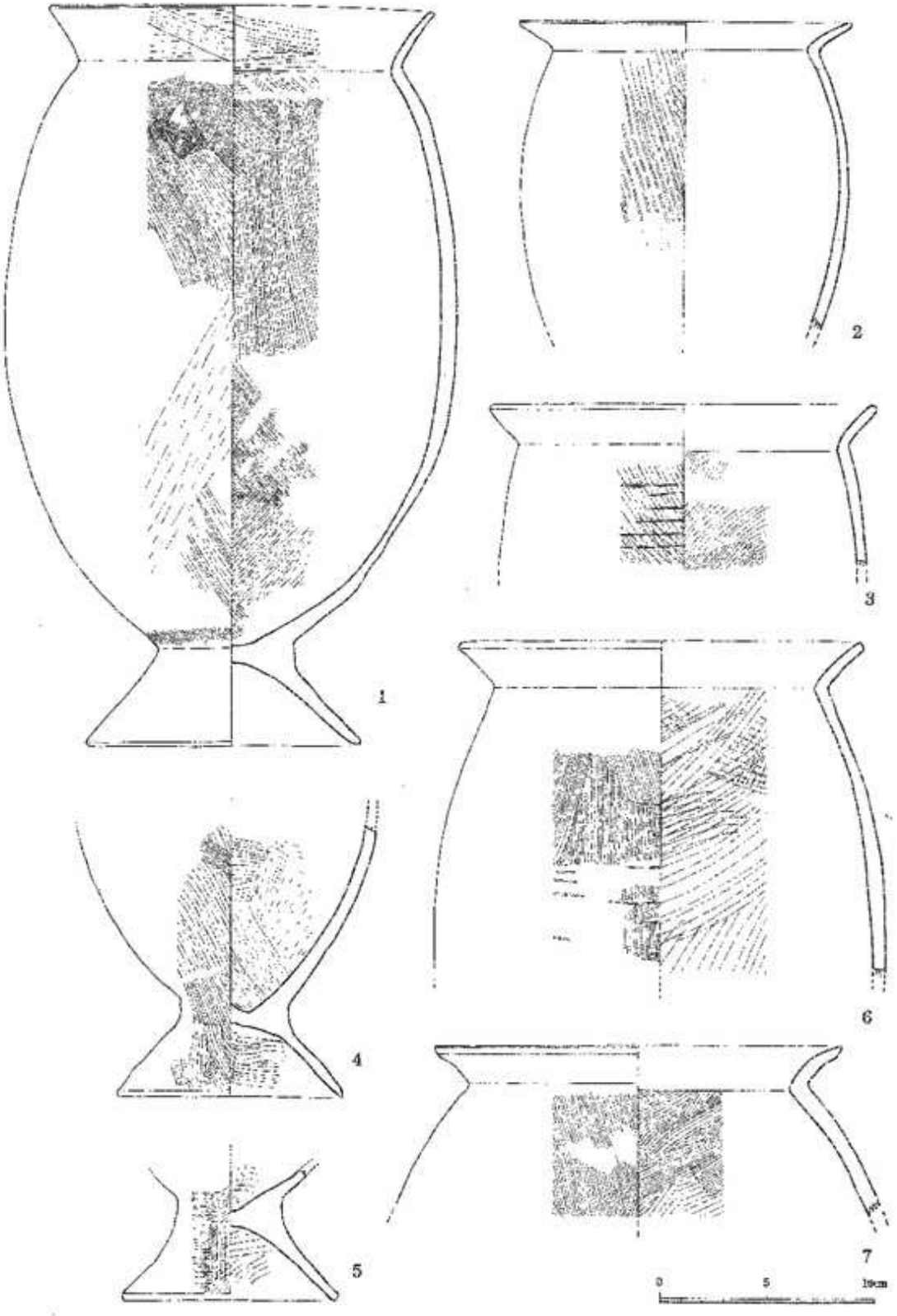
4号溝

遺構（第14～17図）　　出土遺物（第18～24図・第6表）

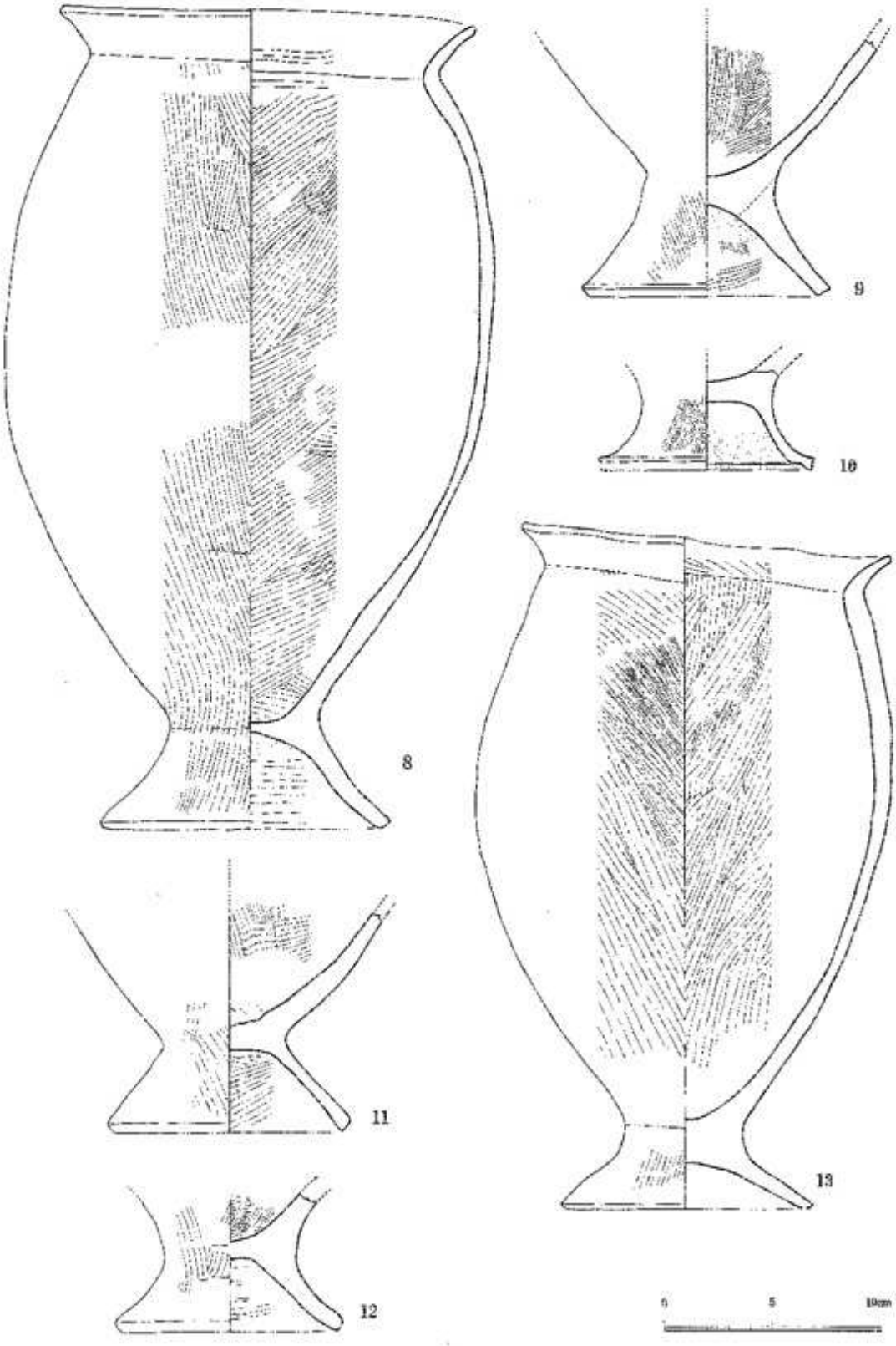
遺構は、検出された3本の溝の内真ん中にあたり、調査区南側の4－C－28グリッドから北側の3－C－93グリッドにかけて半円状に巡る。溝は、3号溝からは約4.5m～6m東側に、また7号溝からは約5m～5.5m西側に掘られている。溝の長さは約45m分を検出しており、両側共に開墾により削平を受けて消滅していることから全体を伺い知ることは出来ないが、円形または楕円形に巡るものと考えられる。溝の規模は、最大幅2.7m、深さ1.3m、基底部の幅は0.3mを測り、断面形はV字形を呈する。溝上面からは、土盛りや柱穴等の遺構は何も検出されなかった。溝内からは、多くの遺物が出土した。遺物は、溝の中位層あるいは上層からは



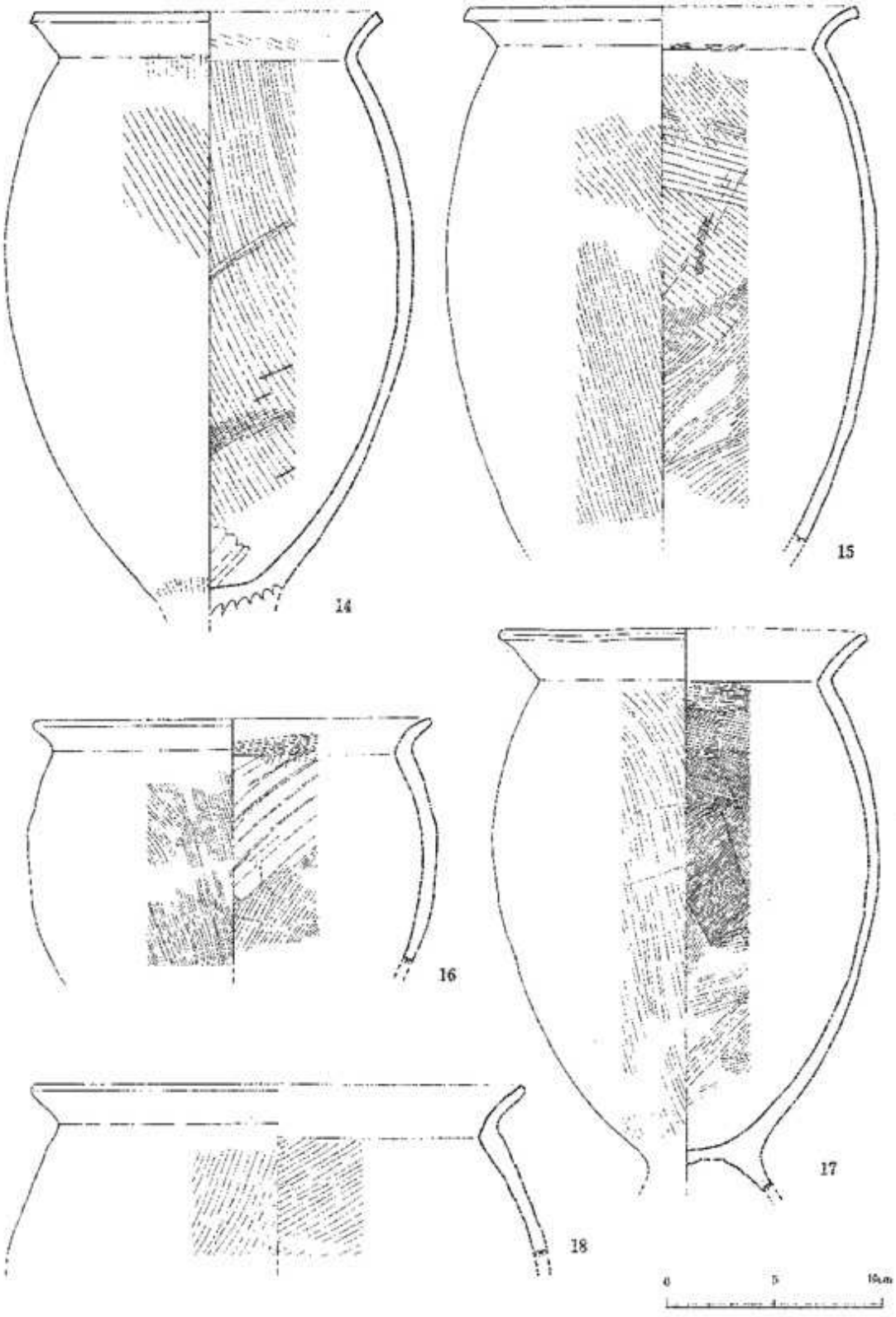
第17図　4号溝（SD）実測図（4）



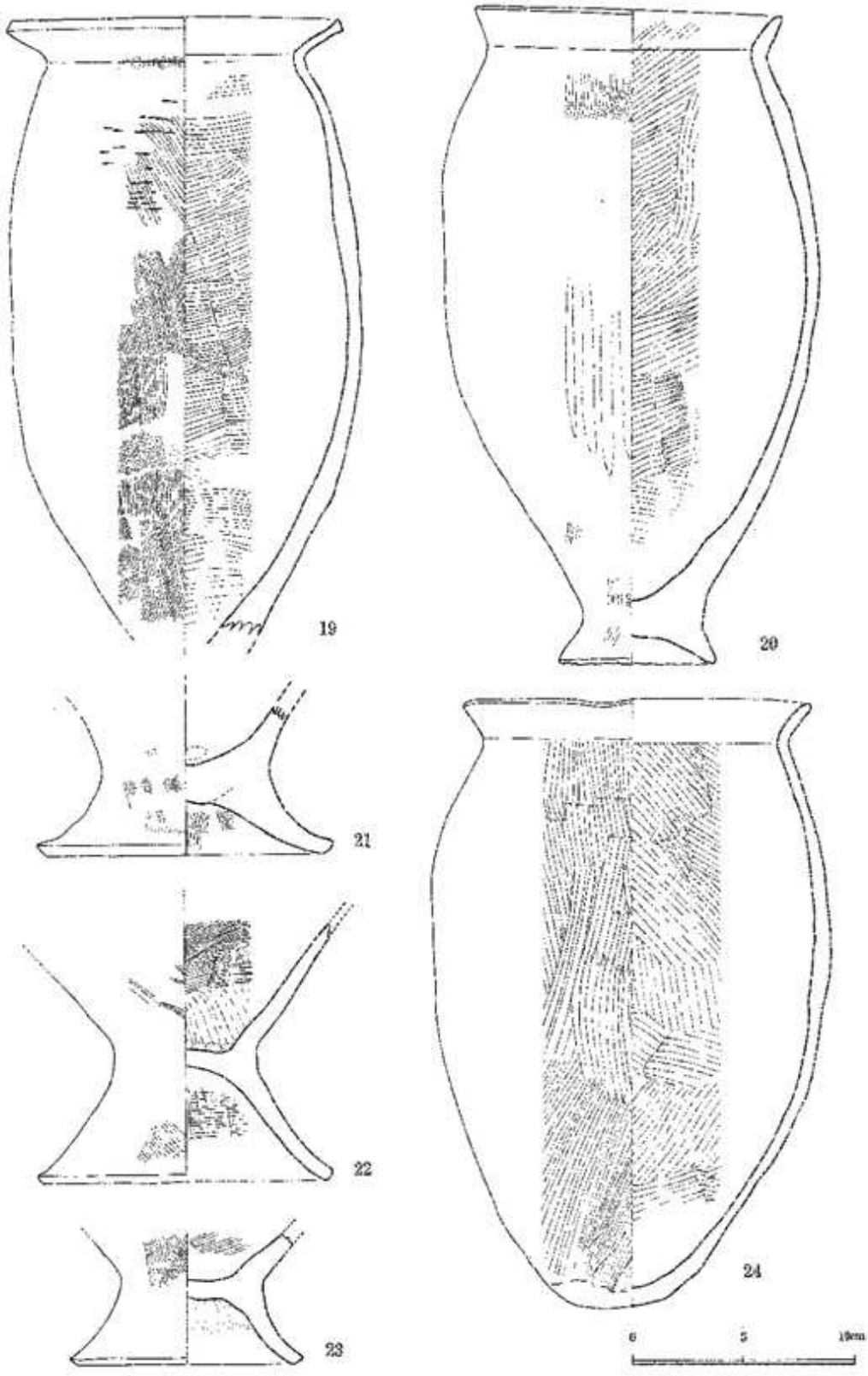
第18図　4号溝（SD）内出土土器実測図（1）



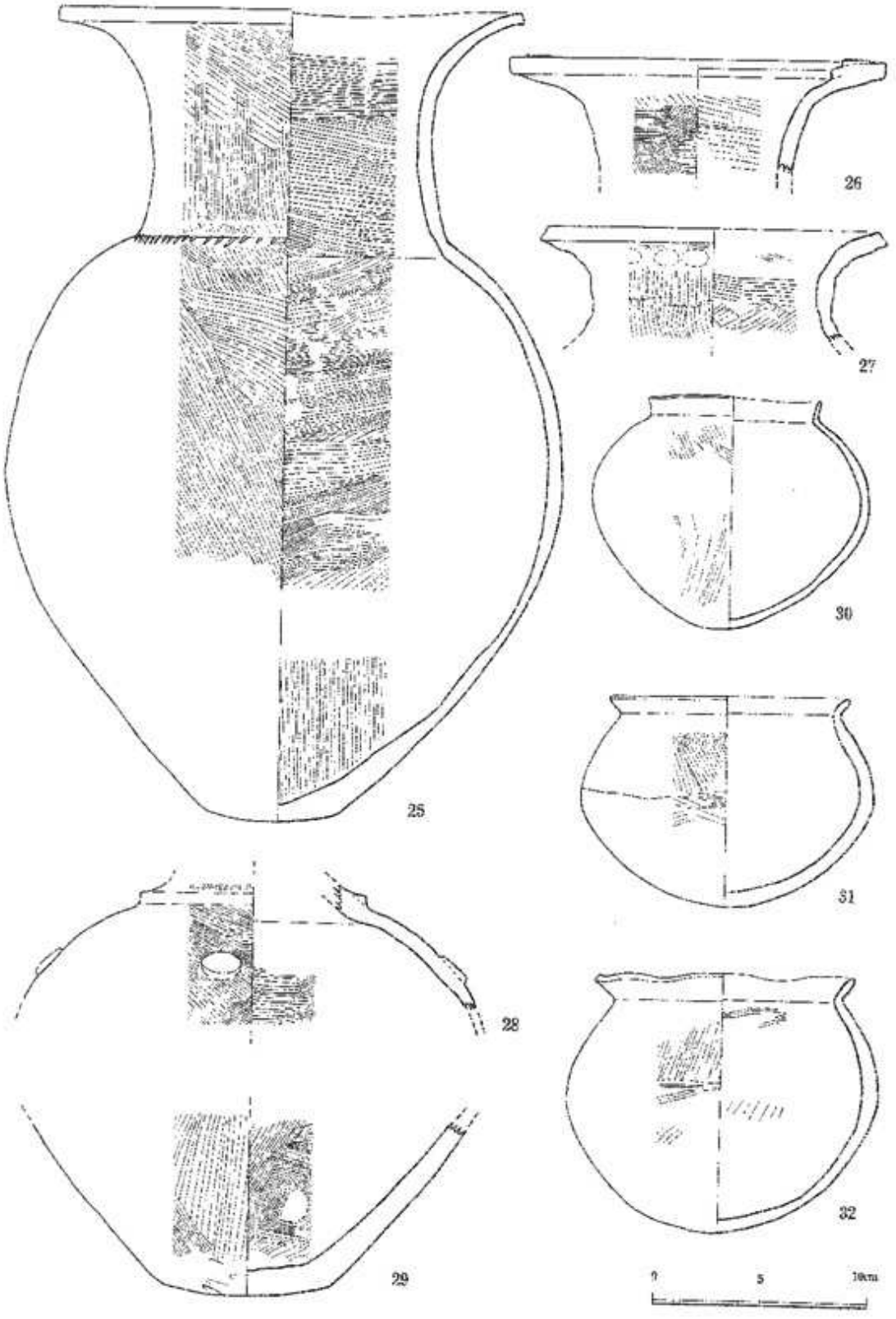
第19図　4号溝（ＳＤ）内出土土器実測図（2）



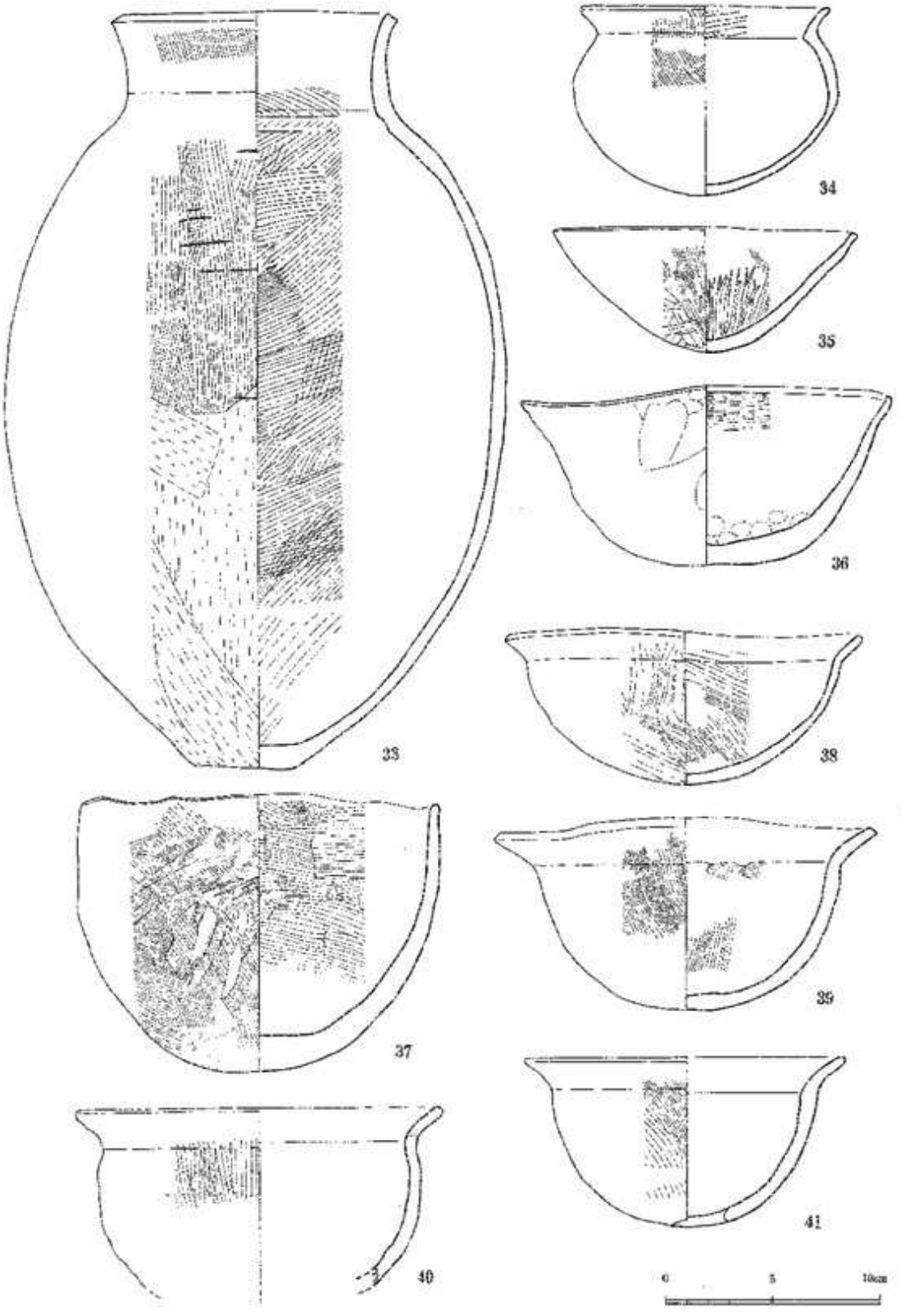
第20図　4号溝（SD）内出土土器実測図（3）



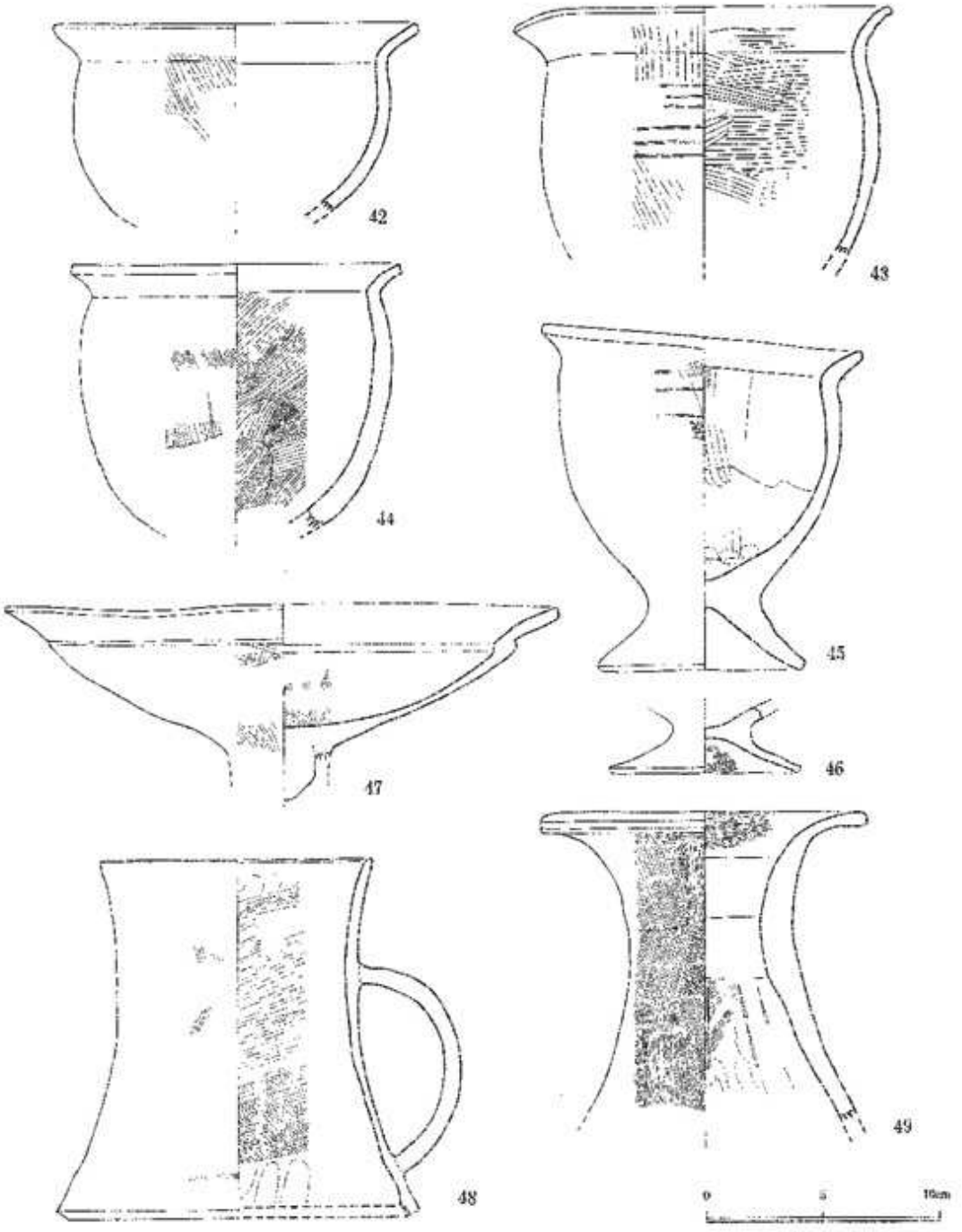
第21図　4号溝（ＳＤ）内出土土器実測図（4）



第22図　4号溝（ＳＤ）内出土土器実測図（5）



第23図　4号溝（SD）内出土土器実測図（6）



第24図　4号溝（SD）内出土土器実測図（7）

全く出土せず、そのすべてが基底面より約20cm上のレベルで出土している。また、遺物の出土位置は検出した溝のほぼ全域にわたっている。遺物は、完形品は全くないが、一部が欠損している程度で完形品に近いものが多く、甕や壺、鉢、台付鉢、高坏、ジョッキ形土器、器台など

第6表　4号溝（SD）内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
18－1	甕	口径 18.0 胴部径 21.2 脚台高 4.6 脚台径 12.9 器高 34.9	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は直線的に外側に開く。頸部は平坦である。胴部の中位にある最大径はあまり膨らまず細長である。脚台は低く端部に向って直線的に大きく外側に開く。	角セン石、金雲母、石英を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目 脚台ナデ	口縁部ハケ目 胴部ハケ目 脚台ナデ	○弥生
18－2	甕	口径 15.6 胴部径 15.4 現存高 14.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はやや外反気味に短かく外側に開く。胴部はあまり膨らまず、口径とほぼ同じである。	角セン石、金雲母、石英を多く含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部不明	○弥生
18－3	甕	口径 18.1 現存高 7.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は直線的に短かく外側に開く。端部はとがる。	金雲母、石英を多く含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部タタキの後ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	○弥生
18－4	甕	脚台高 4.5 脚台径 10.6 現存高 12.8	脚台は低く端部に向って直線的に大きく外側に開く。端部はやや尖がり気味である。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡赤褐色	良好	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
18－5	甕	脚台高 4.8 脚台径 10.2 現存高 6.1	脚部は低く端部に向って直線的に大きく外側に開く。端部はやや丸味をもつ	金雲母、角セン石、石英を含む	淡赤褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
18－6	甕	口径 18.9 現存長 15.4	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外側に開く。端部は平坦である。胴部はあまり膨らまず、外面にはタタキ目の跡が残る。	金雲母、角セン石を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部タタキの後ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○底部欠失
18－7	甕	口径 19.0 現存高 8.0	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反し短かく外側に開く。端部は尖がり気味である。	金雲母、角セン石を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○底部欠失
19－8	甕	口径 19.2 胴部径 22.5 脚台高 5.0 脚台径 13.4 器高 38.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反し短かく外側に開く。端部はやや尖がる。胴部はあまり膨らまず細長で低い脚台が付く。脚台はやや外反気味で外側に開く	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	○弥生 ○底部完形品
19－9	甕	脚台高 5.5 脚台径 11.5 現存高 11.9	脚台は低く、直線的に外側に大きく開く。端部は平坦にしている。脚台の内面大部分には多量の砂が付着する。	金雲母、角セン石、石英多含む	淡黄褐色	良好	底部ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	底部ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
19－10	甕	脚台高 3.4 脚台径 10.0 現存高 4.6	脚台は低く、端部に向って外反しながら外側に開く。端部付近の底側には段が付く。脚台の内面には多量の砂が付着する。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
19－11	甕	脚台高 4.3 脚台径 11.2 現存高 10.2	脚台は低く、端部に向ってやや内湾気味に外側に開く。端部は平坦にしている。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
19－12	甕	脚台高 3.5 脚台径 10.5 現存高 6.4	脚台は低く、端部に向って外反しながら外側に開き、端部は平坦である。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
19－13	甕	口径 17.1 胴部径 19.2 脚台高 4.0 脚台径 11.6 器高 31.8	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は外反し短かく外側に開く。端部は平坦である。胴部はあまり膨らまず細長で低い脚台が付く。脚台は直線的に大きく外側に開く。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	口縁部ナデ 胴部ハケ目 脚台ナデ	○弥生 ○完形品

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
20 - 14	甕	口径 16.5 胴部径 29.0 現存高 28.3	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反し短かく外側に開く、端部は平坦である。胴部はあまり張らず楕円で最大径が中位よりも上にある。	金雲母、石英を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○脚台欠失
20 - 15	甕	口径 18.4 胴部径 20.0 現存高 25.0	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反し短かく外側に開く、端部は平坦である。胴部はあまり張らず楕円で最大径が中位よりも上にある。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目	○弥生
20 - 16	甕	口径 18.6 胴部径 19.9 現存高 14.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は外反し外側に開く、端部はやや丸味をもつ。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目	○弥生
20 - 17	甕	口径 17.0 胴部径 18.0 現存高 26.3	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が直線的に短かく外側に開く、端部は平坦である。胴部はあまり張らず、最大径が中位より上にある。	金雲母を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○脚台欠失
20 - 18	甕	口径 23.0 現存高 8.0	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反気味に外側に開く、端部は平坦である。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
21 - 19	甕	口径 15.1 胴部径 15.8 現存高 28.0	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は直線的に外側に開く、端部は下垂で窪ませている。胴部は張らず最大径は中位にある。頸部上半にはタタキ目が残る。	金雲母、石英を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部タタキの後ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生
21 - 20	甕	口径 13.8 胴部径 17.0 脚台高 1.5 脚台径 7.1 器高 29.8	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は短かく直線的に外側に開く、端部は丸くなる。胴部は最大径が中位より上にありあまり張らない。底端に低い脚台が付く。	金雲母、角セン石を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目 脚台ナデ	○弥生
21 - 21	甕	脚台高 3.8 脚台径 13.7 現存高 6.7	低い脚台が付き、脚台は端部に向って外反しながら大きく外側に開く。脚台は内面天井部には多量の砂が付着する。	金雲母、角セン石を含む	淡黄赤褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
21 - 22	甕	脚台高 6.0 脚台径 13.2 現存高 11.6	脚台は底部に向ってやや外反気味に外側に開く、端部は平坦である。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
21 - 23	甕	脚台高 3.6 脚台径 10.6 現存高 5.9	脚台は低く、端部に向って外反しながら外側に開く、端部は平坦である。脚台の内面天井部には多量の砂が付着する。	角セン石を多く含む	淡黄褐色	良好	胴部ハケ目 脚台ナデ	胴部ハケ目 脚台ナデ	○弥生
21 - 24	甕	口径 15.7 胴部径 17.9 器高 27.5	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は短かくやや外反気味に外側に開く、端部は平坦である。胴部は最大径が中位よりやや上にあり、あまり張らない。底部は丸底で脚台は付かない。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目 底部ナデ	口縁部ナデ 胴部、底部ハケ目	○弥生 ○底部欠損
22 - 25	壺	口径 21.8 胴部径 26.1 器高 38.4	長い頸部をもち口縁部は大きく外側に外反し、端部はナデで平坦にしている。胴部は最大径が中位よりやや上にあり、大きく張らむ。底部は丸底である。頸部と胴部の境には刻み目が施されている。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ハケ目 胴部上半ハケ目 胴部下半ナデ	ハケ目	○弥生 ○底部穿孔
22 - 26	壺	口径 17.8 現存高 5.5	長頸壺の口縁部で、口縁部は大きく外側に外反する。端部はナデで平坦にしている。口縁部内側は幅2.5cm程の粘土を貼り肥厚させ、直径1.3cm厚さ2mmの円形の粘土を数ケ所貼り付けている。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 頸部ハケ目	口縁部ナデ 頸部ハケ目	○弥生 ○胴部、底部欠失

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
22 - 27	壺	口径 16.3 現存高 5.2	頸部で絞まった後口縁部は大きく外反し外側に開く、底部はナデで平坦にしている。	角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○胴部、底部欠失
22 - 28	壺	頸部径 10.6 現存高 5.8	頸部が絞まり、口縁部との境付近には断面三角形の1条の突帯を巡らす。突帯の下には直径1.7cm深さ2mm程の円形の粘土を貼り付ける。4個か？	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○口縁部、底部欠失
22 - 29	壺	底部径 7.6 現存高 8.3	底部は平底に近い丸底である。	金雲母、角セン石、石英を多く含む	淡茶褐色	良	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○口縁部、胴部欠失
22 - 30	甕類小型壺	口径 8.1 胴部径 13.0 器高 12.0	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が短かく直線的にやや外側に開く。端部は丸くなる。胴部は最大径が中位よりやや上にあり大きく張らむ。底部は丸底。	角セン石、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○ほぼ完形
22 - 31	甕類小型壺	口径 11.2 胴部径 13.7 器高 9.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が短かく直線的に外側に開く。端部は丸い。胴部は最大径が中位にあり大きく張らむ。底部は丸底。	角セン石を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○ほぼ完形
22 - 32	甕類小型壺	口径 12.2 胴部径 14.6 器高 12.2	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が短かく直線的に外側に開く。端部は丸い。胴部は最大径が中位よりやや上にあり大きく張らむ。底部は丸底。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	○弥生 ○完形品
23 - 33	壺	口径 13.5 胴部径 23.5 底径 4.6 器高 35.9	頸部で絞まった後直口気味に立ち上がり口縁部は外反する。端部はナデで平坦にしている。胴部は最大径が中位付近にある。底部は平底。胴部上半にはタタキが残っている。	金雲母、角セン石を含む	淡茶褐色	良好	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部タタキ目の後ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○弥生 ○ほぼ完形
23 - 34	壺類小型壺	口径 11.7 胴部径 12.4 器高 9.0	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は短かく外反しながら外側に開く。端部は丸い。胴部は最大径が中位より上にあり、底部は丸底。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ナデ	○弥生 ○完形品
23 - 35	壺	口径 14.3 器高 5.9	平底気味の底部からやや内湾気味に斜外側に開き次ぎに口縁部に向って立ち上がる。端部はナデで平坦にしている。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	へラ削りの後ハケ目	へラ削りの後ハケ目	○弥生 ○完形品
23 - 36	壺	口径 17.4 器高 8.5	底部からやや内湾気味に外側に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生
23 - 37	壺	口径 16.8 器高 7.4	丸底の底部から内湾しながら立ち上がり口縁部が外側に短かくさらに屈曲する。端部は平坦気味である。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○ほぼ完形
23 - 38	鉢	口径 16.8 器高 13.1	丸底の底部から内湾しながら立ち上がり口縁部は直口する。端部は丸くなる。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡赤褐色	良好	ハケ目	ハケ目	○弥生 ○完形品
23 - 39	鉢	口径 18.0 器高 9.0	丸底の底部から内湾しながら立ち上がり口縁部が外側に短かくさらに屈曲する。端部は平坦である。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生

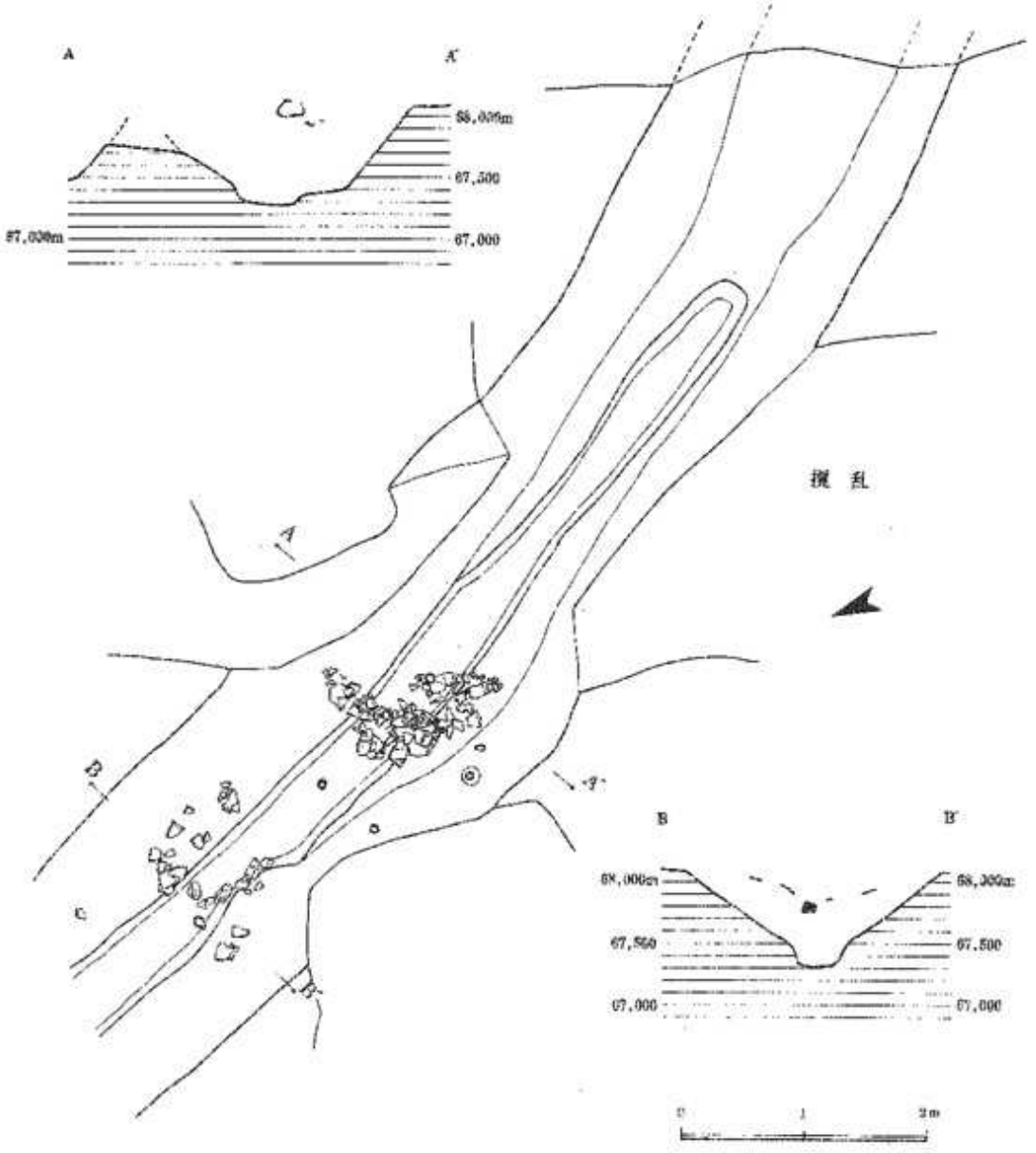
図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
23	鉢	口径 17.3 現存高 8.5	体部は内湾しながら立ち上がり口縁部が外側に短かく屈曲する。端部は平坦気味。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○底部欠失
25	鉢	口径 18.0 現存高 8.0	丸底の底部から内湾しながら立ち上がり口縁部が外側に外反気味に短かく屈曲する。端部は丸くなる。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○底部欠失
24	鉢	口径 15.6 現存高 8.2	体部は内湾しながら立ち上がり口縁部が外側に短かく屈曲する。端部は平坦にしている。	金雲母、角セン石を含む	淡茶褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○弥生 ○底部欠失
24	鉢	口径 16.2 現存高 10.8	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が短かく外側に開く。端部は丸くなる。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目 頸部上半にタタキ目が残る	ハケ目	○弥生 ○底部欠失
24	鉢	口径 14.2 現存高 11.3	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が短かく外側に開く。端部は平坦である。	金雲母、角セン石を含む	淡赤褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目	○弥生 ○底部欠失
24	台付鉢	口径 13.8 脚台高 3.0 脚台径 8.9 器高 15.9	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が短かく外側に開く。端部は丸い。脚部はあまり張らずに底部に接続する。脚台は裾部に向って外反しながら大きく外側に開き、端部は丸味をもつ。	金雲母、角セン石、石英を含む	淡茶褐色	良好	口縁部・頸部 ハケ目の後ナデ 脚台 ナデ	口縁部 ナデ 頸部 ハケ目の後ナデ 脚台 ナデ	○弥生 ○接痕完形 ○頸部上半に成タタキ目が残る。
24	脚台	脚台高 1.7 脚台径 8.2 現存高 2.8	低い脚台で裾部に向って直線的に大きく外側に開く。端部は平坦気味である。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ	○弥生
24	壺形	口径 22.7 現存高 8.5	体部が内湾気味に立ち上がり口縁部の所で内側に屈曲し明瞭な段が付く。口縁部はさらに大きく外側に開く。端部は平坦気味である。頸部との接合面ではずれている。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○弥生 ○頸部欠失
24	ジョッキ形土器	口径 11.6 器高 15.4 底径 15.5	底部より丸味をもって立ち上がり中位付近より外反しながら外側に開き頸部に至る。端部は尖がり気味である。器厚は4mmと薄い。転5cm位の調整が行く。	金雲母を多く含む	淡赤褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目	○弥生
24	器台	口径 14.0 現存高 13.4	上位にくびれがあり、口縁部は外反しながら大きく外側に開く。端部は平坦で1条の沈線が巡されている。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目	口縁部 ハケ目 頸部上半 ナデ 頸部下半 ヘラ削りの後ナデ	○弥生

が出土している。

7号溝

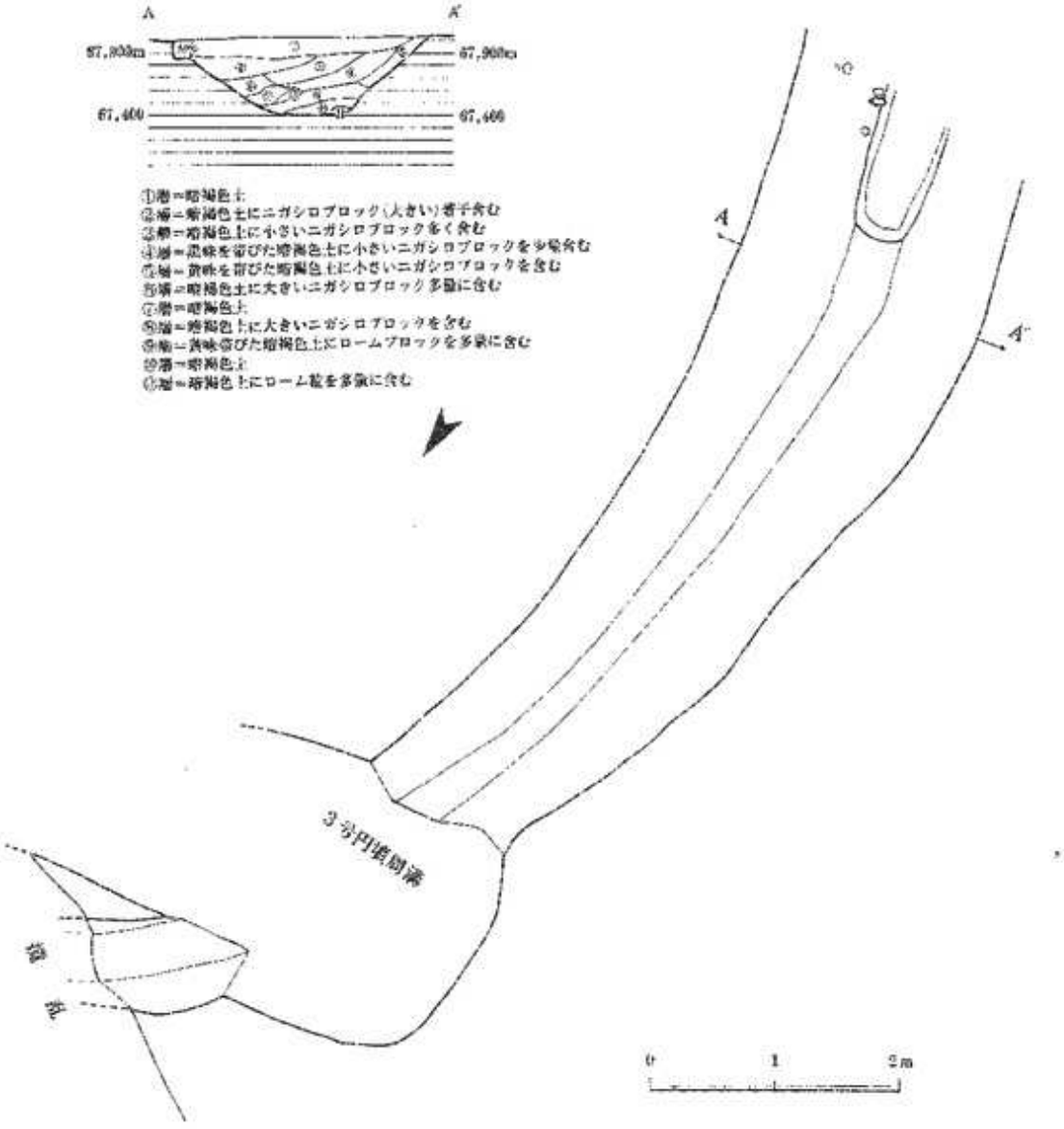
遺構（第25図）　　出土遺物（第26～27図・第7表）

遺構は、検出された3本の溝の内一番東側にあたり、調査区南側の4－C－13グリッドから北側の3－C－93グリッドにかけて半円状に巡る。溝は、4号溝から約5m～5.5m東側に掘られている。溝の長さは約20m分を検出しており、両側共に開墾により削平を受けて消滅して



第25図　7号溝（ＳＤ）実測図（1）

いることから全体を伺い知ることは出来ないが、円形または楕円形に巡るものと考えられる。溝の規模は、最大幅2.0m、深さ0.8m、検底部の幅は0.3mを測り、断面形は上部が広がり傾斜が緩いV字形を呈する。溝上面からは、土盛りや柱穴等の遺構は何も検出されなかった。溝内からは、溝の中位層あるいは下層からは遺物は全く出土せず、そのすべてが上層面より出土している。また、遺物の出土位置は1号方形周溝墓の陸橋部付近に限って集中して認められ、その他の部分には全く認められなかった。遺物は、完形品は全くないが、同一個体のものが割



第26図　7号溝（SD）実測図（2）

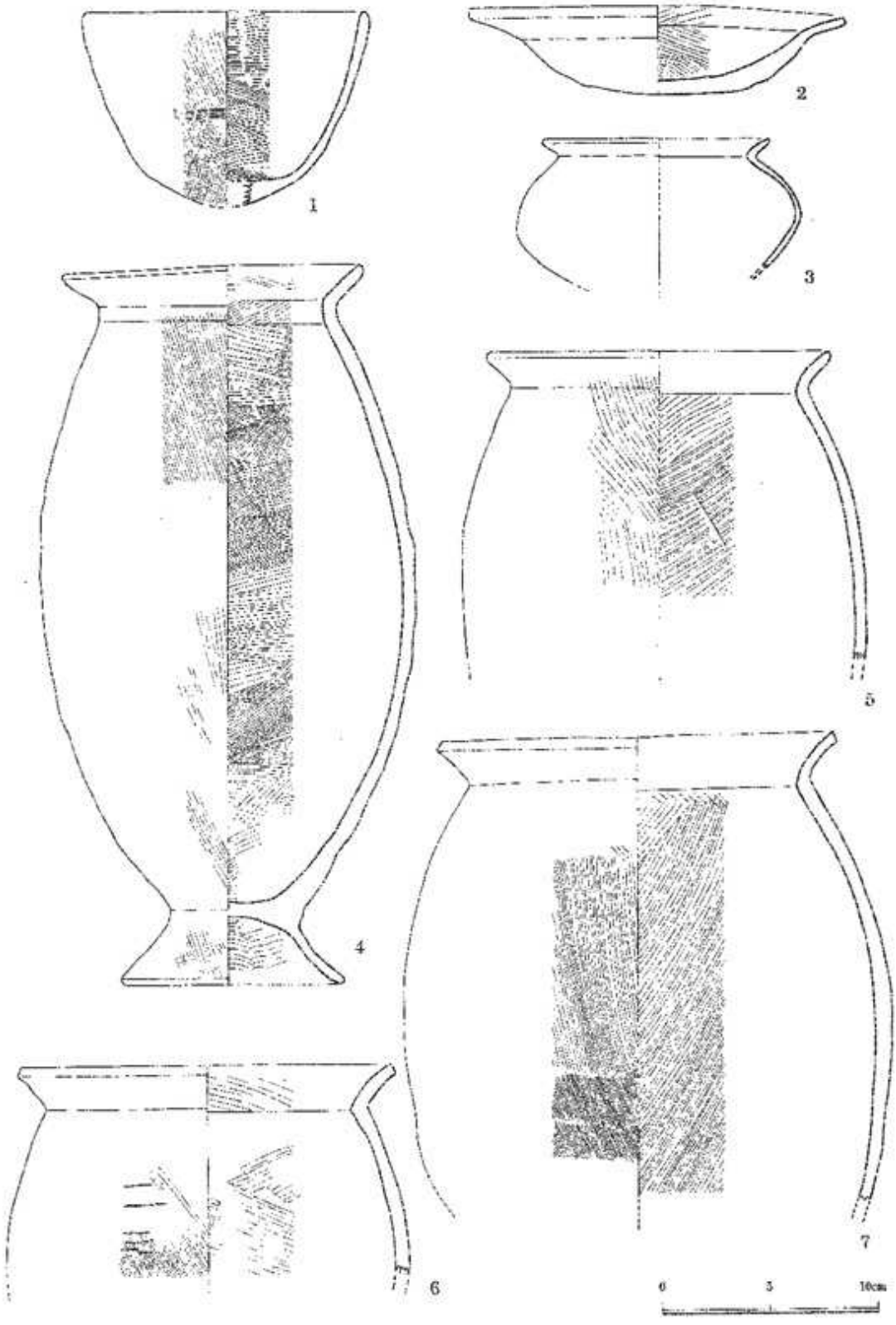
れて散乱している様な状態であった。甕や短頸壺、鉢などが出土している。

2．古墳時代

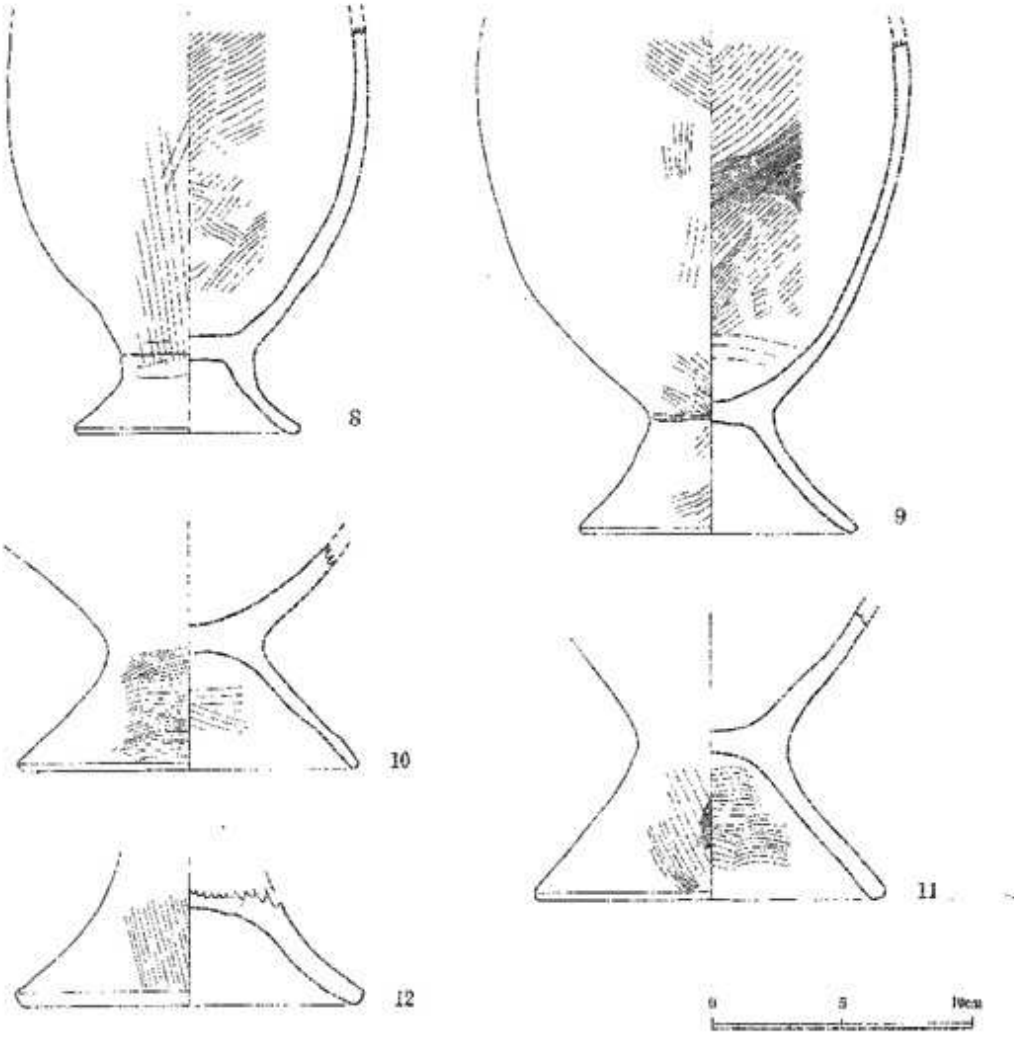
（1）箱式石棺

遺構（第29～30図）

石棺は、調査区の一番北側で3－C－75グリッドに位置し、南側に約8m離れた所にはタバ



第27図　7号溝（SD）出土土器実測図（1）



第28図　7号溝（SD）出土土器実測図（2）

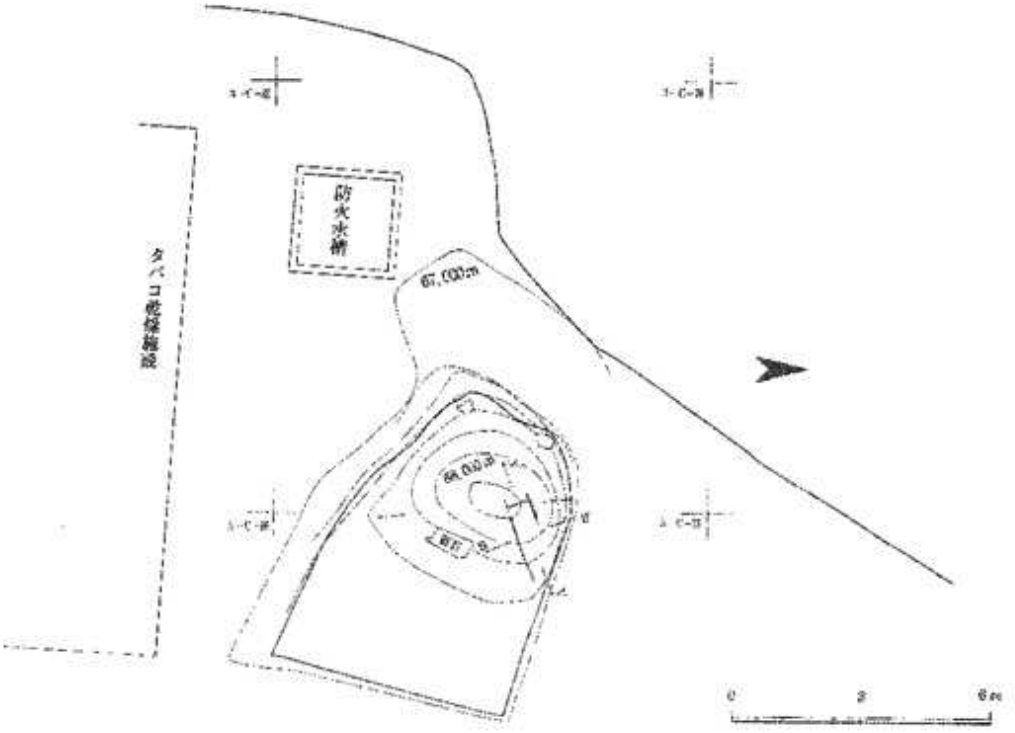
コの葉を乾燥する施設が建てられている。石棺は、かなり以前よりその存在が知られており、調査時には土盛りが残っており、あたかも墳丘がそのまま残っているような状態であった。当初は、墳丘と考え調査に入ったが、調査が進行する中で地山面よりハウス用ビニールや瓦大の石が多量に検出されたことから、近代に石やビニール、土などが捨てられて墳丘状に形成されたものと判断した。

石棺は、安山岩の切り石を組み合わせて作った箱式石棺で、主軸をN－69°30′－Eに取り埋置されており、東側の小口部分は開墾により破壊され棺材が抜き取られていた。蓋石は、盗掘時にほとんど持ち去られ、中央に2枚かろうじて残っていた。蓋石は、棺身と同じ安山岩の切り石を持ち送りで乗せている。棺身は、東側の小口石が抜き取られていることや西側の小口

第7表　7号溝（SD）出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
27－1	鉢	口径 13.3 器高 9.1	体部はやや内湾気味に立ち上がり端部は丸くなる。底部は丸底か？	金雲母及び角セン石を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目	ハケ目	○赤生 ○底部欠失
27－2	浅鉢	口径 17.5 器高 4.2	頸部で屈曲し、口縁部は直線的に短かく外側に開く、端部は平坦にしている。	金雲母及び白色小石を多量に含む	淡黄褐色	良	ナデ	ハケ目	○赤生
27－3	壺形土器	口径 10.5 胴部径 13.2 現存高 6.7	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は短かく外側に開く、端部は尖がる、胴部は大きく膨らみ器壁は薄い。	角セン石を多量に含む	淡黄色	良	ナデ	ナデ	○赤生 ○底部欠失
27－4	甕	口径 13.9 胴部径 17.4 器高 35.6 脚高 3.1 脚径 10.4	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は直線的に大きく外側に開く、端部は丸くなる。胴部は長く最大径は中位付近にある。脚台は低くやや外反気味に外側に開き、端部は丸くなる。	長石及び角セン石、金雲、小石を多量に含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 胴部・底部ハケ目	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部・底部ハケ目	○赤生
27－5	甕	口径 16.0 現存高 14.3	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反気味に短かく外側に開く、端部は丸くなる。	角セン石及び金雲母を多量に含む	淡赤褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○赤生 ○底部欠失
27－6	甕	口径 17.2 胴部径 18.8 現存高 9.8	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反気味に外側に開く、端部は平坦にしている。胴部径は、口径より大きい。	金雲母及び白色小石を多量に含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部タタキ目の後ハケ目	ハケ目の後ナデ	○赤生 ○底部欠失
27－7	甕	口径 18.7 胴部径 22.6 現存高 21.6	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部はやや外反気味に外側に開き、端部はナデて平坦にしている。	角セン石及び白色小石を多量に含み、金雲母を少量含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ハケ目	○赤生 ○底部欠失
28－8	甕	現存高 15.7 脚高 3.0 脚径 8.7	脚台は端部に向って外反しながら外側に開く、端部は丸くなる。脚台は低い。	角セン石及び金雲母を多量に含み、小石を少量含む	淡黄褐色	良	ハケ目 脚台ナデ	ハケ目 脚台ナデ	○赤生 ○口縁部欠失
28－9	甕	現存高 19.0 脚高 4.5 脚径 10.7	脚台は高く、端部に向ってやや外反しながら外側に開く、端部はナデて平坦にしている。	角セン石及び金雲母を多量に含む	黄褐色	良	ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	ハケ目 脚台ハケ目の後ナデ	○赤生 ○口縁部欠失
28－10	甕	現存高 8.7 脚高 4.7 脚径 12.2	脚台は高く、端部に向って直線的に外側に開く、端部はナデて平坦にしている。	角セン石及び金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目	○赤生 ○口縁部及び胴部欠失
28－11	甕	現存高 11.1 脚高 6.0 脚径 13.4	脚台は高く、端部に向って直線的に外側に開く、端部は尖形をなす。	角セン石及び金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○赤生 ○口縁部及び胴部欠失
28－12	甕	現存高 5.2 脚径 13.4	脚台は低く、端部に向ってやや外反気味に大きく外側に開く、端部はナデて平坦にしている。	角セン石及び金雲母を多量に含み、小石を少量含む	淡赤褐色	良	ハケ目	ナデ	○赤生 ○脚台のみ残存

石が倒れていることから、正確な法量は不明であるが長さ約1.80m、幅0.55mの規模の石棺と考えられ、深さは0.65mを測る。床は、西側の小口付近に２枚の安山岩板石が敷かれその上に



第29図　1号石棺周辺地形測量図

赤色顔料が蒔かれていたことから、敷き石の床と考えられる。ただし、東側の床には、その敷き石は検出されなかった。このことは、敷き石が石枕に使われた可能性も考えられるが、地山の部分に、赤色顔料が蒔かれた痕跡が認められなかったことや棺内から不自然な程多量の安山岩の石材片が検出されたこたとからも、床全体に石を敷いた敷き石の床と考えた方が自然だろう。棺材の内側には全体に赤色顔料を塗布している。

石棺内からは、人骨や副葬品の検出は全くなかった。

墓壙は、東側を樹盤により削平されていることから、全体規模は不明だが残存している部分から長さ2.30m以上で幅1.60mの隅丸長方形を呈していたものと考えられ、深さは0.46mを測る。中央には、棺の寸法に合わせて幅0.15m、深さ0.15m程の細長い溝を掘り、その中に棺材を埋置し固定している。

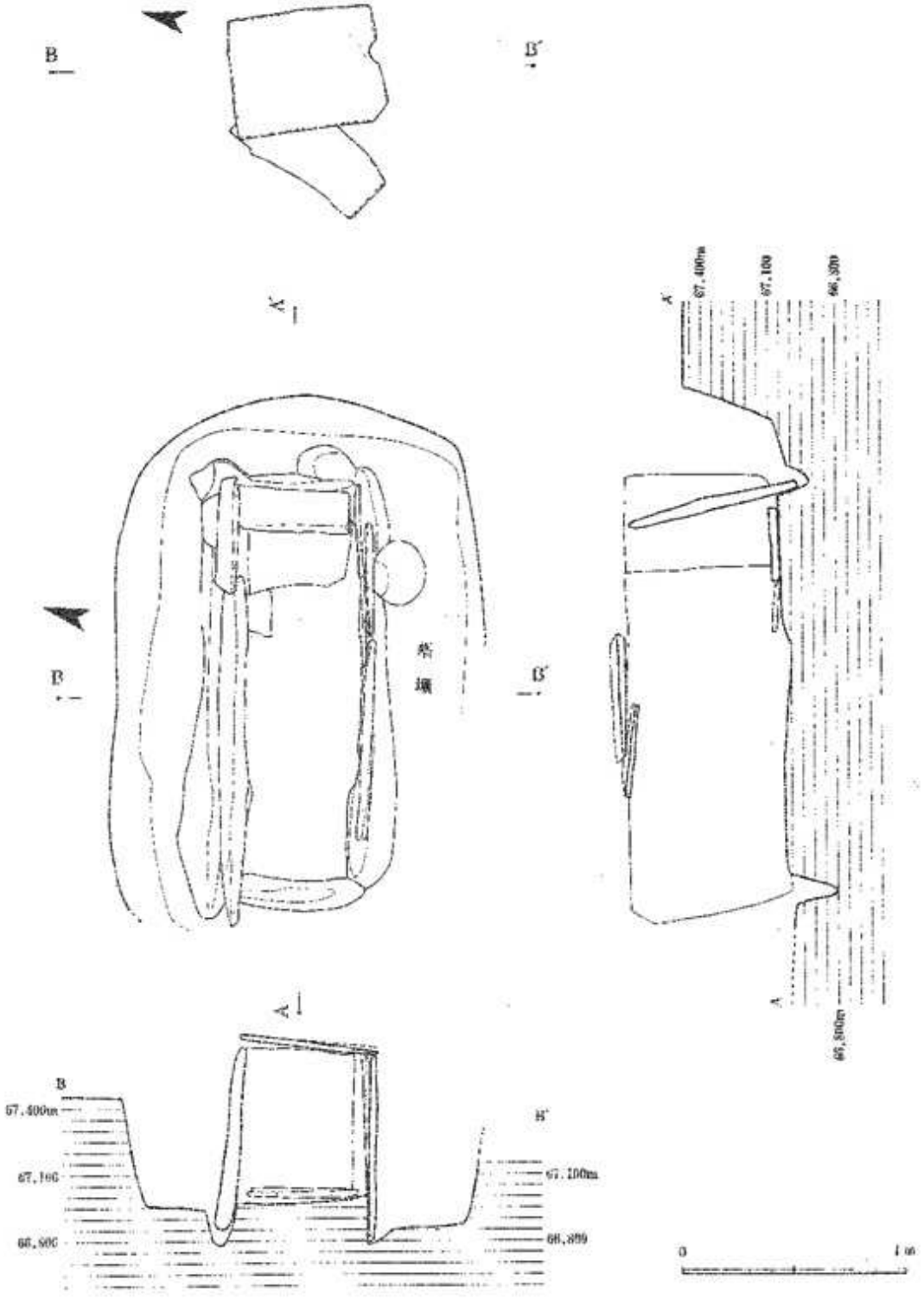
石棺の周囲は、周溝確認の為に表土を剥ぎ調査したが、周溝は検出されなかった。

（2）方形周溝墓と出土遺物

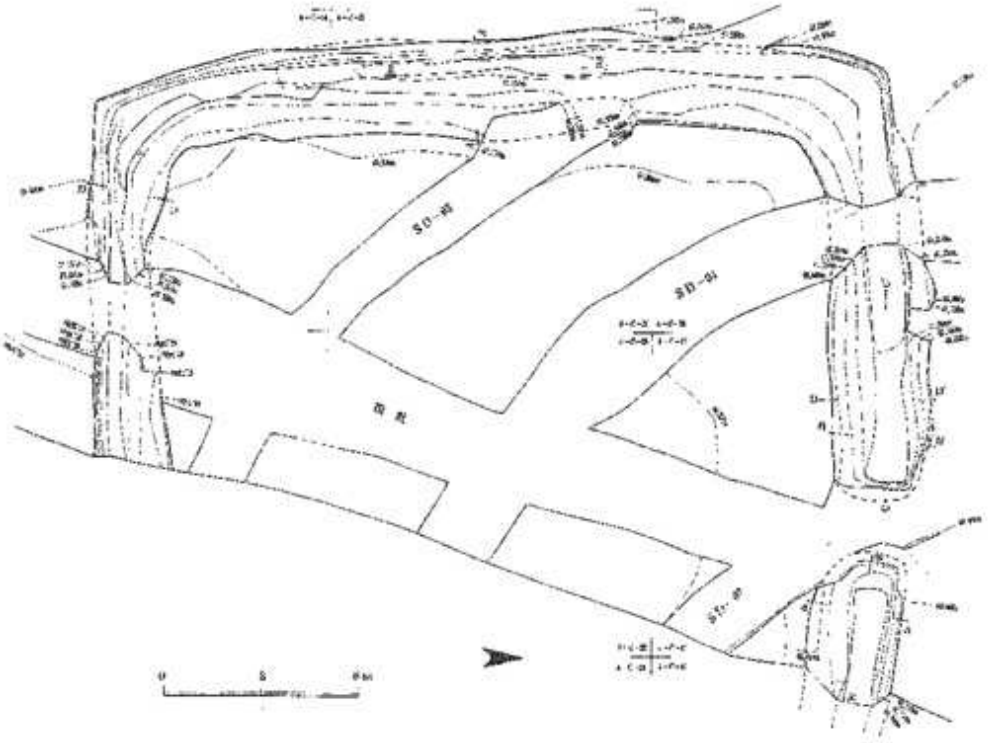
1号方形周溝墓

遺構（第31～32図）　　出土遺物（第33～38図・第8～10表）

遺構は、調査区東側のほぼ中央付近で、4－C－12・13・14・27・28・33・34グリッドの区



第30図　1号石棺実測図

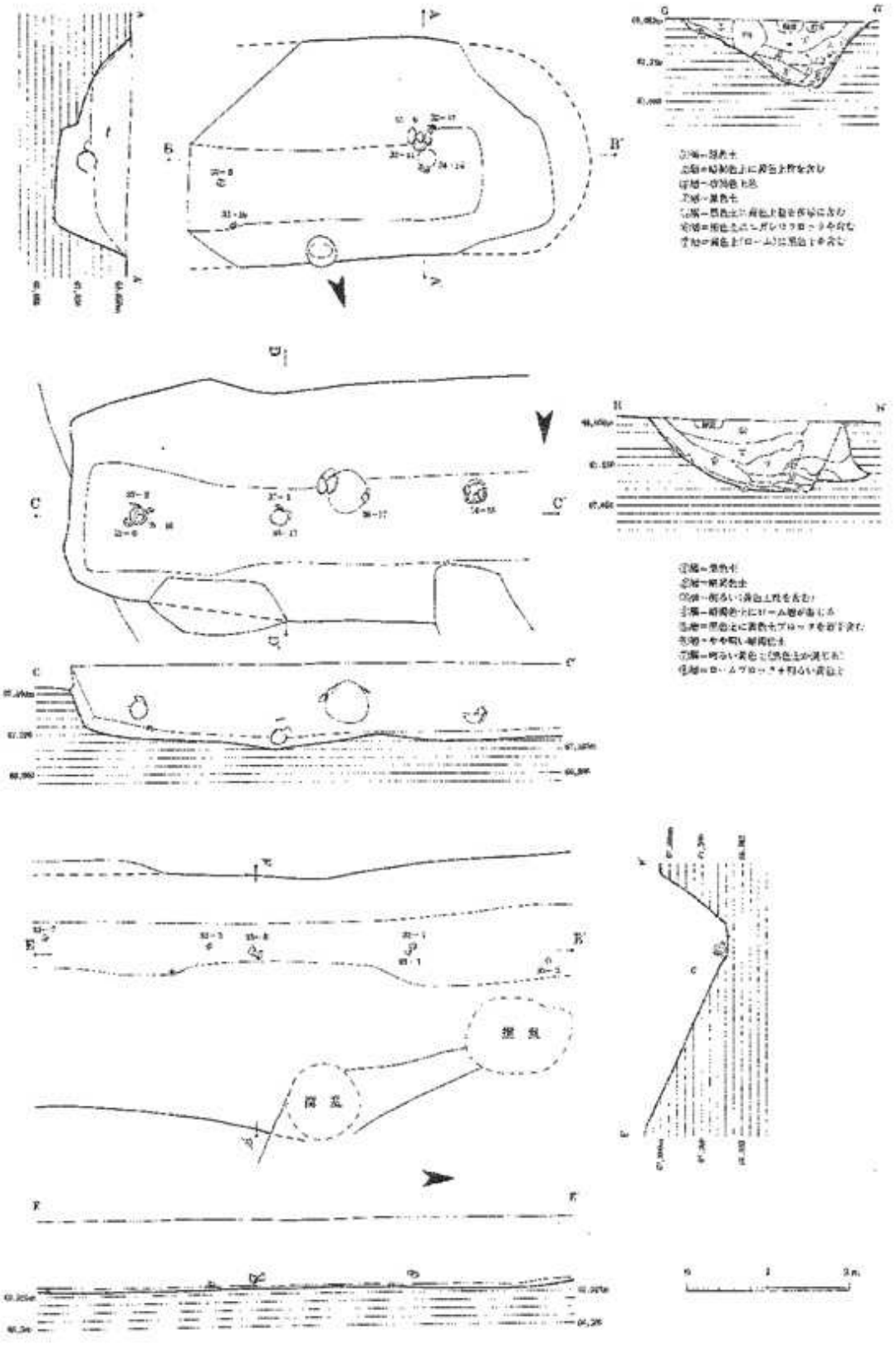


第31図　1号方形周溝墓測量図

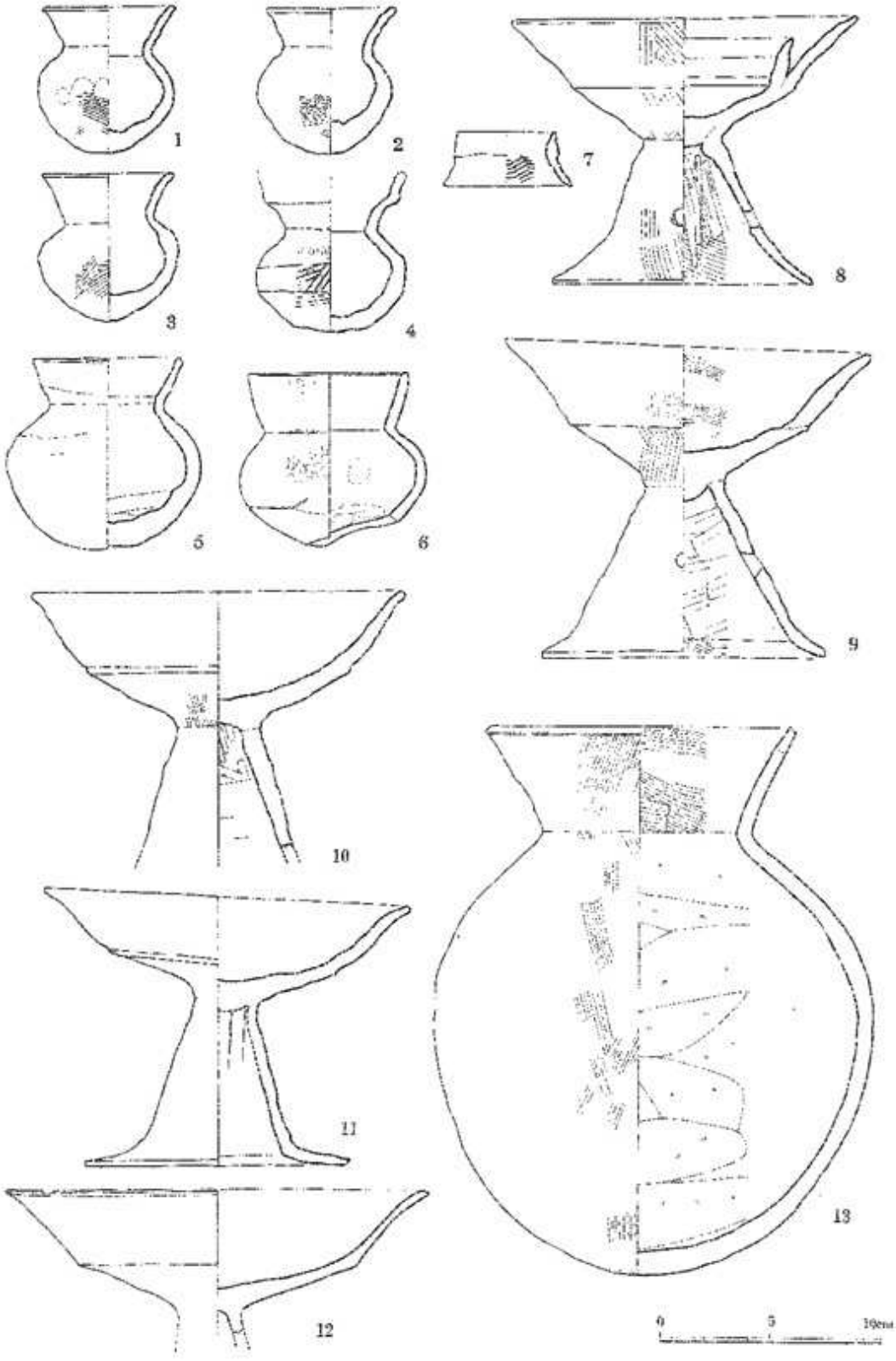
域にかけて検出された。遺構は、方形に巡る周溝のみの検出で、主体部の検出はない。また、削平されていることから墳丘も確認出来なかった。周溝は、全体の半分程が残っており東側部分については開墾により削平され消滅している。幸い北側に陸橋部が検出されたことにより主軸や全体規模についてはおおよそ推定出来る。主軸は、N－2°15′－Eでほぼ南北に築造されており、北側に幅3.20mの陸橋部が設けられている。全体規模は、主軸外径26.40m、主軸内径で21.20mを測り、方形を呈するものと考えられる。周溝は、幅2.30～3.10m、深さ0.86～1.05mを測り、周溝の壁は内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がる。

主体部は、攪乱の溝により破壊され消滅していたが、方形周溝墓のほぼ中央付近の攪乱部分から阿蘇溶結凝灰岩の石材片が検出されたことにより、凝灰岩製の石棺で南北に主軸を取り埋設されていたものと考えられる。また、石材と供にヒスイ製の勾玉1個と碧玉製の管玉4個を検出しており、副葬品と見て間違いないものと考えられる。規模は、主体部が全く残っていないことから不明である。

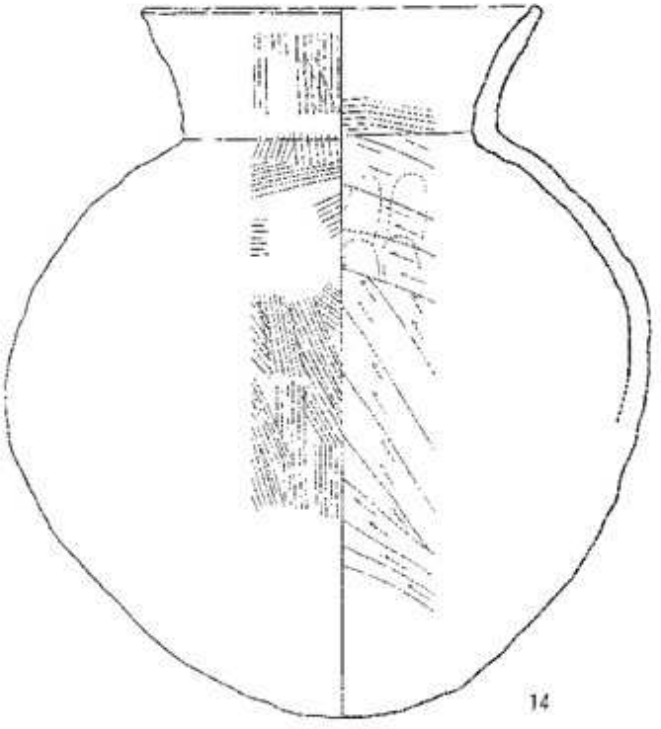
周溝内からは、多くの古式土師器や鉄器などの遺物が出土した。遺物の出土地点は、陸橋部の両側と西側周溝のほぼ中央部分に限られている。陸橋部の東側からは、土師器の甕や高坏・小型丸底壺が周溝底よりやや浮いた状態でまとまって出土し、陸橋部の西側からは土師器の甕

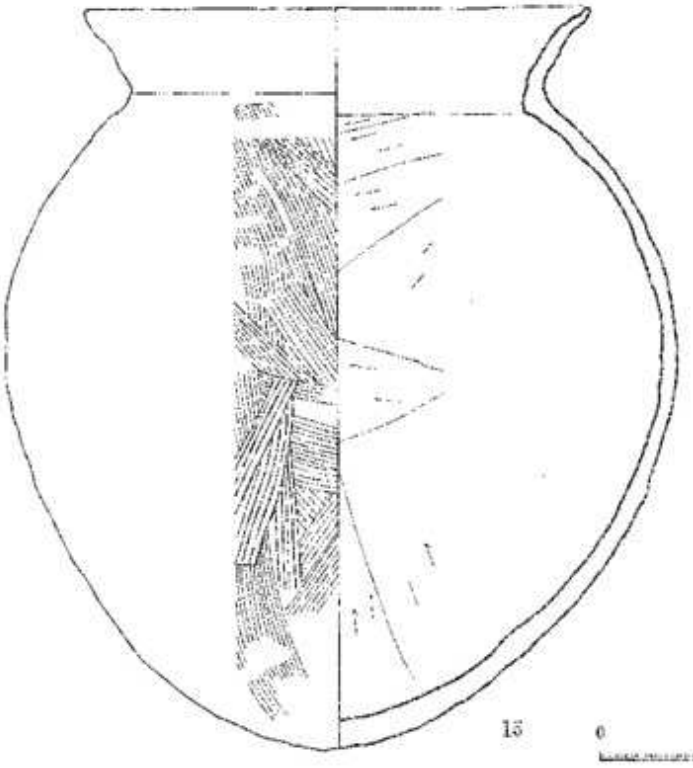


第32図　1号方形周溝墓周溝内遺物出土状態及び土層断面図



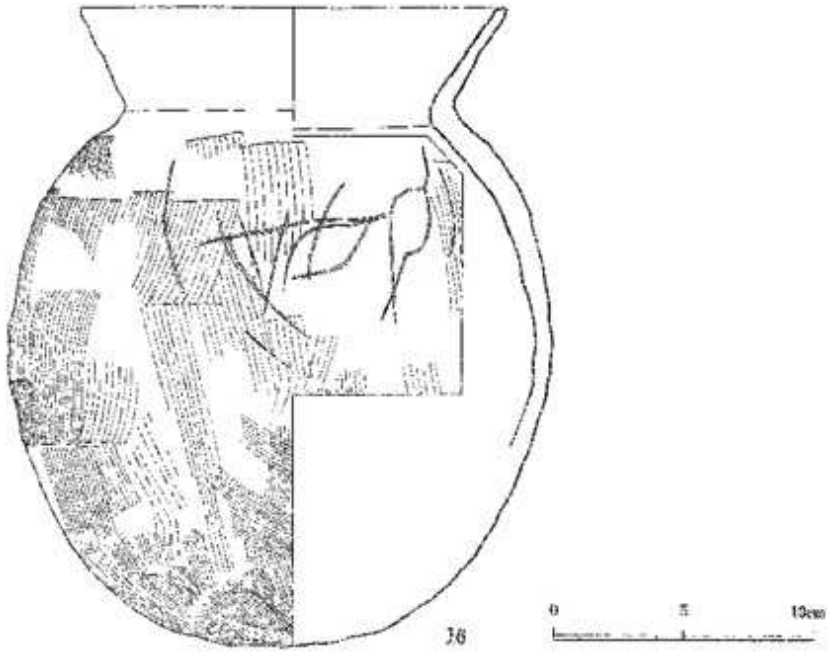
第33図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（1）





0　5　10cm

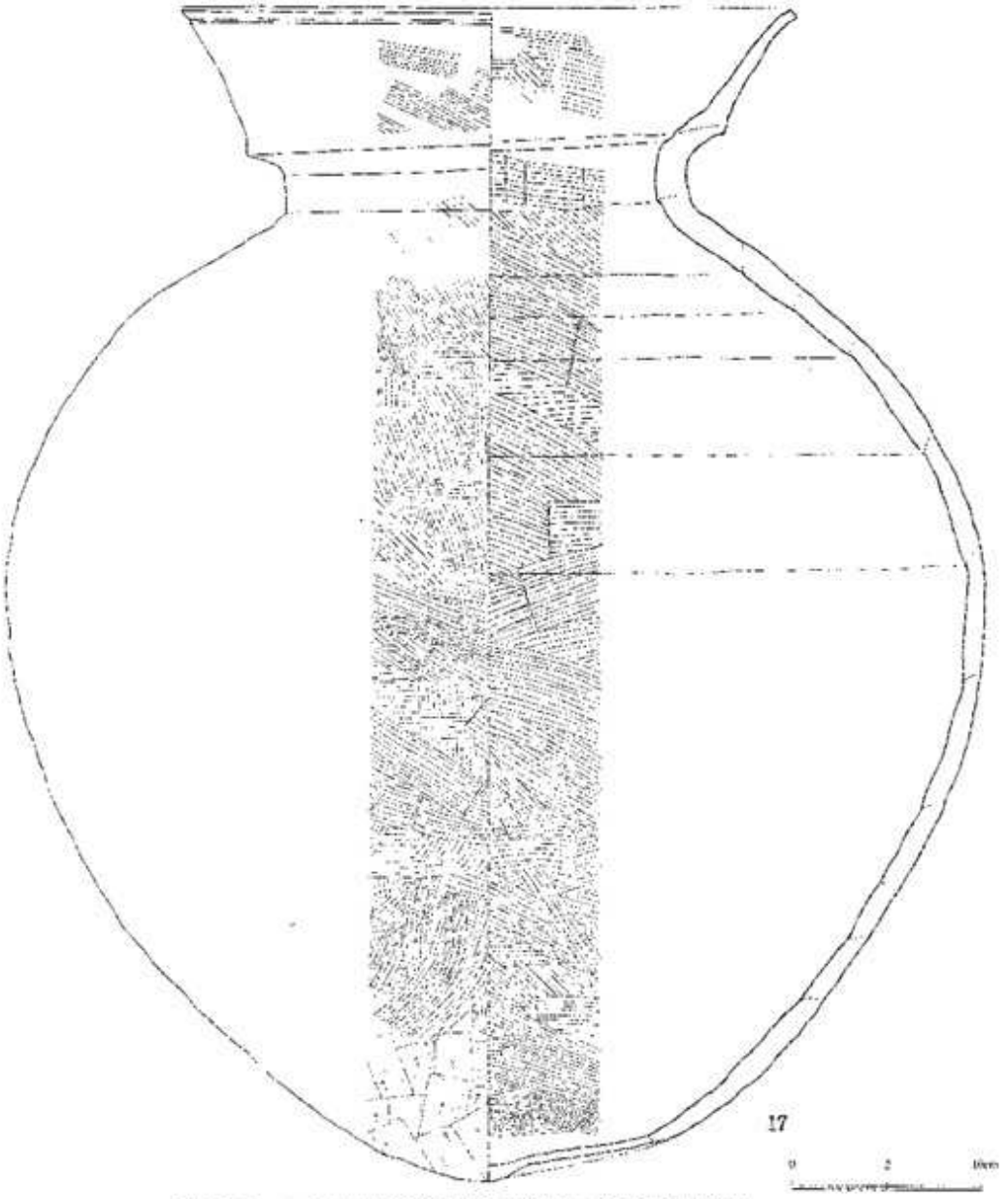
第34図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（2）



第35図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（3）

第8表　1号方形周溝墓周溝内土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
33 1 1	小型丸底壺	口径 6.0 胴部径 6.1 器高 6.7	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は高く直線的に外側に開く。端部は丸い。口径と胴部径はほぼ同じである。	角セン石を少量含む	淡黄褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部横ナデ 胴部指による調整	○土師器 ○完形品
33 1 2	小型丸底壺	口径 5.9 胴部径 6.1 器高 6.7	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は高く外反しながら外側に開く。端部は丸味をもつ。口径より胴部径が若干大きい。	角セン石及び金雲母を含む	淡赤黄褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部横ナデ 胴部指による調整	○土師器 ○完形品
33 1 3	小型丸底壺	口径 5.9 胴部径 6.4 器高 6.7	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は高く外反しながら外側に開く。端部は丸味をもつ。口径より胴部径が若干大きい。	長石及び角セン石、金雲母を含む	淡黄褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部及び胴部横ナデ 底部指による調整	○土師器 ○完形品
33 1 4	壺または甕の底部	胴部径 6.9 底部径 7.2	頸部でくの字に屈曲した後口縁部中途付近で内側に屈曲し端部に向って外反気味に外に開く	角セン石及び金雲母を含む	淡赤褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	ナデ	○土師器 ○複合口縁 ○口縁部欠失
33 1 5	小型丸底壺	口径 6.8 胴部径 8.8 器高 8.7	頸部でくの字に屈曲した後口縁部がやや内湾気味に外側に開く。端部は丸くなる。口径より胴部径が大きい。	石英及び角セン石を含む	淡赤褐色	良好	横ナデ	口縁部及び胴部上半横ナデ 胴部下半へら削り	○土師器
33 1 6	小型丸底壺	口径 7.3 胴部径 8.5 器高 7.8	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部は直立気味にやや内湾しながら立ちあがる。端部は平坦で口径より胴部径が大きい。	角セン石及び金雲母を多量に含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後横ナデ	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部指による調整の後ナデ	○土師器 ○完形品 ○底部穿孔



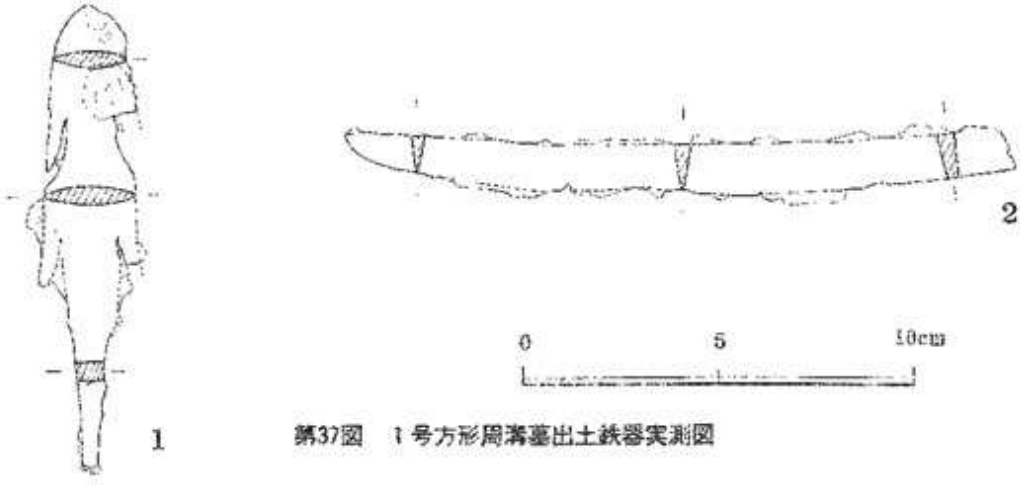
第36図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（4）

第8表　1号方形周溝墓周溝内土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
33-7	壺台	口径 4.4 器高 2.5 底径 5.8	口縁部は緩く直口し底部は外反しながら外側に開く。端部は丸味をもつ。	白色粒を含む	淡茶褐色	良好	ナデ	ハケ目の後ナデ	○土器塚 ○応野塚
33-8	高杯	口径 15.7 器高 11.8 底径 12.0	坏部は深く口縁部は外反しながら外側に開く。また内側中位付近に低高さ2cm程の粘土を略ほぼ垂直に貼り付け突出部を設けている。脚部はラッパ状に開き、中位付近には円形の透しが4ヶ所に認められる。	角ヤン石を含む	淡赤褐色	良好	ハケ目の後横ナデ	坏部 ハケ目後横ナデ 脚部 ヘラ削り 裾部 ハケ目	○土器塚 ○応野塚

第8表　1号方形周溝墓周溝内土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
33 - 9	高杯	口径 16.6 器高 12.5 底径 12.8	坏部は深く中位付近でやや外反しながら外端に開く、端部は丸い。脚部はラッパ状に開き裾部はさらに外側に外反する。中位には円形の透しが1ケ所認められる。	角セン石、石英を含む	淡赤褐色	良好	坏部ハケ目の後横ナデ 脚部ナデ	坏部ハケ目の後横ナデ 脚部ヘラ削り 脚部ハケ目	○土師器
33 - 10	高杯	口径 17.0 底径 11.8	坏部は深く内彎気味に立ち上がり端部近くでやや外反する。底部は丸い。脚部はラッパ状に開いている。	角セン石、白色粒を若干含む	褐色	良好	ハケ目の後横ナデ	坏部横ナデ 脚部ヘラ削り	○土師器 ○脚底部欠失 ○脚内側を赤色顔料を塗布
33 - 11	高杯	口径 16.6 器高 11.8 底径 12.0	坏部は内彎気味に立ち上がり端部近くでやや外反する。底部は丸く坏部は浅い。脚部はラッパ状に開き裾部は大きく外側に屈曲する。	金雲母、角セン石を含む	淡茶褐色	良好	ナデ	坏部横ナデ 脚部ヘラ削りの後ナデ	○土師器 ○完形品
33 - 12	高杯	口径 19.2 脚径 6.6	器壁が薄く手捻に痕が残る。口縁部は外反しながら開き、端部はナデで平坦面が残っている。	角セン石、白色粒を多く含む	淡茶褐色	良	横ナデ	横ナデ	○土師器 ○脚部欠失
33 - 13	壺	口径 14.1 胴部径 19.8 器高 24.9	頸部でくの字に屈曲した後口縁部は曲線的に外側に開く、端部は平坦にしている。胴部は球形に近く最大径は中位にある。	角セン石、石英を含む	赤褐色	良好	ハケ目	口縁部ハケ目 胴部ヘラ削り	○土師器 ○完形品 ○外側全体に赤色顔料塗布
34 - 14	壺	口径 15.4 胴部径 24.7 器高 27.5	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反しながら外に開く、端部は平坦である。胴部は最大径が中位よりやや上にある。	角セン石、石英を含む	淡茶褐色	良好	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○完形品
34 - 15	壺	口径 19.5 胴部径 25.8 器高 28.6	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反しながら外に開く、端部は丸い。胴部は最大径が中位より上に必り中位有所には縦方向のハケ目調整が施される。	角セン石、小石を含む	淡褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目	口縁部横ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○底部穿孔
35 - 16	壺?	口径 16.4 胴部径 20.9 器高 24.8	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が波線的に外側に開く、端部は平坦面を作り出している。胴部は最大径が中位付近にある。胴部の一部にヘラ状工具で線刻が施されているが何が描かれているかは不明。	角セン石を含む	茶褐色	良	口縁部横ナデ 胴部ハケ目	口縁部横ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○完形品 ○胴部に穿孔
36 - 17	壺	口径 31.5 胴部径 52.5 器高 62.4	頸部で屈曲した後口縁部は殆かく直口して立ち上がりさらに波線的に外側に開く、端部は平坦にしている。口縁部には明瞭な段が認められる。胴部は最大径が中位よりかなり上に上がる。	角セン石、石英、金雲母を含む	淡茶褐色	良好	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ハケ目 底部ヘラ削り	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ハケ目	○土師器 ○底部穿孔 ○胴部の最大径付近は縦方向のハケ目を施した後斜方向のハケ目を施している

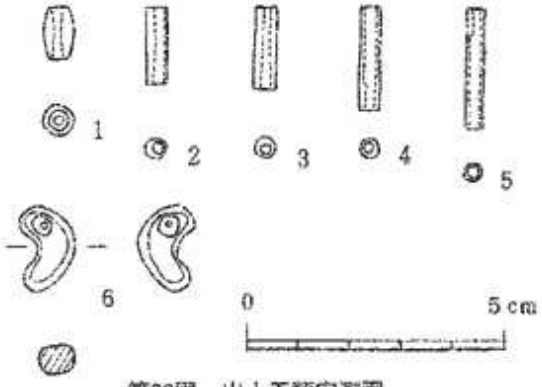


第37図　1号方形周溝墓出土鉄器実測図

第9表　1号方形周溝墓出土鉄器観察表

図版番号	種類	法量（cm）	特徴	備考
37 1 1	鉄鏃	全長－11.9 身長－8.4　茎長－3.5 身幅－2.6　茎幅－0.8 身厚－0.5　茎厚－0.5	有茎で二段の反りがつく二段逆刺未綱式	○陵橋部西側周溝内
37 1 2	刀子	全長－17.2 身長－13.6　茎長－3.6 身幅－1.2　茎幅－1.2 身厚－0.3　茎厚－0.4	関は片関	○陵橋部内側周溝内 ○完形品

や碗・小型丸底壺、それに鉄製刀子や鉄鏃が同じく周溝底よりやや浮いた状態で出土している。さらには、西側の周溝内からも土師器の高坏や小型丸底壺・脚台が、周溝底面またはやや浮いた状態で出土している。



第38図　出土玉類実測図

第10表　1号方形周溝墓出土玉類観察表

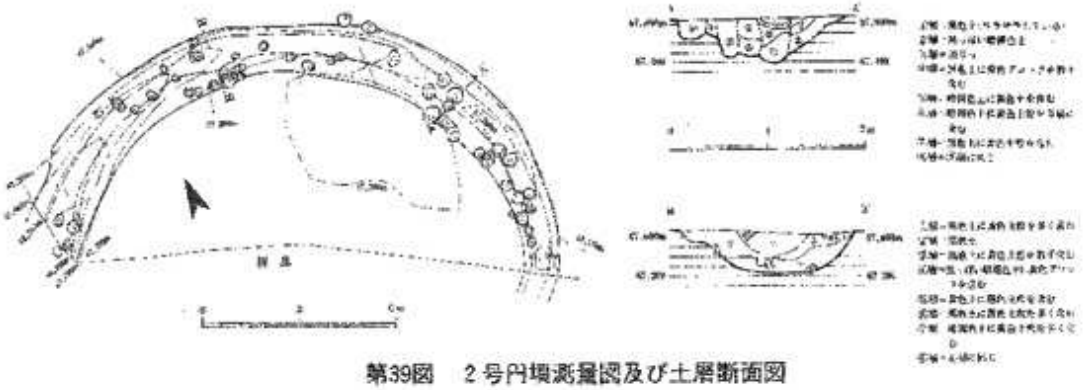
図版番号	種類	法量（cm）	特徴	備考
38 1 1	滴玉	長さ　1.0 直径　最大　0.6 最小　0.4	材質は硬玉製 穿孔は二方向から行なっている。	
38 1 2	管玉	長さ　1.5 直径　0.4	材質は硬玉製 穿孔は二方向から行なっている。	
38 1 3	管玉	長さ　1.62 直径　0.42	材質は硬玉製 穿孔は一方向から行なっている。	
38 1 4	管玉	長さ　2.6 直径　0.4	材質は硬玉製 穿孔は一方向から行なっている。	
38 1 5	管玉	長さ　2.33 直径　0.35	材質は硬玉製 穿孔は二方向から行なっている。	
38 1 6	勾玉	長さ　1.65 幅　0.8 厚さ　0.6	材質はヒスイ製 穿孔は二方向から行なっている。	

（3）円墳と出土遺物

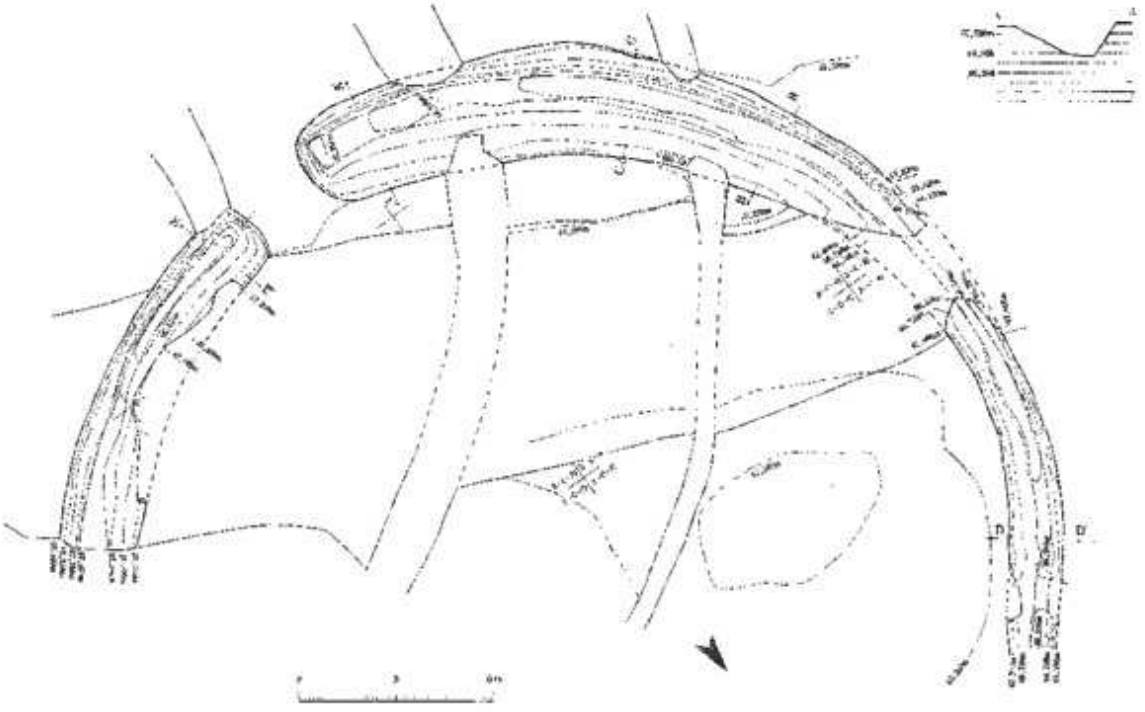
2号円墳

遺構（第39図）

遺構は、調査区南側で、4－C－34・35・36・45・46・47グリッドの区域にかけて検出された。遺構は、円形に巡る周溝のみの検出で、主体部の検出はない。また、削平されていることから墳丘も確認出来なかった。周溝は、全体の半分程残っており南側部分については道路及び納骨堂の建設により削平され消滅している。主軸は、陸橋部及び主体部が検出されなかったことから不明である。全体規模は、推定であるが外径で直径約17m、内径で直径約14m前後の円



第39図　2号円墳測量図及び土層断面図



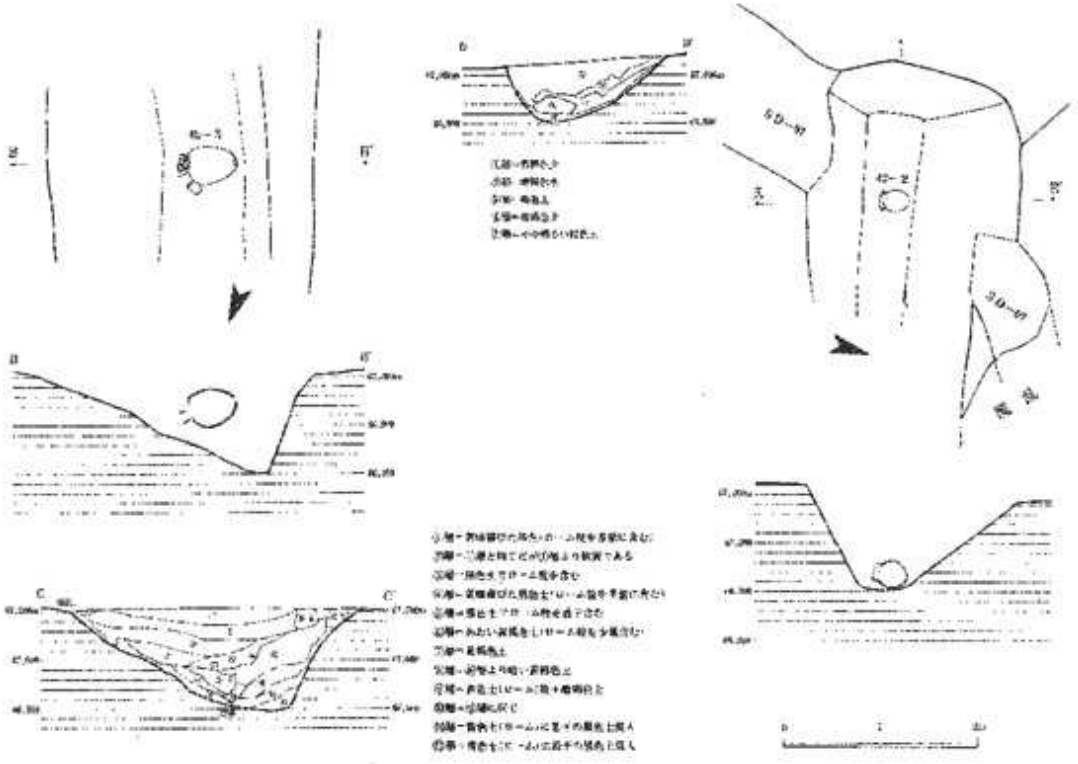
第40図　3号円墳測量図及び断面図

墳と考えられる。周溝は、幅1.80m、深さ0.41mを測り、周溝の壁は内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がる。

主体部は、検出されなかった。また、周溝内からも遺物の出土は全くない。

3号円墳

遺構（第40～41図）　　出土遺物（第42～43図・第11表）

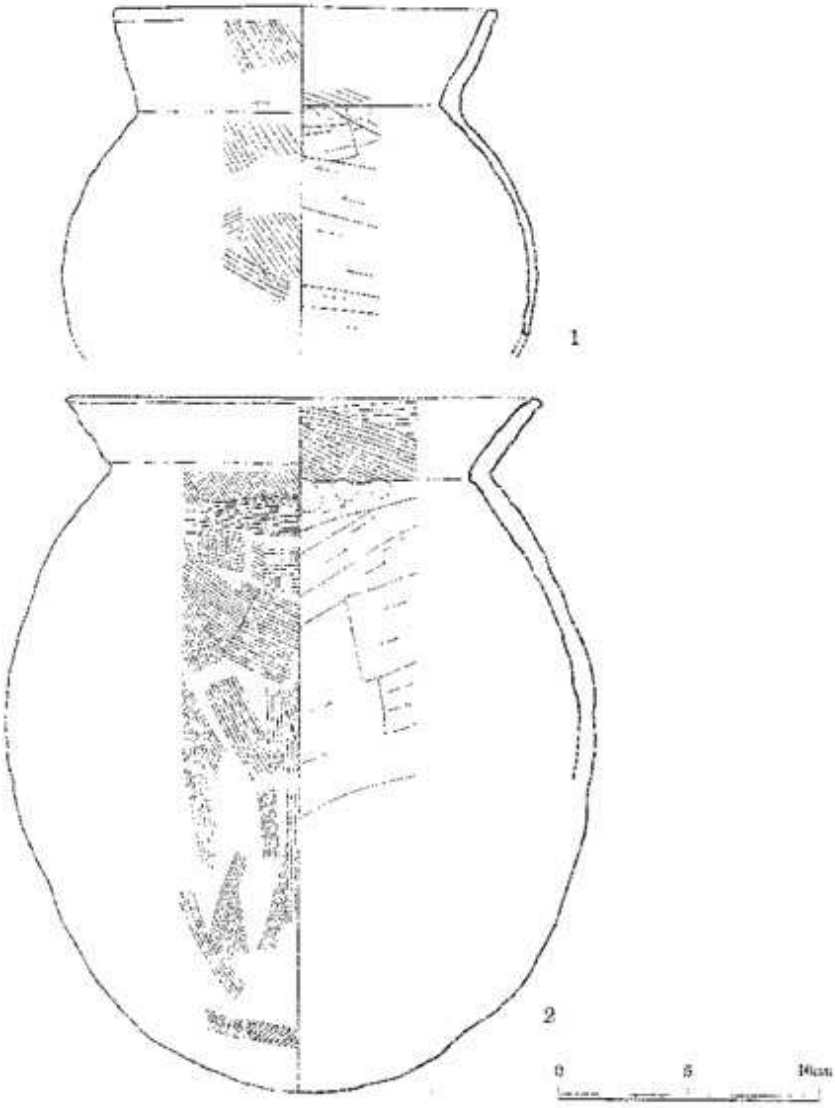


第41図　3号円墳周溝内遺物出土状態及び土層断面図

遺構は、調査区北側で、3－C－86・92・94・95、4　C－7・8・9グリッドの区域にかけて検出された。遺構は、円形に巡る周溝のみの検出で、主体部の検出はない。また、削平されていることから墳丘も確認出来なかった。周溝は、全体の半分程残っており北側部分については開墾により削平され消滅している。幸い南側に陸橋部が検出されたことにより主軸や全体規模についてはおおよそ推定出来る。主軸は、N－5°00′－Wで取り案造されており、ほぼ真南に幅2.21mの陸橋部が設けられている。全体規模は、推定であるが外径で直径約33m、内径で直径約28m前後の円墳と考えられる。周溝は、幅1.64～3.10m、深さ0.86～1.14mを測り、周溝の壁は内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がる。

主体部は、検出されなかったことから形態や規模については不明である。

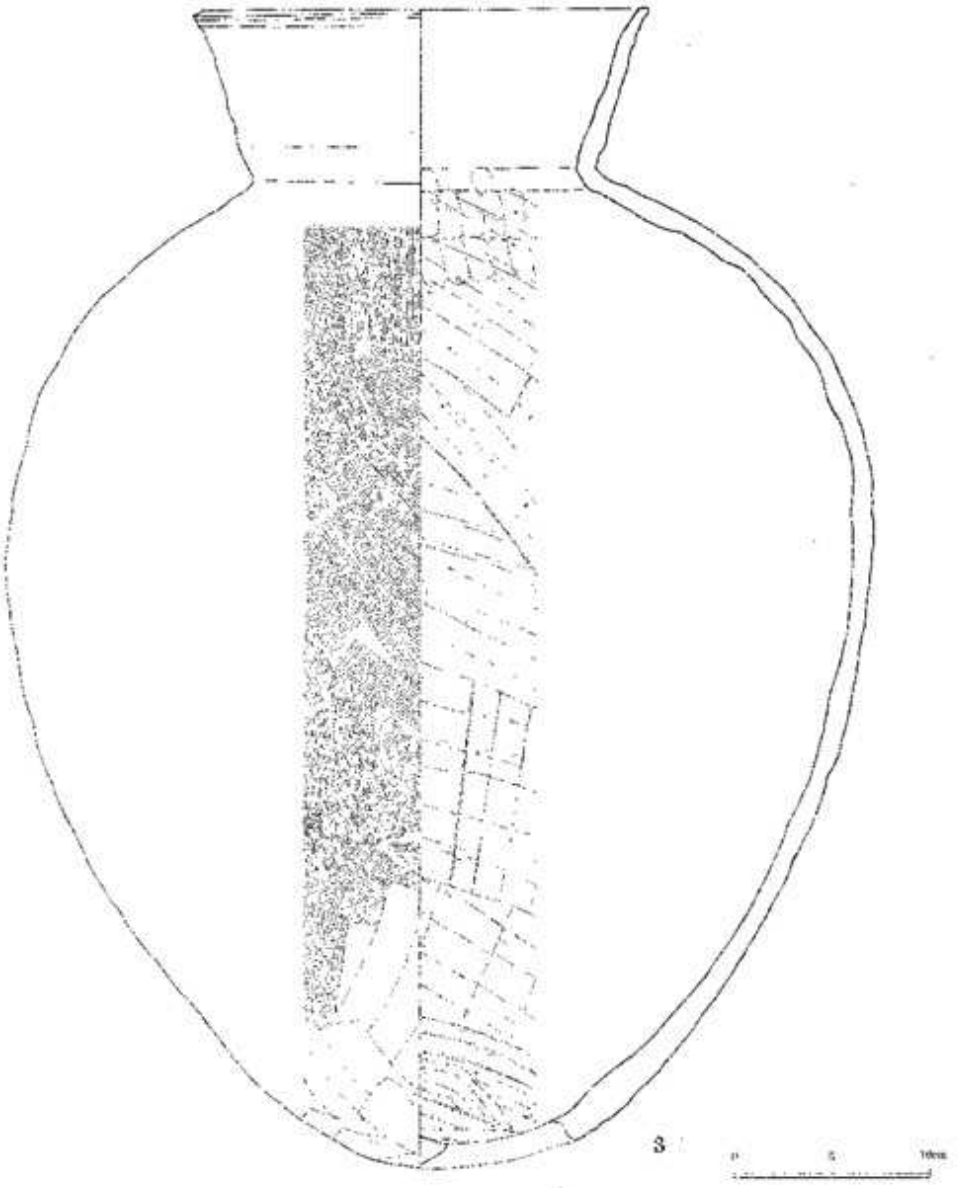
周溝内からは、古式土師器の壺や甕が出土した。遺物の出土地点は、陸橋部すぐ東側周溝内



第42図　3号円墳周溝内出土土器実測図（1）

第11表　3号円墳周溝内土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
42 1	壺	口径 14.9 胴部径 18.4 現存高 13.8	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が比較的直線的に外傾に開く。端部は丸味をもつ。胴部内面には指頭圧が残る。	角セン石を含む	淡茶褐色	良好	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ハケ目	口縁部横ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
42 2	壺	口径 18.4 胴部径 22.7 器高 26.9	頸部でくの字に屈曲した後、口縁部が直線的に外傾に開く。端部はナデで平坦処理である。胴部内面には指頭圧が残る。胴部は長胴で球形をなす。胴部の最大径は中位にくる。	石英及び角セン石を多く含む	茶褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目 胴部上半ヘラ削り 胴部下半ナデ	○土師器 ○須恵器 ○内面に赤色顔料が多量に付着。しかし人為的に塗ったものではない。
42 3	入口壺	口径 23.4 胴部径 44.6 器高 50.6	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が直線的に若干外側に開く。端部は平坦にしている。胴部最大径は中位よりやや上にある。	金雲母及び長石、角セン石を含む	黄茶褐色	良	口縁部横ナデ 胴部ハケ目 底部付近ヘラ削り	口縁部横ナデ 胴部 外面ハケ目後ヘラ削り 胴部ヘラ削り	○土師器 ○器形品 ○底部穿孔



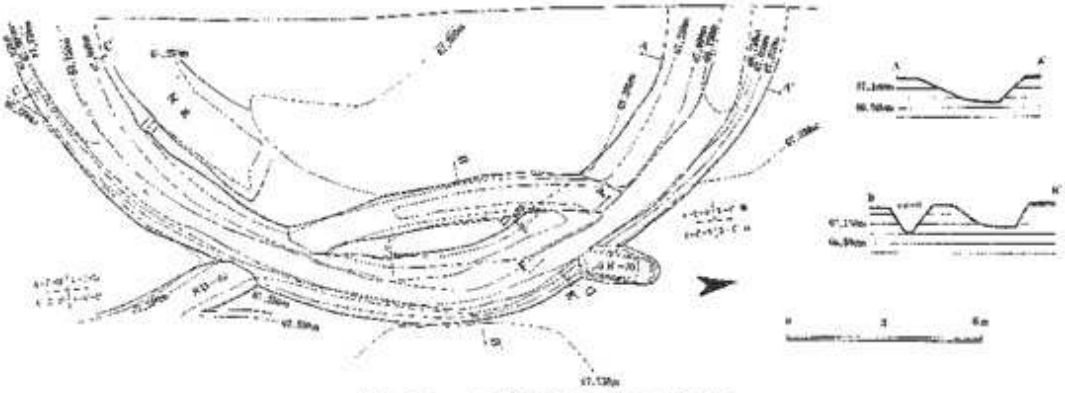
第43図　3号円墳周溝内出土土器実測図（2）

からと陸橋部から少し離れた西側周溝内から出土した。陸橋部の東側からは、土師器の甕が1点周溝底より横に倒れた状態で出土し、中には赤色顔料が詰められていた痕跡が認められた。陸橋部の西側からは土師器の大型壺が周溝底より浮いた状態で出土している。

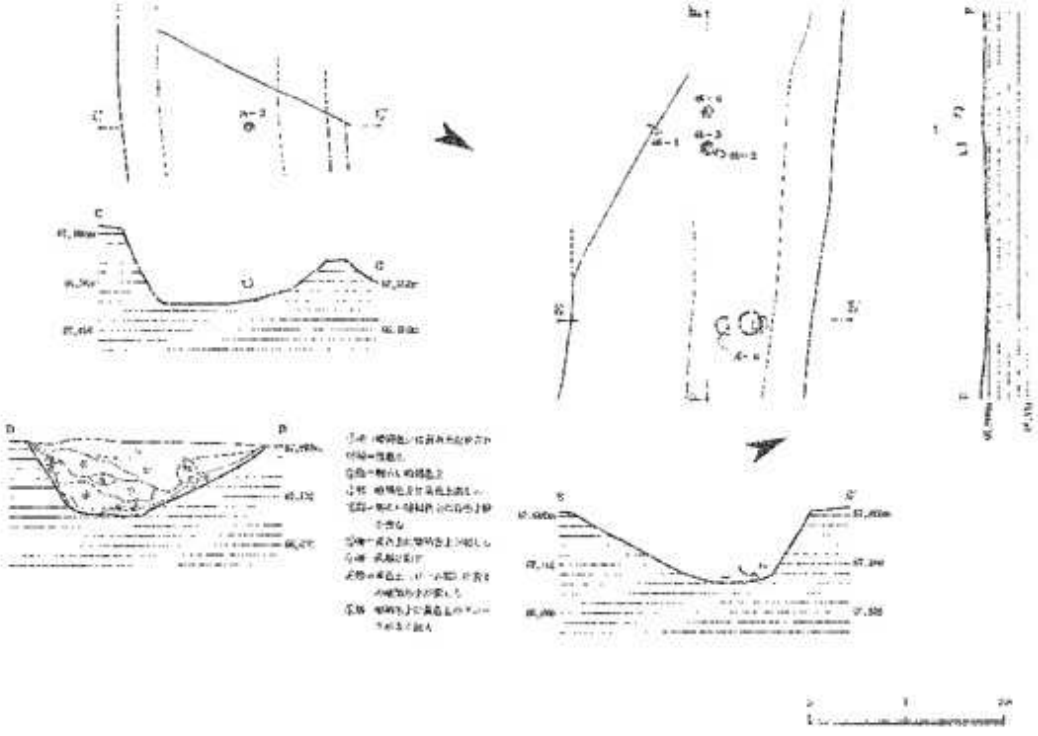
4号円墳

遺構（第44～45図）　　出土遺物（第46図・第12表）

遺構は、調査区西側の中央付近で、3－C－95、4－C　6・7・14・15グリッドの区域に



第44図　4号円墳測量図及び断面図

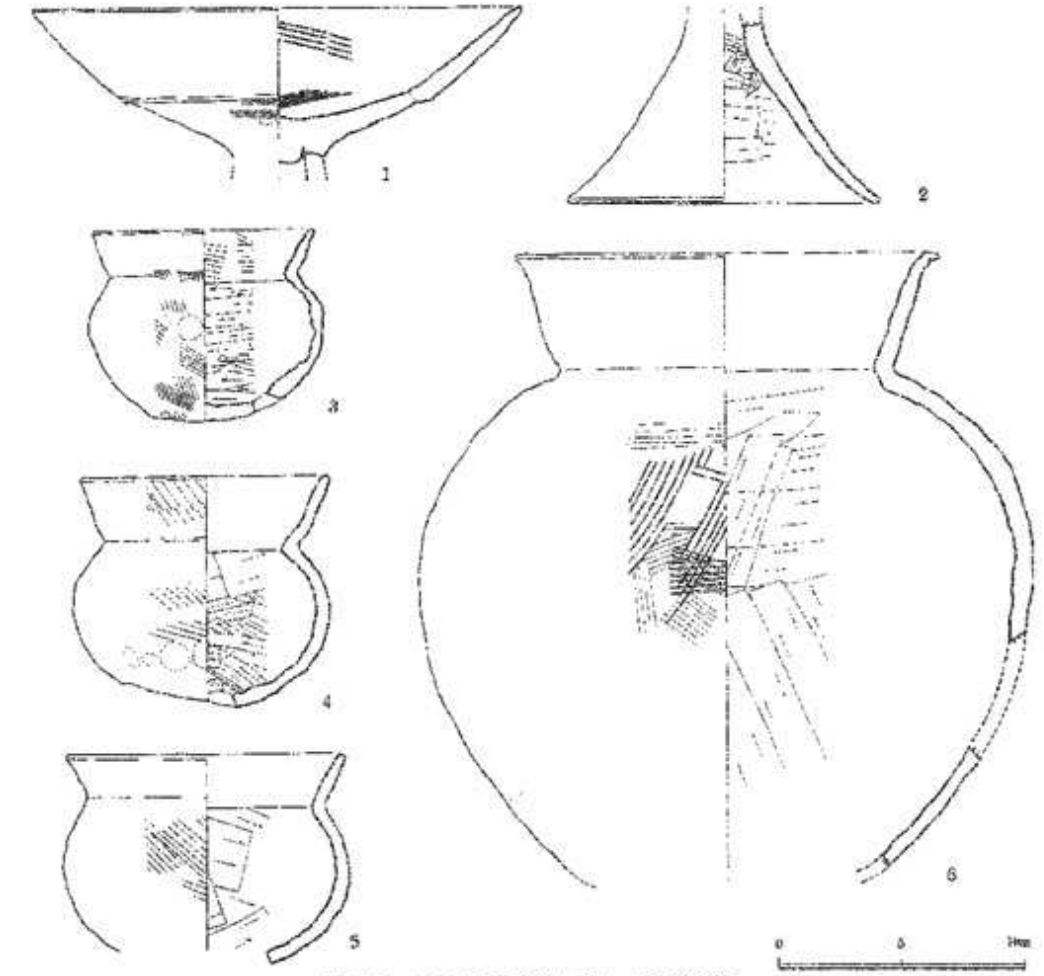


第45図　4号円墳周溝内遺物出土状態及び土層断面図

第12表　4号円墳周溝内出土土器観察表

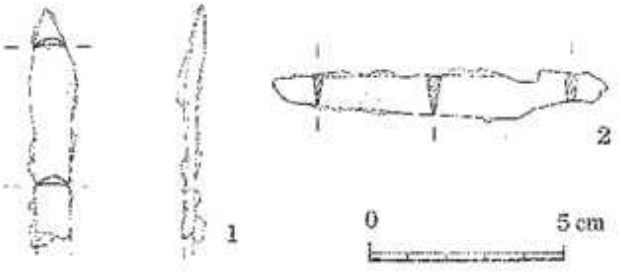
遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
46-1	壺	口径 29.9 現存高 6.3	体部は内湾気味に大きく外側に開き頸部はもくなる。体部には明確な段がつかない。	石英及び角セン石を少量含む	淡白褐色	良好	ハケ目の残存ナデ	ハケ目の後横ナデ	○土師器 ○体部のみで脚部欠失
46-2	器台	現存高 7.5 底径 12.8	端部に向って内反気味に大きく外側に開き、端部は丸味をもつ。	石英及び角セン石を多く含む	茶褐色	良好	ナデ	横方向のヘラ削り端部付近ナデ	○土師器 ○脚部のみで体部欠失

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
46－3	小型丸底壺	口径 9.0 胴部径 9.5 器高 7.8	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が短かく直線的に外側に開く。端部は丸くなる。口径より胴部径が大きい	石英及び角セン石を少量含む	淡赤褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ヘラ削り	○七部焼 ○底部穿孔
46－4	小形丸底壺	口径 10.1 胴部径 10.4 器高 9.4	頸部でくの字に屈曲した後口縁部がやや長く内傾気味に外側に開く。端部は丸くなる。口径と胴部径がほぼ同じである。	角セン石及び白色小石を含む	淡褐色	良好	ハケ目の後横ナデ	口縁部横ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○底部穿孔
46－5	小型丸底壺	口径 11.3 胴部径 11.7 器高 8.5	頸部でくの字で屈曲した後、口縁部が短かく直線的に外側に開く。端部は丸くなる。口径より胴部径が若干大きい。	石英及び角セン石を含む	淡褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目	口縁部横ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○底部穿孔
46－6	壺	口径 17.2 胴部径 24.9 現存高 25.0	頸部でくの字で屈曲した後、口縁部が直線的にやや外側に開き、端部近くで若干外反する。端部はナデで平坦で外側に若干つまみ出している。	石英及び角セン石を含む	茶褐色	良	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ハケ目	口縁部横ナデ 胴部斜方向のヘラ削り	○土師器



第45図　4号円墳周溝内出土土器実測図

かけて検出された。遺構は、円形に巡る周溝のみの検出で、主体部の検出はない。また、削平されていることから墳丘も確認出来なかった。周溝は、全体の半分程残っており西側部分についてはたばこの葉を乾燥する施設の建設により削平され消滅している。主軸は、



第47図　4号円墳周溝内出土鉄器実測図

第13表　4号円墳周溝内出土鉄器観察表

遺物番号	種類	法量（cm）	特徴	備考
47-1	マサガンナ	現存長 6.0 幅 0.9~1.2 厚 0.2		○周溝内 ○茎部欠損
47-2	刀子	全長 8.6　茎長 2.0 刃長 6.6　茎幅 0.8 身幅 1.1　茎厚 0.3 身厚 0.3	関は内湾 茎の断面は長方形を呈する	○周溝内

陸橋部及び主体部の検出がないことから不明である。全体規模は、推定であるが外径で直径約26m、内径で直径約20m前後の円墳と考えられる。周溝は、幅2.42m、深さ0.74mを測り、周溝の壁は内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がる。

主体部は、検出されなかったことから形態や規模などについては不明である。

周溝内からは、古式土師器の高杯や小型丸底壺・壺が出土した。いずれの遺物も、周溝底からやや浮いた状態で出土している。

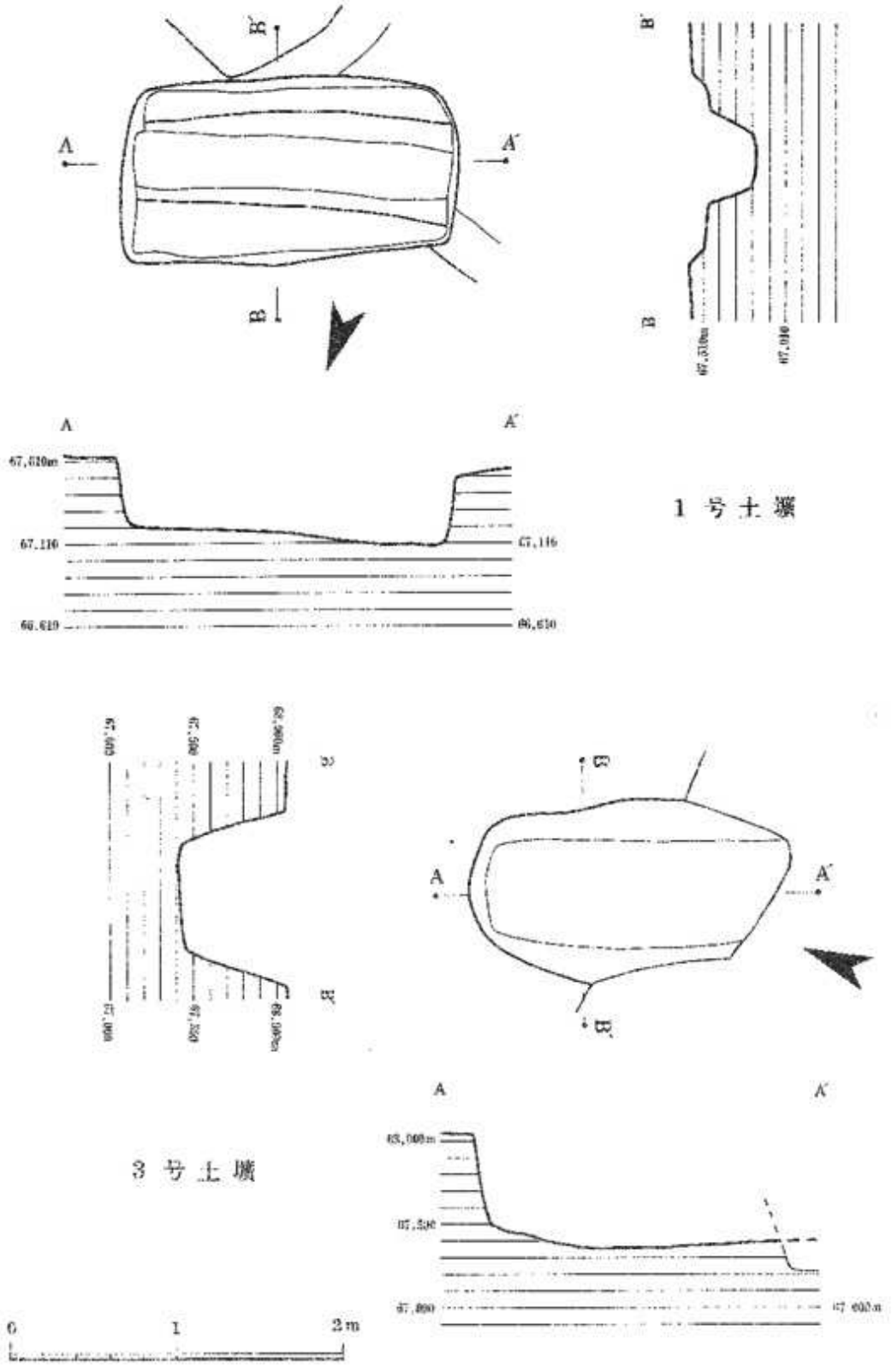
（4）土壙と出土遺物

1号土壙

遺構（第48図）

土壙は、4－C－26グリッドに4号住居跡と切り合った状態で検出された。4号住居跡との前後関係は、遺構確認の段階で埋土色の違いにより当土壙が新しいことが確認された。土壙は、主軸をN－70°15′－Eに取り掘られ、規模は長さ2.02m、幅1.12mで深さ0.40mを測り隅丸長方形を呈している。土壙は、長辺側の左右にさらに段がつき二段になっている。内側の規模は、幅0.57mで深さ0.28mを測り断面がU字形を呈している。木棺を、埋設した可能性が考えられる。

土壙内からは、遺物の出土は全くなかった。



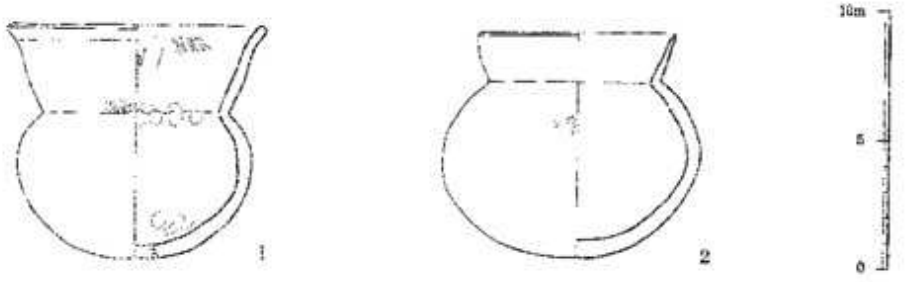
第48図　1号・3号土壙実測図

3号土壙

遺構（第48図）　　出土遺物（第49図・第14表）

土壙は、4－C－13・14グリッドに1号方形周溝墓の周溝と切り合った状態で検出された。1号方形周溝墓との前後関係は、確認出来なかった。土壙は、主軸をN－22°00′－Wに取り掘られ、規模は長さ1.56m以上、幅1.06mで深さ0.62mを測り隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形は、U字形を呈する。

土壙内からは、土師器の小型丸底壺片が埋土中より出土している。



第49図　3号土壙内出土土器実測図

第14表　3号土壙内出土土器観察表

掲載番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
49－1	小型丸底壺	口径 10.0 頸部径 7.2 胴部径 9.0 器高 9.0	頸部でくの字に屈曲した後に胴部は外反しながら直線的にのび端部は丸くやや外反する。口縁部は高く、頸部径より口径の方が大きい。頸部と胴部の内側には絞頸痕が残る。	角セン石及び白色小石を多く含む	淡黒褐色	良	口縁部ハケ目の後ナデ 頸部ナデ	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ナデ	○土師器
49－2	小型丸底壺	口径 7.6 頸部径 6.6 胴部径 10.0 器高 8.7	頸部でくの字に屈曲した後は頸部は外傾しながら直線的に立ち上がり端部は尖がる。口縁部は短かく口径より胴部径が大きい。	金雲母及び角セン石を多く含む	外面黒色 内面淡黒褐色	良	口縁部ナデ 頸部ハケ目の後ナデ	ナデ	○土師器 ○外面は黒漆塗り

4号土壙

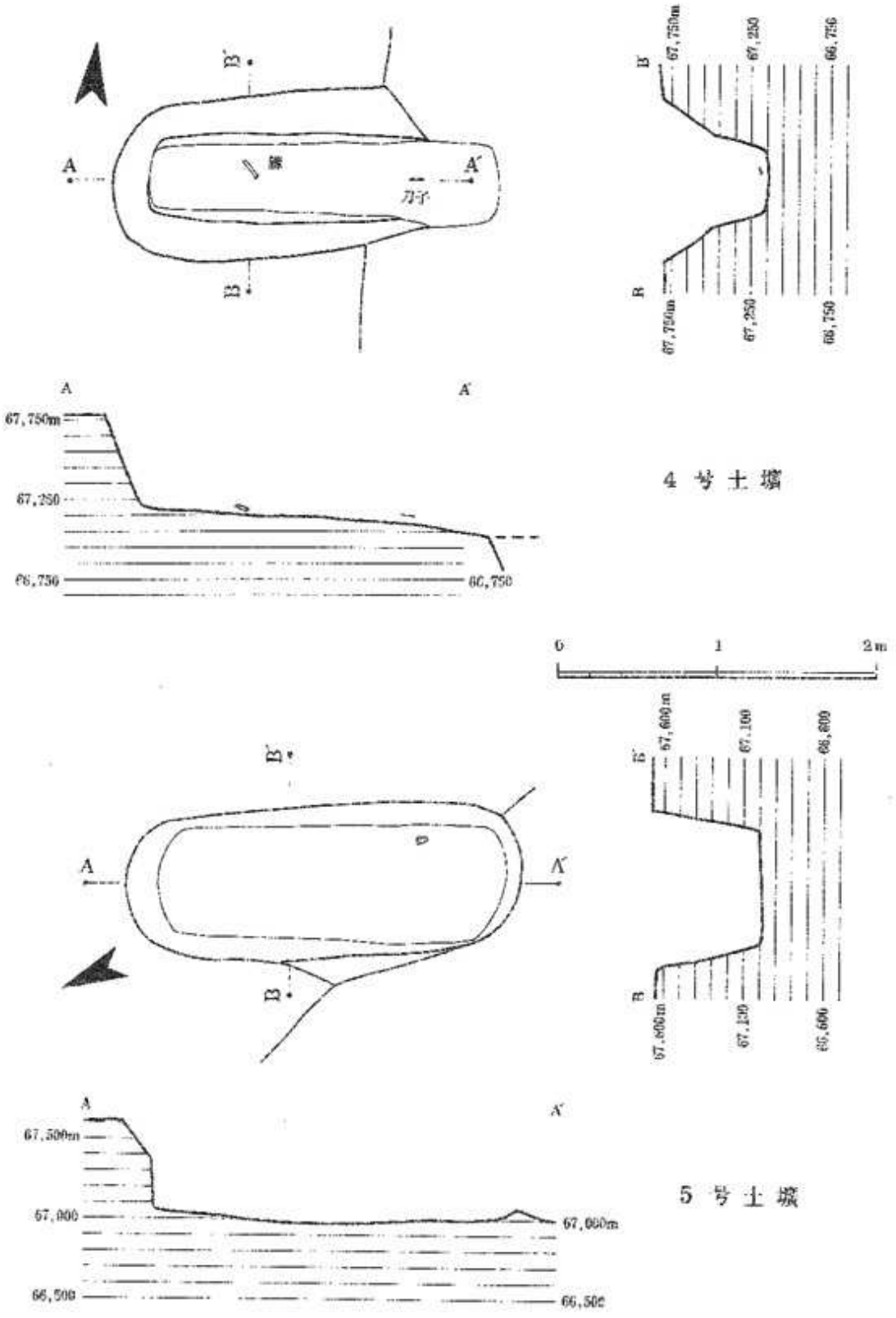
遺構（第50図）　　出土遺物（第51図・第15表）

土壙は、4－C－7グリッドに4号溝と切り合った状態で検出された。4号溝との前後関係は、溝が古く当土壙が新しい。土壙は、主軸をN－85°00′－Eでほぼ東西に取り掘られ、規模は長さ1.54m以上、幅1.00mで深さ0.66mを測り隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形は、U字形を呈する。

土壙内からは、西側壁近くの墓底面より鉄鏃1点と東側壁近くの墓底面より刀子が1点の2点の鉄器が出土している。

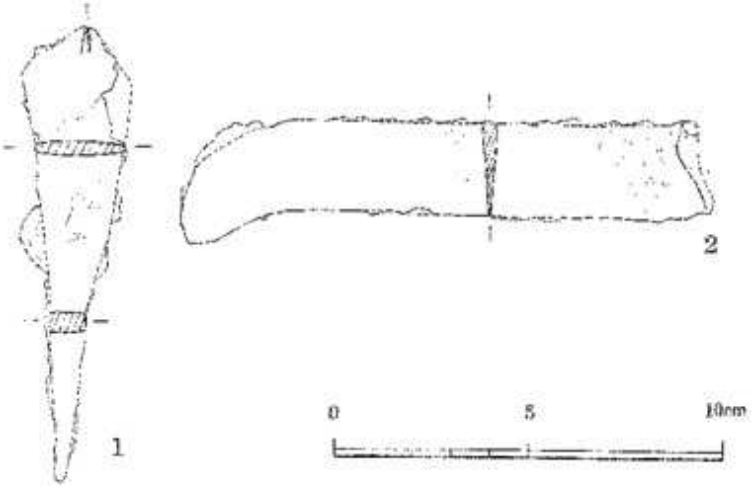
5号土壙

遺構（第50図）



第50図　4号・5号土壙実測図

土壙は、4－C－7グリッドに4号円墳の周溝と切り合った状態で検出された。4号円墳との前後関係は、確認出来なかった。土壙は、主軸をN－20°00′－Eに取り掘られ、規模は長さ2.22m、幅0.88mで深さ0.68mを測り隅丸長方形を呈す



第51図　4号土壙内出土鉄器実測図

第15表　4号土壙内出土鉄器観察表察表

遺物番号	種類	法量（cm）	特徴	備考
1	鉄鏃	全長 11.7 刃長 7.0　茎長 4.7 身幅 2.9　茎幅 1.2 身厚 0.4　茎厚 0.5	有茎	柳葉形
2	鎌	全長 13.7 幅 2.4 厚 0.4	茎部は上方に曲げられている	○装着部には柄の木質が残る ○完形

るものと考えられる。断面形は、U字形を呈する。

土壙内からは、遺物の出土は全くなかった。

3．奈良・平安時代

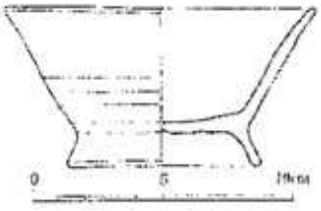
（1）土壙と出土遺物

2号土壙

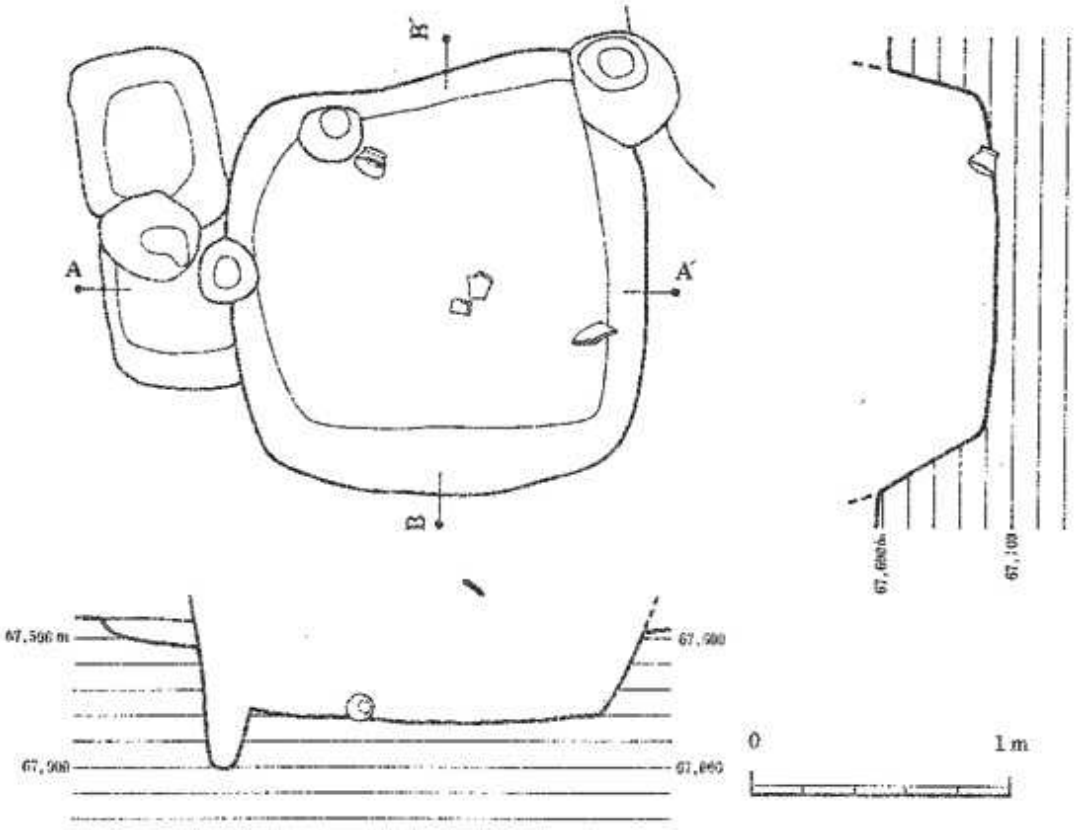
遺構（第53図）　　出土遺物（第52図・第16表）

土壙は、4－C－34・35グリッドに2号住居跡と切り合った状態で検出された。前後関係は、2号住居跡が古く、当土壙が新しい。土壙の規模は、長辺1.70m、短辺1.60mで深さ0.42mを測り隅丸方形を呈している。断面形は、U字形を呈する。

土壙内からは、北側の壁際より土師器の高台付坏が出土している。



第52図　2号土壙内出土土器実測図



第53図　2号土壙実測図

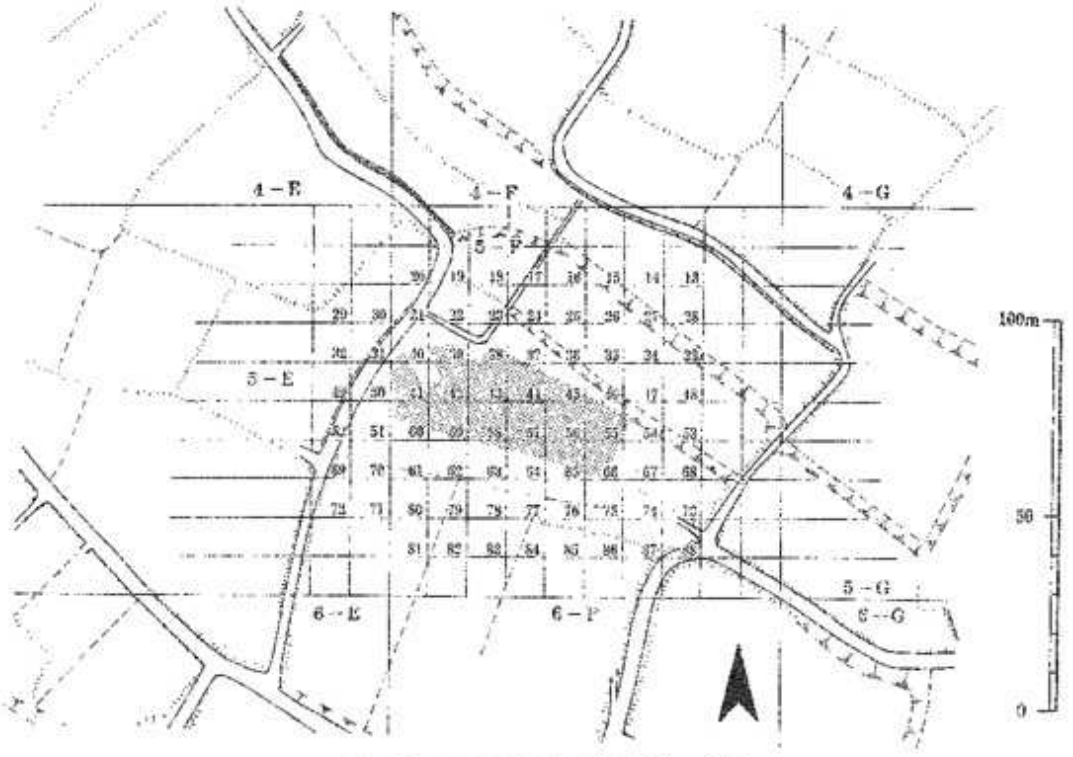
第16表　2号土壙内出土土器観察表

図版番号	器形	法量 (cm)	器種的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
52 1 1	坏	口径 12.0 器高 6.2 高台高 1.3 高台径 7.6	体部は外に大きく開きながら緩曲的に立ち上がり、端部は丸くなる。底部には、体部との境に高い高台を貼り付ける。	雲母粒及び角セン石を多く含む	淡赤褐色	良	ナデ 底部 回転ヘラ切り	ナデ	○土師器 ○ミガキ引き痕が残る ○高台貼り付け ○完形品

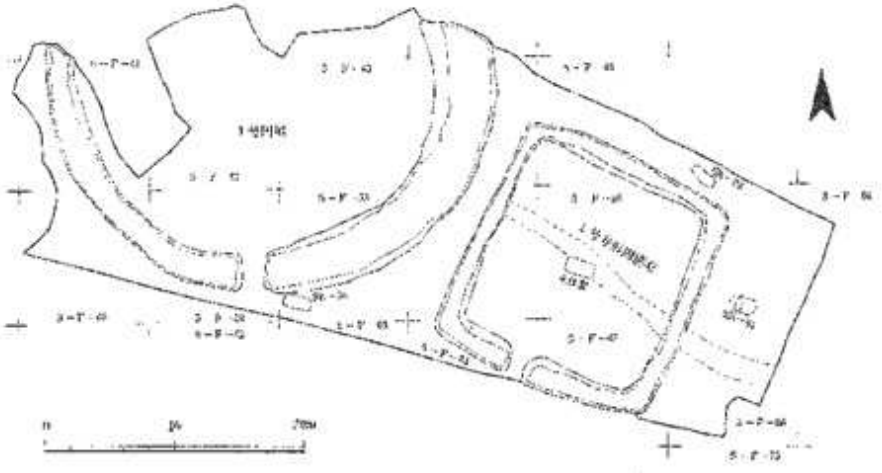
第Ⅴ章　八反田（はったんだ）遺跡Ｃ地区の成果

第１節　遺跡の概要

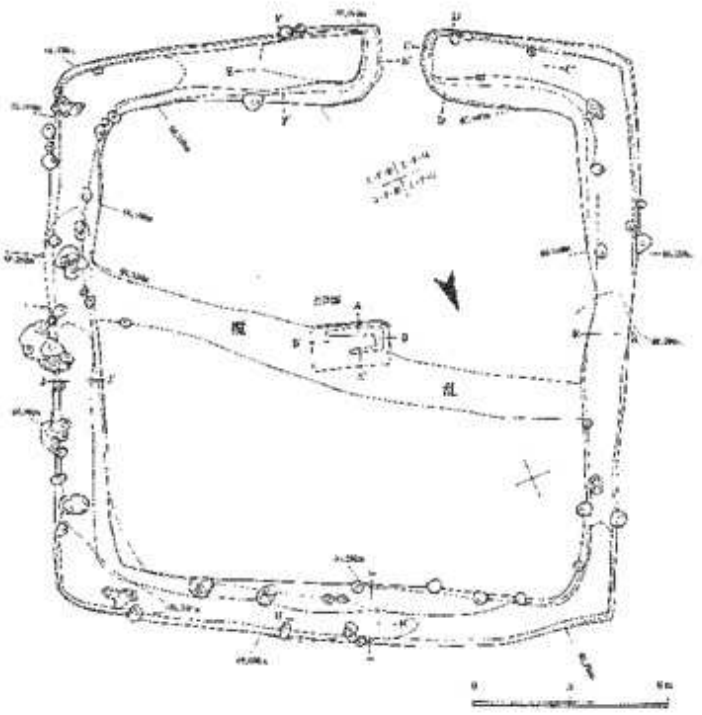
八反田遺跡C地区は、平成元年度に調査を行った八反田遺跡B地区から道路を隔てたすぐ北



第54図　八反田遺跡Ｃ地区グリッド図

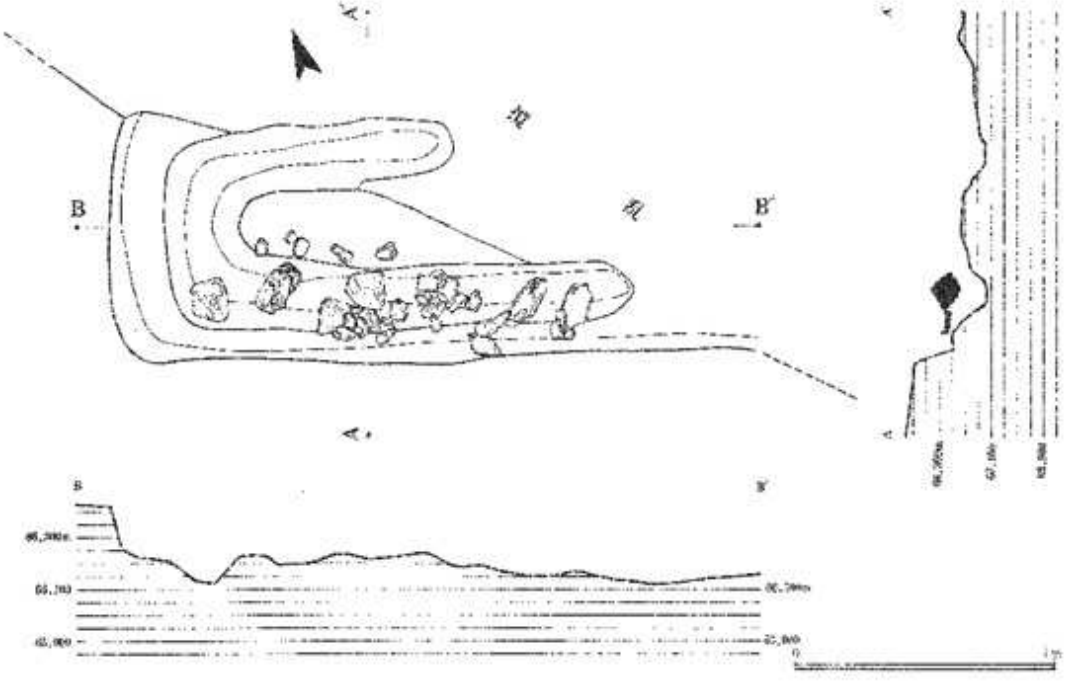


第55図　八反田遺跡Ｃ地区遺構配置図

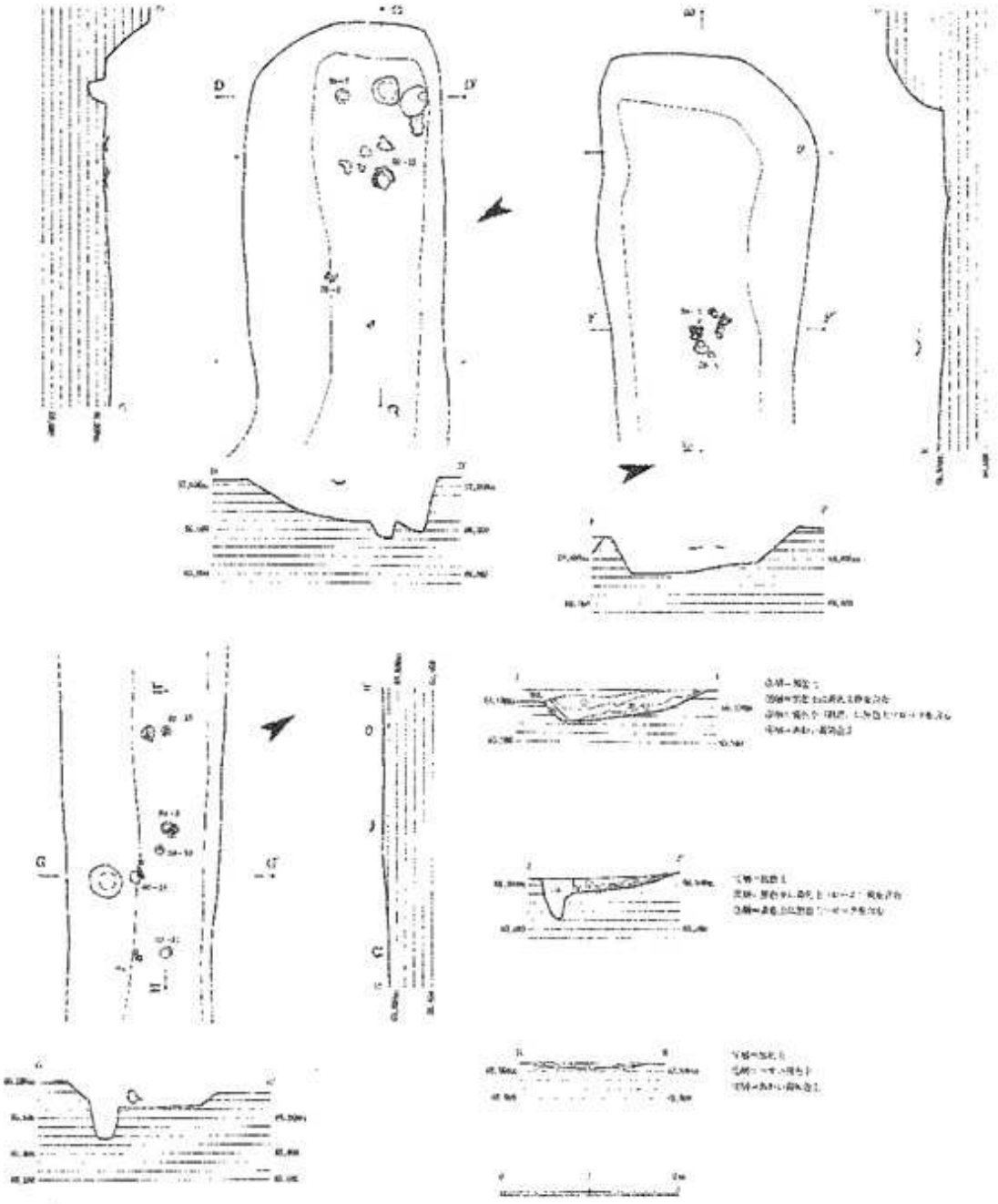


第56図　1号方形周溝墓測量図

側で、大グリッドでは5－Fグリッドに位置している。石立遺跡からは、東へ約400m離れている。遺跡は、台地の北側縁部にあたり、すぐ北側は合志川及び水田面に向かって急激に傾斜している。遺跡の海抜標高は、石立遺跡とほぼ同じで68m前後の面で遺構検出を行っており、水田面との比高差は約28mを測る。遺跡の調査面積は、約1,500㎡である。遺跡は、古墳時代から平安時代にかけてのもので、検出された遺構は古墳時代



第57図　1号方形周溝墓主体部実測図

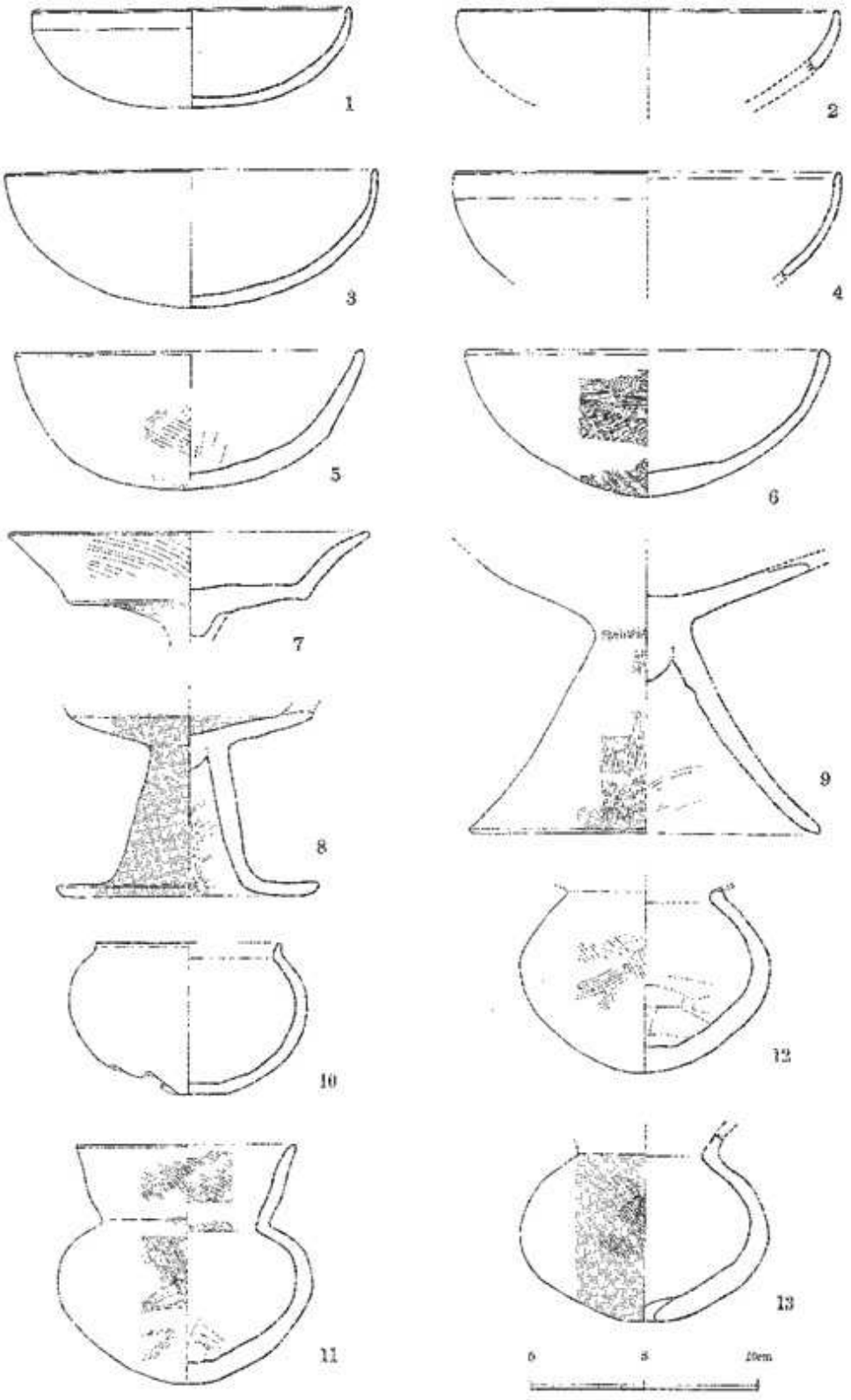


第58図　1号方形周溝墓周溝内遺物出土状態及び土層断面図

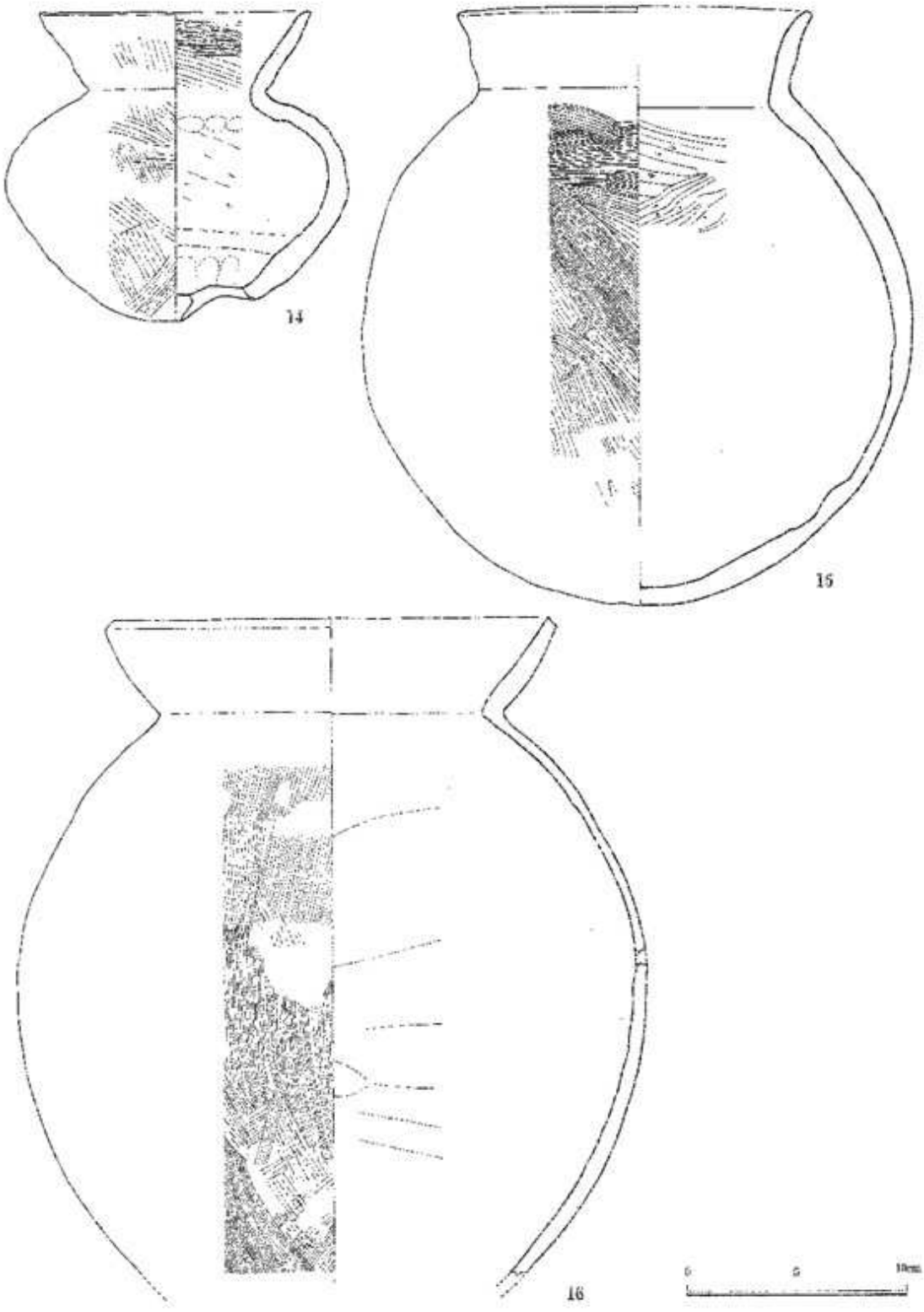
の方形周溝墓1基と円墳1基、土壙2基、それに平安時代の土壙1基で、遺跡は開墾により削平を受けていることから遺構の残存状態はあまり良くない。

第2節　遺構と遺物

1．古墳時代



第59図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（1）



第60図　1号方形周溝墓周溝内出土土器実測図（2）

第17表　1号方形周溝墓周溝内出土土器観察表

出土番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
59－1	壺	口径 14.0 器高 4.4	丸底の底部より内湾しながら立ち上がり口縁部は直口する。端部はやや尖がり気味である。	金雲母を多量に含む	赤褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器
59－2	壺	口径 8.3 現存高 3.8	内湾しながら立ち上がり口縁部は直口する。端部はやや尖がり気味である。	砂粒を多く含む	淡赤褐色	良好	ヘラ磨き	ナデ	○土師器
59－3	壺	口径 16.3 器高 6.1	丸底の底部より内湾しながら立ち上がり口縁部は直口する。端部は丸味をもつ。	金雲母を含む	淡赤褐色	良好	ヘラ磨き	ヘラ磨き	○土師器
59－4	壺	口径 17.0 現存高 4.7	内湾しながら立ち上がり口縁部は直口する。端部はやや尖がり気味である。	金雲母を多く含む	赤褐色	良好	ヘラ磨き	ナデ	○土師器
59－5	壺	口径 15.3 器高 6.2	丸底の底部より内湾しながら立ち上がりそのまま端部に至る。端部は丸味をもつ。器壁が厚い。	小石及び角セン石を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 体部、底部ハケ目	口縁部ナデ 体部、底部ヘラ削りの後ナデ	○土師器
59－6	壺	口径 16.0 器高 6.5	丸底でやや尖がり気味の底部より内湾しながら立ち上がりそのまま端部に至る。端部は丸味をもつ。	角セン石を含む	淡茶褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ヘラ削りの後ナデ	○土師器 ○変形品
59－7	高杯	口径 15.8 現存高 4.6	杯部の下半はほぼ水平にのび口縁部は屈曲して外反しながら外側に開く、端部は丸くなる。	長石、角セン石、金雲母を含む	淡茶褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ナデ	○土師器 ○脚部欠失
59－8	高杯	現存高 8.1 底径 11.5	脚部は筒状で中央がやや膨らみ裾部はほぼ真横に開く。端部は丸くなる。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ナデ	杯部ナデ 脚部ヘラ削り後ナデ	○土師器 ○杯部欠失 ○外面と脚部内面に赤色顔料塗布
59－9	高杯	現存高 11.8 底径 15.4	脚部はラッパ状に開き裾端部に至る。端部はやや尖がり気味である。	角セン石を多く含む	淡黄褐色	良好	杯部ナデ 脚部ハケ目の後ナデ	杯部ナデ 脚部ハケ目の後ナデ	○土師器 ○杯部欠失 ○外面と脚部内面に赤色顔料塗布
59－10	器台	口径 8.2 脚部径 10.5 器高 6.7	脚部で屈曲した後に端部が短かく直口し、端部は丸くなる。脚部は口径より大きく最大径は中位よりやや上にある。	角セン石、金雲母を多く含む	淡黄褐色	良好	ナデ	口縁部ナデ 脚部ヘラ削りの後ナデ	○土師器 ○変形品 ○底部穿孔
59－11	小型丸底壺	口径 9.6 胴部径 11.2 器高 10.5	頸部でくびれた後に屈曲した後口縁部が直線的に外側に開く、端部は丸くなる。胴部は最大径が中位よりやや上にあり口径より大きい。	角セン石、金雲母、白色小石を多く含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ヘラ削りの後ナデ	○土師器 ○変形品
59－12	小型丸底壺	胴部径 11.0 現存高 8.0	口縁部は欠失し胴部は最大径がほぼ中位にあり卵胴形をなす。	角セン石、白色小石を多く含む	淡赤褐色	良好	ハケ目の後ナデ	指による整形の後ナデ	○土師器 ○口縁部欠失 ○外面に赤色顔料塗布
59－13	小型丸底壺	胴部径 11.0 現存高 8.5	口縁部は欠失し胴部は最大径がほぼ中位にあり卵胴形をなす。	角セン石、白色小石を多く含む	淡赤褐色	良好	ハケ目の後ナデ	指による整形の後ナデ	○土師器 ○口縁部欠失 ○外面に赤色顔料塗布 ○底部穿孔

遺構番号	器形	法量（cm）	形態特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
60	壺	口径 12.3 胴部径 15.6 器高 19.2	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が直線的に外側に開く。端部はやや尖がり気味である。胴部は最大径が中位よりややしたにあり、口径より大きい。	角セン石、金雲母、石英を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目 頸部ヘラ削り	○土師器 ○心形品 ○底部穿孔
60	壺	口径 16.3 胴部径 25.1 器高 27.4	頸部でくの字に屈曲した後口縁部はやや外反気味に外側に開く。端部は丸い。胴部は最大径がほぼ中位にあり球形をなす。	角セン石、金雲母を多く含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○内面口縁部に赤色顔料塗布
60	壺	口径 20.5 胴部径 28.6 現存高 15.4	頸部でくの字に屈曲した後口縁部はやや内湾気味に外側に開く。端部はナデて平坦にしている。	角セン石を多く含む	淡黄褐色	良	口縁部ナデ 胴部ヘケ目	口縁部ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器

（1）方形周溝墓と出土遺物

1号方形周溝墓

遺構（第56～58図）　　出土遺物（第59～60図・第17表）

遺構は、調査区東側で、5－F－44・45・46・55・56・57・64・65・66グリッドの区域にかけて検出された。遺構は方形に巡る周溝と主体部の一部を検出した。墳丘は、開墾により削平を受けていることから確認出来なかった。周溝は、南側部分の縁部の一部を若干道路より削られていたが、全体を検出することができた。陸橋部は、南側で中央からやや西よりに設けられており、幅は1.23mを測る。主軸は、N－30°15′－Eを取り築造されている。全体規模は、主軸外径が18.95m、主軸内径が14.80m、直交軸外径が18.19m、直交軸内径が15.18mを測り、ほぼ方形を呈する。周溝は、幅0.86～2.36m、深さ0.07～0.51mを測り、周溝の壁は溝の内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がる。

主体部は、攪乱の溝により北側の一部を破壊され、また開墾により削平され残存状態が非常に悪く詳細を知ることはできないが、阿蘇溶結凝灰岩の石材片や石棺を埋設するための溝が検出されたことにより、ある程度推測できる。石棺は、長さ1.90m前後で幅0.60m前後の規模で、凝灰岩製の組み合わせ式石棺をN－67°00′－Wの主軸方向を取り埋設されていたものと考えられる。蓋の形態は、不明であるが、箱式石棺の可能性が強い。墓壙の規模は、長さ2.50m前後で幅1.00m前後と考えられ、隅丸長方形を呈している。墓壙床面には、石棺材を埋め込み固定するための細長い溝を検出している。主体部からは、人骨や副葬品等の遺物の出土は全くなかった。

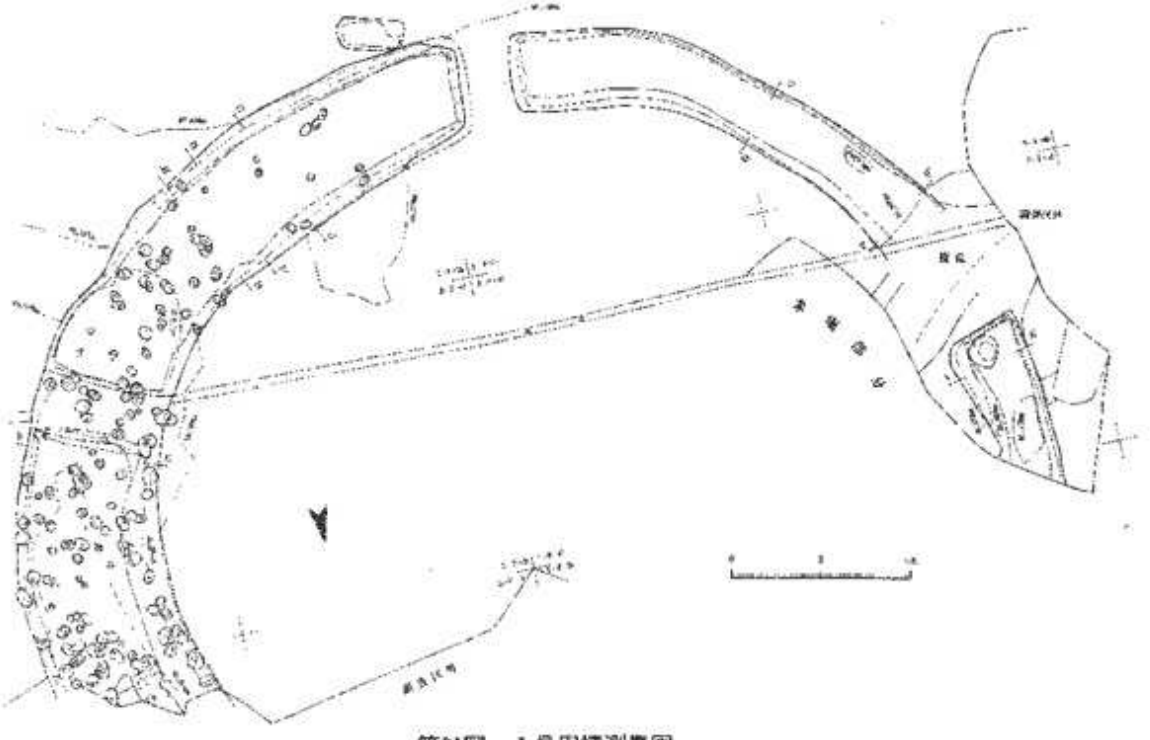
周溝内からは、多くの古式土師器が出土した。遺物の出土地点は、陸橋部の両側と北側周溝のほぼ中央部分に限られている。陸橋部の東側からは、土師器の甕が周溝底より20cm程浮いた状態で出土し、陸橋部の西側からは土師器の甕や鉢・高杯が周溝底より20cm程浮いた状態で出土している。さらには、北側の周溝内からも土師器の鉢や高杯・小型丸底壺・甕が周溝底よりやや浮いた状態で出土している。

（2）円墳と出土遺物

1号円墳

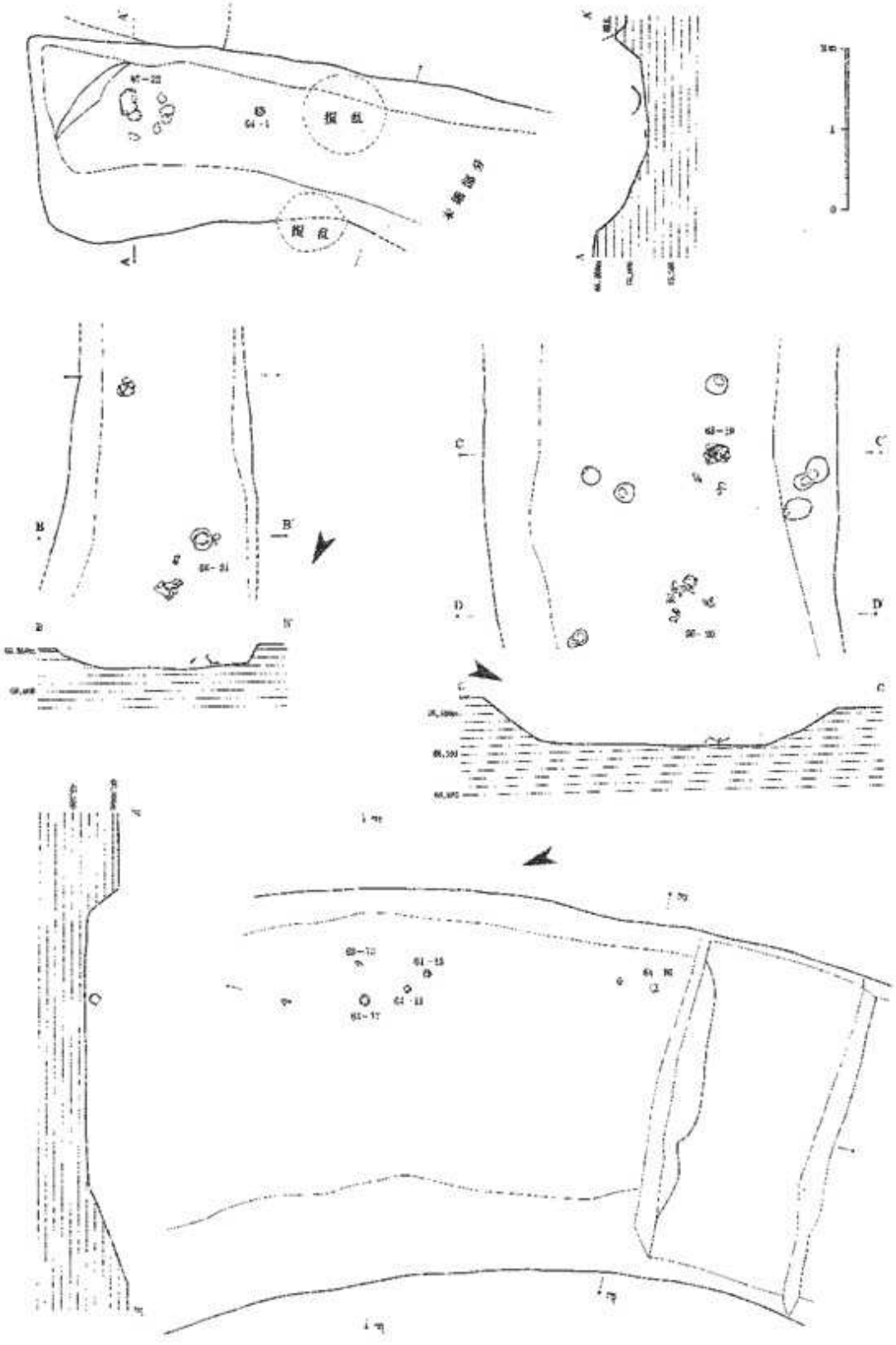
遺構（第61～63図）　　出土遺物（第64～67図・第18表）

遺構は、調査区西側部分で、5－F－41・42・43・44・57・58・59・60グリッドの区域にかけて検出された。遺構は、円形に巡る周溝のみの検出で、主体部の検出はない。また、削平されていることから墳丘も確認出来なかった。周溝は、全体の半分程度が残っており北側部分については開墾により削平され消滅している。幸い南側に陸橋部が検出されたことにより主軸や全体規模についてはおおよそ推定出来る。主軸は、N－3°00′－Eを取り築造されており、

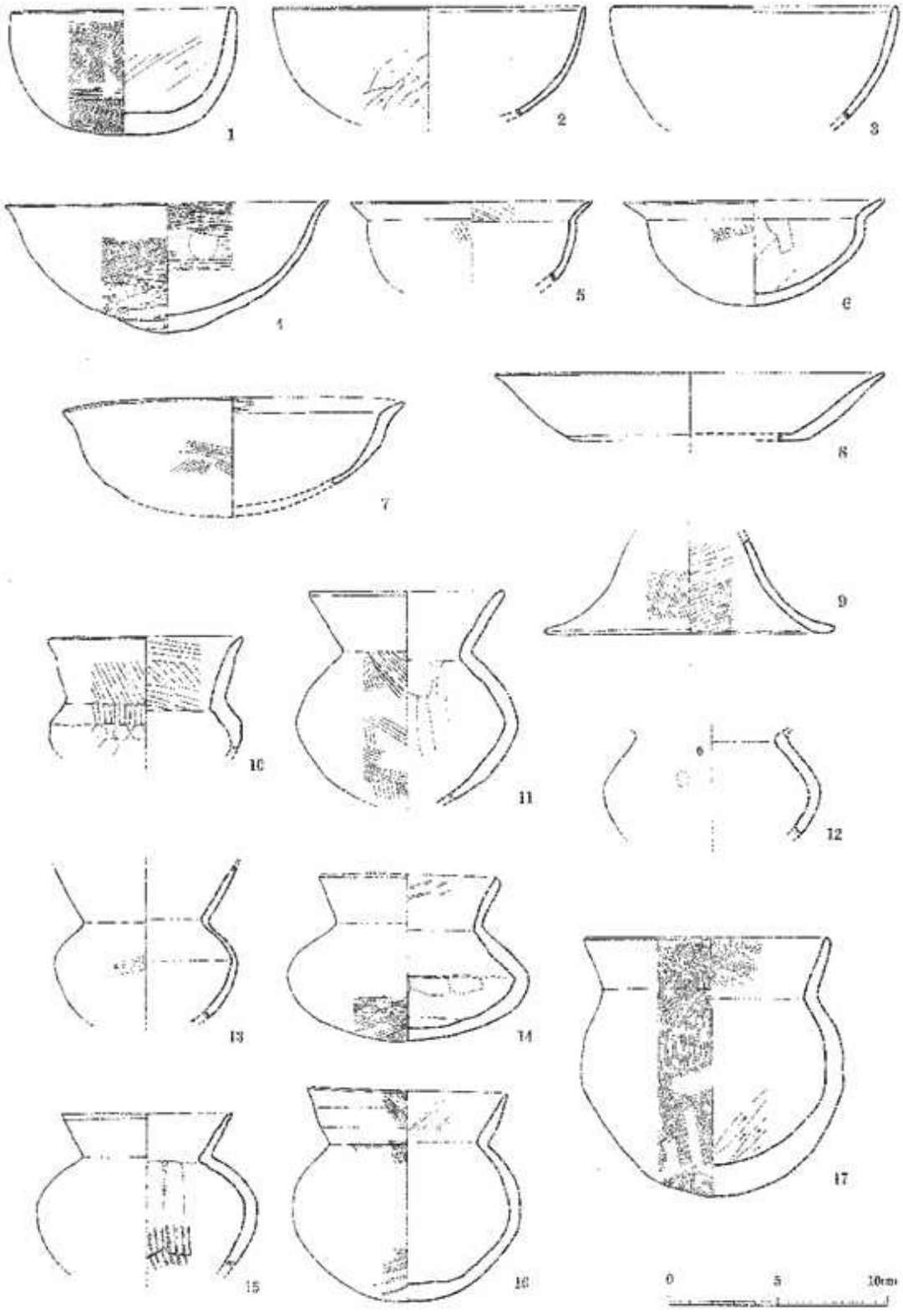


第61図　1号円墳測量図

第62図　1号円墳周溝土層断面図



第63図　1号円墳周溝内遺物出土状態実測図

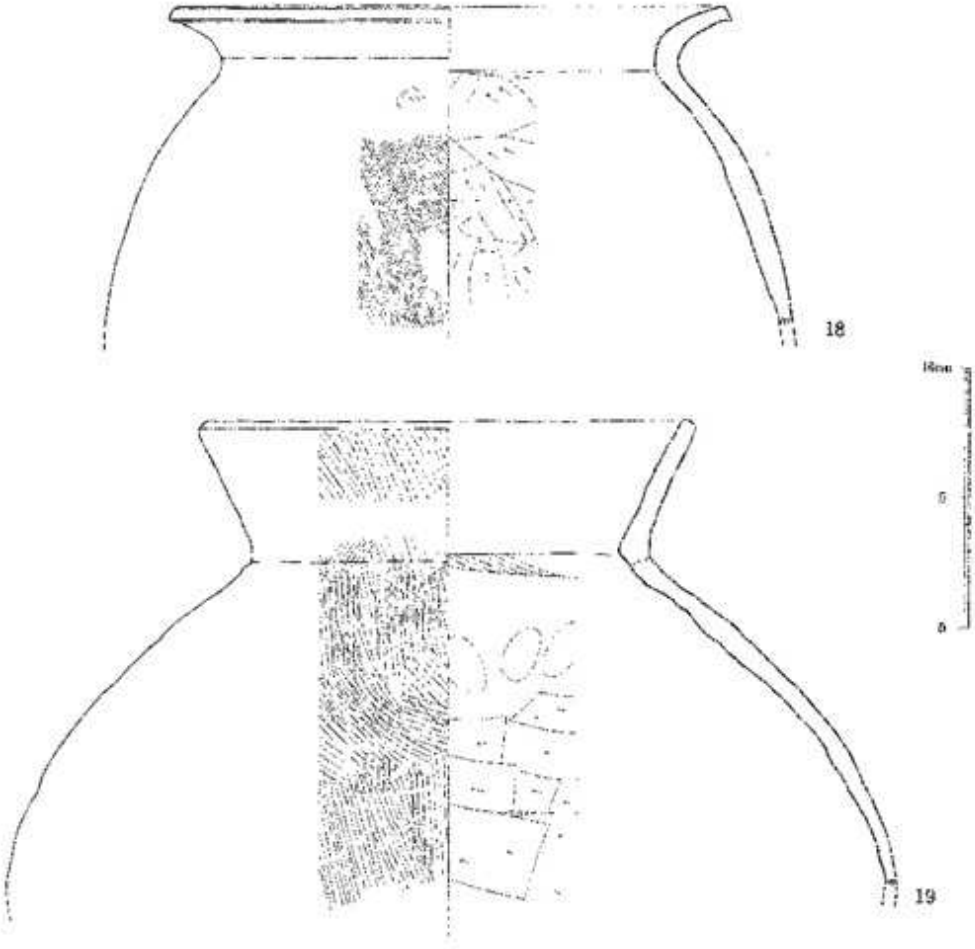


第64図　1号円墳周溝内出土土器実測図（1）

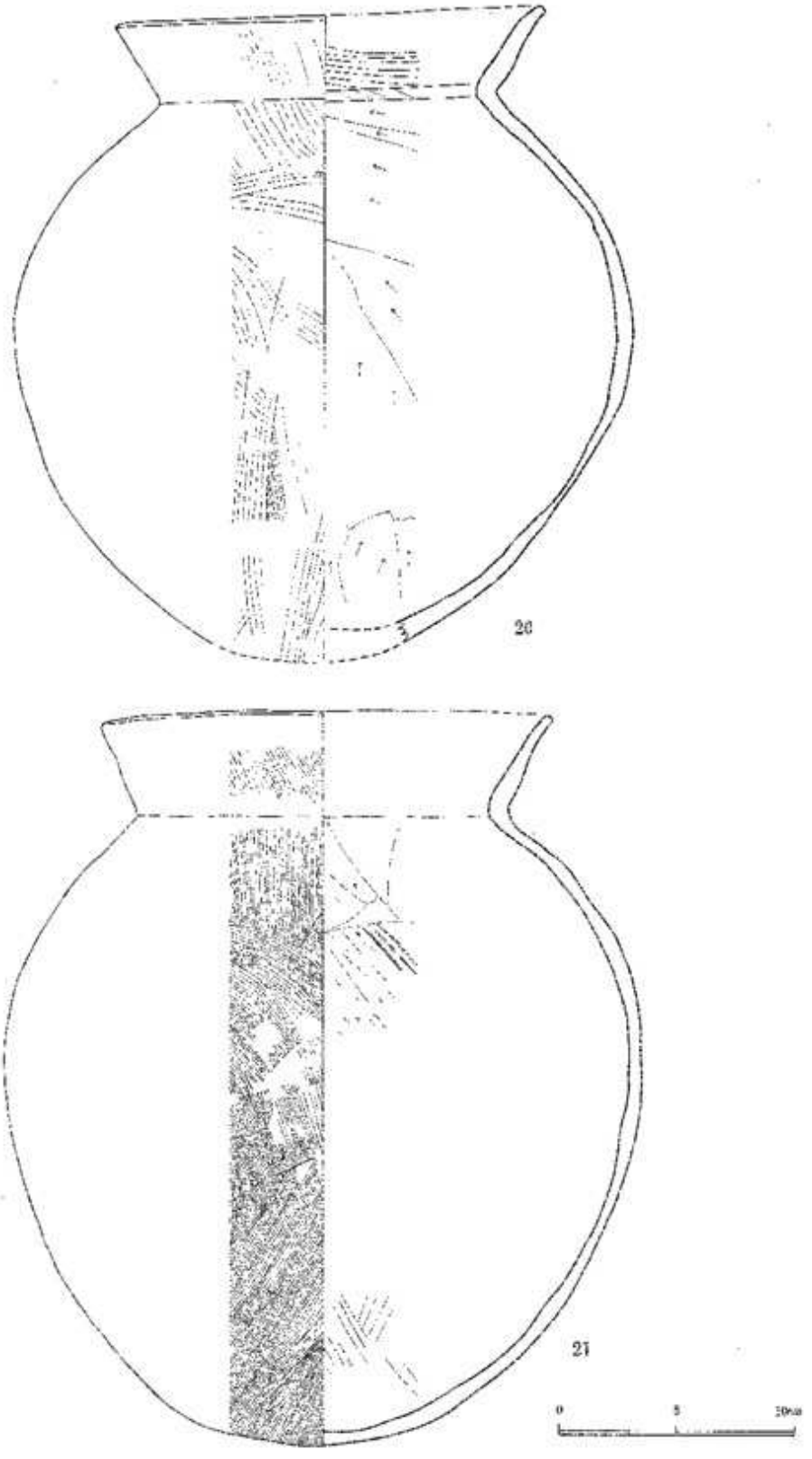
ほぼ真南に幅1.40mの陸橋部が設けられている。全体規模は、推定であるが外径で直径約34m、内径で直径約27m前後の円墳と考えられる。周溝は、幅2.03～4.93m、深さ0.20～0.60mを測り、周溝の壁は溝の内側部分つまり墳丘側が外側に比べかなり緩やかな傾斜で立ち上がる。周溝は、浅いことからかなり削平されているものと考えられる。

主体部は、検出されなかったことから形態や規模などについては不明である。

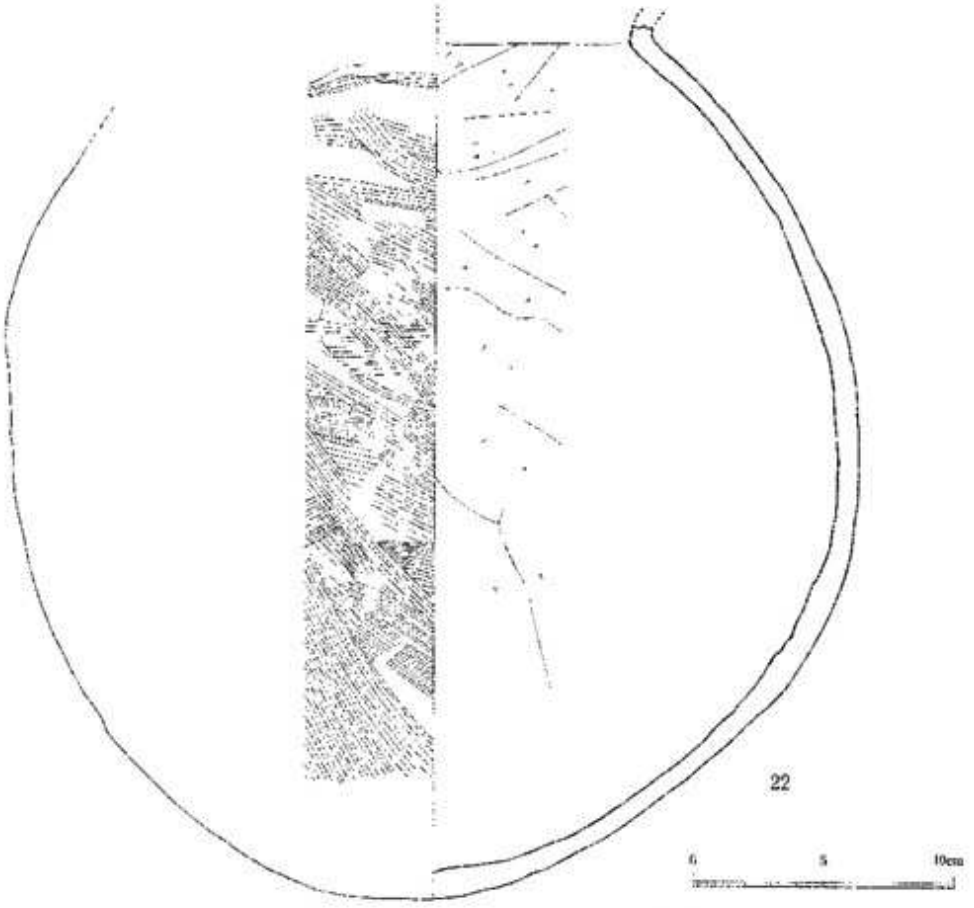
周溝内からは、多くの古式土師器が出土した。遺物の出土地点は、4カ所に分散して認められ陸橋部の近くからは遺物の出土はない。遺物は、陸橋部の東側で陸橋部より約9m離れた地点に甕が割れた状態で、さらに北方へ約10m離れた地点からは小型壺や小型丸底壺の完形品が、基底面よりやや浮いた状態で出土している。陸橋部の西側で陸橋部より約14m離れた地点からは甕が割れた状態で、さらに約6m離れた地点からは割れた状態の甕と器の完形品が基底面よりやや浮いた状態で出土している。



第65図　1号円墳周溝内出土土器実測図（2）



第66図　1号円墳周溝内出土土器実測図（3）



第67図　1号円墳周溝内出土土器実測図（4）

第18表　1号円墳周溝内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
64-1	壺	口径 10.4 器高 5.8	底部より内湾しながら直口気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。	金雲母、角セン石、白色小石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目	ヘラ削りの後ナデ	○土師器 ○完形品
64-2	壺	口径 14.4 現存高 6.1	内湾しながら立ち上がり外側に開く、端部は尖がり気味である。器壁が薄い。	金雲母を多く含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 体部ヘラ削りの後ナデ	ナデ	○土師器 ○底部欠失
64-3	壺	口径 13.4 現存高 5.0	内湾しながら立ち上がり外側に開く。端部は尖がり気味である。	角セン石を含む	淡赤褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 ○底部欠失
64-4	壺	口径 14.8 器高 6.0	やや尖がり気味の丸底の底部から内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。端部は尖かっている。	金雲母、白色小石を含む	淡赤褐色	良	口縁部ナデ 体部ヘラ削り	口縁部ハケ目 体部ナデ	○土師器 ○口縁部内面に赤色顔料塗布
64-5	壺	口径 11.2 現存高 3.8	内湾しながら立ち上がり頸部で屈曲した後口縁部が直線的に外側に短かく開く。端部は尖がり気味。	金雲母、角セン石、白色小石を含む	淡赤褐色	良好	口縁部ナデ 体部ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目 体部ナデ	○土師器 ○底部欠失

第18表　1号円墳周溝内出土土器観察表

遺物番号	器形	法量(cm)	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
64-6	壺	口径 13.6 器高 4.8	内湾しながら立ち上がり頸部で屈曲した後口縁部が直線的に外側に短かく開く。端部は尖がり気味。底部は丸底。	小石を少量含む	茶褐色	良好	口縁部ヘラ研磨 体部ハケ目の後ヘラ研磨	ヘラ研磨	○土師器
64-7	壺	口径 15.8 器高 5.5	内湾しながら立ち上がり頸部で屈曲した後、口縁部が直線的に外側に短かく開く。端部は尖がり気味。底部は丸底。	角セン石、小石を多く含む	淡黄褐色	良好	ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目の後ナデ 体部ナデ	○土師器
64-8	高杯	口径 18.0 現存高 3.2	口縁部は直線的に大きく外側に開き、端部は尖がり気味。	角セン石、白色小石を含む	淡黄褐色	良好	ナデ	ナデ	○土師器 口縁部欠失 ○内面に赤色顔料塗布
64-9	高杯	現存高 4.8 底径 13.4	ラッパ状に開き裾部がやや外反する。端部は尖がり気味。	金雲母、角セン石、白色小石を含む	淡茶褐色	良好	ハケ目の後ナデ	ハケ目の後ナデ	○土師器 ○杯部欠失
64-10	小型丸底壺	口径 9.0 胴部径 8.8 現存高 5.9	卵形でくの字に屈曲した後口縁部はほぼ直線的に外側に開く。端部は丸くなる。口径と胴部径はほぼ同じである。	角セン石、石英を含む	淡茶褐色	良好	口縁部ハケ目の後横ナデ 胴部ナデ	口縁部ハケ目 胴部指による整形の後ナデ	○土師器 ○底部欠失
64-11	小型丸底壺	口径 9.0 胴部径 10.2 現存高 9.7	卵形でくの字に屈曲した後口縁部は直線的に外側に開く。端部は丸くなる。胴部最大径は中位にあり卵形になり、口径より大きい。	角セン石を含む	明淡茶褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部横ナデ 胴部指による整形の後ナデ	○土師器 ○底部欠失
64-12	小型丸底壺	胴部径 10.0 現存高 4.7	胴部最大径は丸形中位にあり卵形を呈するものと考えられる。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ナデ	指による整形の後ナデ	○土師器 ○口縁部及び底部欠失
64-13	小型丸底壺	胴部径 8.4 現存高 7.1	胴部でくの字に屈曲した後口縁部は直線的に外側に開く。胴部最大径は中位よりやや上にある。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	ナデ	○土師器
64-14	小型丸底壺	口径 8.4 胴部径 11.2 器高 7.7	胴部でくの字に屈曲した後口縁部が短かくやや外反気味に外側に開く。胴部の最大径は中位にあり口径よりも大きい。	角セン石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部ナデ 胴部指による整形の後ナデ	○土師器
64-15	小型丸底壺	口径 7.8 胴部径 10.2 現存高 7.0	胴部でくの字に屈曲した後口縁部が直線的に短かく外側に開く。端部は尖がり気味。胴部は最大径が中位にあり、口径よりも大きい。	角セン石、石英を少量含む	淡黄褐色	良好	横ナデ	口縁部横ナデ 胴部ナデ	○土師器
64-16	小型丸底壺	口径 9.3 胴部径 10.6 器高 9.5	胴部でくの字に屈曲した後口縁部は直線的に短かく外側に開く。端部は尖がる。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、口径よりも大きい。	角セン石、石英を含む	淡茶褐色	良好	口縁部横ナデ 胴部ハケ目の後ナデ	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ナデ	○土師器 ○完形品
64-17	小型壺	口径 11.3 胴部径 12.0 器高 12.0	胴部でくの字に屈曲した後口縁部が直線的に短かく外側に開く。端部はやや尖がり気味。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、口径より大きい。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目	口縁部ハケ目 胴部ヘラ削り	○土師器 ○完形品
64-18	甕	口径 21.6 現存高 12.3	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が外反しながら外側に開く。端部はすぼまっている。	角セン石、小石を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○底部欠失

第18表　1号円墳周溝内出土土器観察表

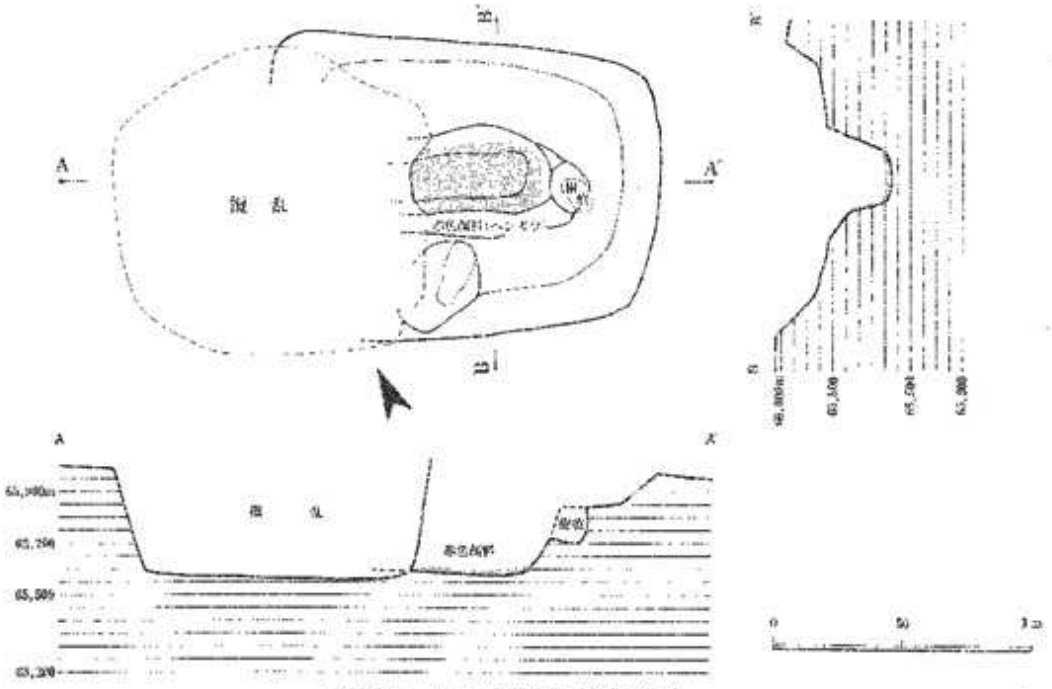
遺物番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
65 1 19	壺	口径 19.2 現存高 19.0	頸部で屈曲した後口縁部が直線的に外側に開く。端部は平坦にしている。	角セン石、金雲母、石英を含む	淡黄褐色	良	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○底部欠失
66 1 20	壺	口径 18.4 胴部径 26.5 現存高 28.1	頸部でくの字に屈曲した後口縁部が直線的に外側に開く。端部は平坦にしている。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、球形に近い。	角セン石を多く含む	淡黄褐色	良好	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器 ○底部欠失
66 1 21	壺	口径 19.2 胴部径 31.5 現存高 27.2	頸部で屈曲した後口縁部がやや外反気味に外側に開く。端部は平坦にしている。胴部の最大径は中位より上にある。	角セン石、金雲母、石英を含む	淡黄褐色	良好	口縁部ハケ目の後ナデ 胴部ハケ目	口縁部ナデ 胴部ヘラ削り	○土師器
67 1 22	壺か甕	胴部径 32.6 現存高 33.8	胴部最大径はほぼ中位にあり、球形に近い。	角セン石、金雲母、石英を含む	淡黄褐色	良	胴部ハケ目	胴部ヘラ削り	○土師器 ○口縁部欠失

（3）土壙と出土遺物

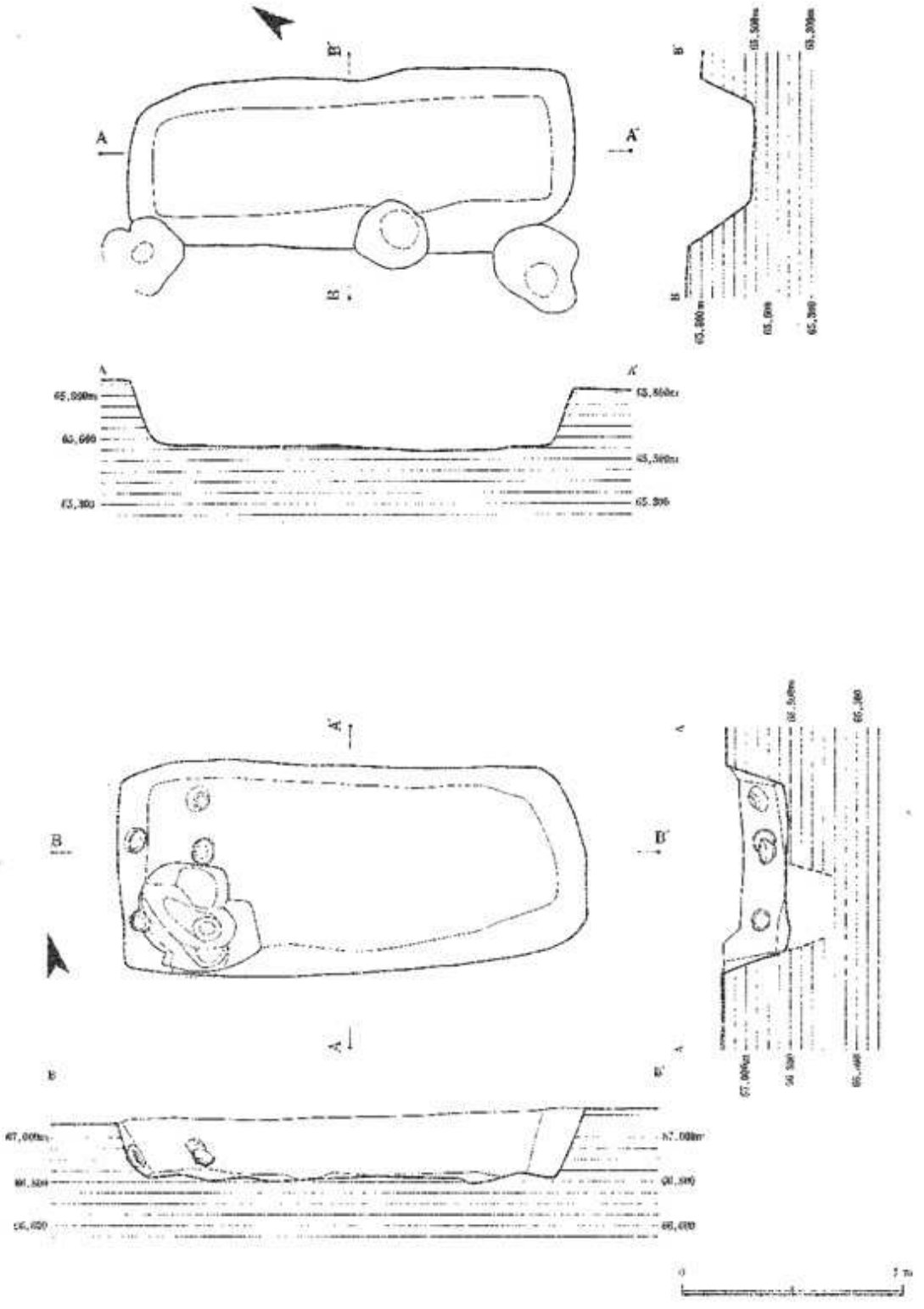
1号土壙

遺構（第68図）

土壙は、5－F－55グリッドに単独で検出された。土壙は、近世のイモ貯蔵穴と考えられる



第68図　1号土壙（SK）実測図



第69図　2号・3号土壙（ＳＫ）実測図

穴に西側部分を切られ正確な規模は不明だが、主軸をN -65° 15′ －Wに取り掘られている。規模は、長さ1.50m前後、幅1.00～1.16mで深さ0.45mを測り隅丸長方形を呈するものと考えられる。土壙は、長辺側の左右にさらに段がつき二段に掘られている。内側の規模は、長さは不明だが幅0.42mで深さ0.25mを測り断面がU字形を呈している。床面には、赤色顔料が蒔かれていた。土壙内には、木棺を埋置した可能性が考えられる。

土壙内からは、人骨や副葬品等の遺物の出土は全くない。

2．平安時代

（1）土壙と出土遺物

2号土壙

遺構（第69図）

土壙は、5－F－46・55グリッドに単独で検出された。土壙は、主軸をN－35° 00′ －Wに取り掘られ、規模は長さ2.02m、幅0.84mで深さ0.29mを測り隅丸長方形を呈している。断面形は、U字形を呈する。

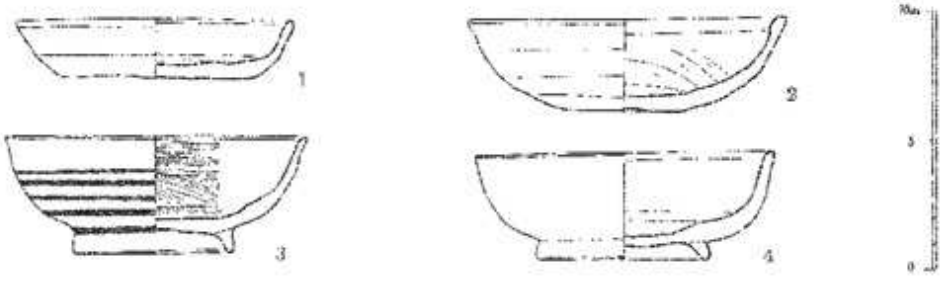
土壙内はからは、遺物の出土は全くない。

3号土壙

遺構（第69図）　　出土遺物（第70図・第19表）

土壙は、5－F－58グリッドに単独で検出された。土壙は、主軸をN－75° 00′ －Wに取り掘られ、規模は長さ2.13m、幅0.98mで深さ0.27mを測り隅丸長方形を呈している。断面形は、U字形を呈する。

土壙内からは、西側の壁付近から床面より10cm浮いた状態で、土師器皿や坏、高台付坏が出土している。遺物は、出土状態から遺体の足元に入れたものと見られ、頭位は東と考えられる。



第70図　3号土壙（ＳＫ）内出土土器実測図

第19表　3号土壌内出土土器観察表

図版番号	器形	法量（cm）	形態的特徴	胎土	色調	焼成	調整技法 外面	調整技法 内面	備考
70 1 1	皿	口径 10.8 器高 2.3 底径 7.5	体部は直線的に外方に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。	角セン石、石英を含む	淡黄褐色	良	ナデ 底部回転ヘラ切り	ナデ	○土師器 ○ほぼ完形
70 1 2	坏	口径 12.2 器高 3.8 底径 4.5	体部は内湾しながら立ち上がり外方に開く、端部は丸くなる。	金雲母、角セン石を含む	淡黄褐色	良好	ナデ 底部回転ヘラ切り	ナデ	○土師器 ○完形品 ○内外面に赤色顔料塗布
70 1 3	坏	口径 11.4 器高 4.2 高台高 0.7 高台径 6.6	底部より内湾しながら立ち上がり口縁部は若干すぼむ。端部は尖がり気味である。底部には低い高台を貼り付ける。	金雲母、角セン石を含む	黒色	良好	ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	ヘラ磨き	○土師器 ○完形品 ○黒色土器
70 1 4	坏	口径 11.6 器高 4.6 高台高 0.9 高台径 6.2	底部より内湾しながら立ち上がり口縁部はほぼ直口する。端部は尖がり気味である。底部には低い高台を貼り付ける。	金雲母を含む	黒色	良好	ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	ハケ目の後ヘラ磨き	○土師器 ○完形品 ○黒色土器

第Ⅵ章　まとめ

石立遺跡

1．溝遺構について

今回の調査に於いて、弥生時代の溝遺構が３本検出された。溝は、３本共にほぼ同じ間隔で平行に調査区を北から南に向かって弧を描きながら半円状に掘られており、４号溝と７号溝内からは、投棄されたと考えられる土器が多量に出土した。溝の時期は、４号・７号溝内から出土した甕の胴部の最大径が中位付近まで降りており脚長であることや、器面調整のタタキが残ること、それに脚台が付かない甕が認められること、他に壺や高坏・器台等の特徴から、後期末で弥生時代の最終段階に押さえられる。溝は、幅や深さそれに断面形状や出土土器、台地の端部で検出されたことから考え合わせて、集落を巡っていた環濠と判断した。ただし、一番西側に位置する３号溝からは土器の出土が全く無いことから、時期の判断は難しいが、４号溝や７号溝を意識した様にほぼ同間隔で半円状に掘られていることから、他の溝と同時期で環濠と考えた。また、３本の溝は埋まり方が自然埋没であること、溝そのものから出土した土器からは、はっきりとした時期差は認められないこと，３本の溝はそれぞれ６ｍから７ｍ間隔で掘られており、溝と溝との間の部分から住居跡は全く検出されておらず、この程度の拡張で溝自体をさらに掘り直すのが無意味と考えられることなどから、３本の溝は同時期に並存した可能性が強いと考えている。

2．箱式石棺の年代について

箱式石棺は、周辺より周溝が検出されなかったことから、当初より墳丘も作らなかった可能性が強い。石棺内や周辺から、遺物が全く出土していないことから時期の判断は難しいが、側石の数が少ないことからあまり古くは遡らないものと考えられ５世紀代の石棺と考えている。

3．方形周溝墓と円墳の築造年代について

方形周溝墓の主体部は、形態は不明だが阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が埋置されていたのは間違いない。円墳は、３基検出されているが、いずれも主体部は削平により消滅しており形状や規模は不明である。また、何れも単独で検出されており、お互いの重複は全く認められない。方形周溝墓や円墳の周溝内からは、いわゆる古式土師器が多く出土した。これらの土師器は、特徴からすべて５世紀代の土器で４世紀まで遡るものは認められない。出土した土師器から築造時期は、方形周溝墓が５世紀前半頃、円墳がやや新しく５世紀の中葉頃と考えられる。ただし、２号円墳からは全く土器が出土していないことから時期判断は出来ない。しかし、他の古墳との重複が見られないことから、ほぼ同時期と見て良い。前後関係は、方形周溝墓が円墳に先行

して築造され、次に円墳が作られ台地の端部に向かって墓域が広がったと考えられる。

八反田遺跡C地区

1．方形周溝墓と円墳の築造年代について

方形周溝墓の主体部は、主軸を東西に取りほぼ中央に作られていた。主体部は、破壊を受け殆ど残っていなかったが阿蘇溶結凝灰岩の石材片が出土したことにより、凝灰岩製の石棺を納めていたのは間違いない。しかし、石棺の形態は不明である。また、主体部からの遺物の出土は無い。円墳は、外形で直径約34m、内径で直径約27mを測る大型の円墳で、主体部は削平を受け消滅していた。

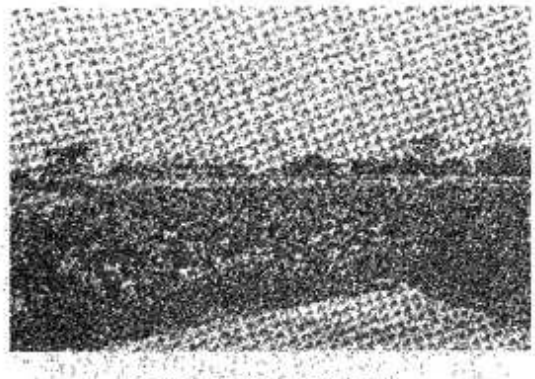
方形周溝墓と円墳の周溝内からは、古式土師器が多く出土した。出土した土師器は、方形周溝墓や円墳共に前述した石立遺跡のものより器形的に古い様相が認められ、特徴から4世紀後半から5世紀初頭に押さえられる。築造時期は、この時期に考えられよう。また、両者の前後関係は円墳出土の壺や小型丸底壺に、方形周溝墓出土のものより古い特徴が認められることから、円墳が先行して築造された後に方形周溝墓が作られたものと考えている。

今回は、紙面の都合上検出した遺構や出土した遺物を中心とした報告書になった。今後、残りの遺跡についても随時報告書を刊行する予定であり、最後の報告書で今回報告した遺跡も含めて、問題点については改めて考察を行いたいと考えている。

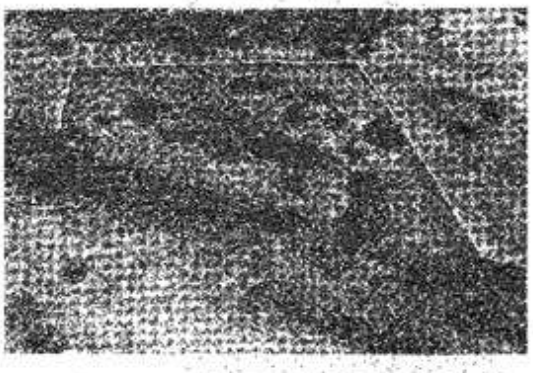
参考文献

『塚原』	野田拓治	熊本県文化財調査報告第16集	1975
『塚原古墳群発掘調査報告書Ⅰ』	豊崎晃一他	城南町文化財調査報告第5集	1986
『塚原古墳群発掘調査報告書Ⅱ』	豊崎晃一他	城南町文化財調査報告第6集	1988
『塚原古墳群発掘調査報告書Ⅲ』	豊崎晃一他	城南町文化財調査報告第7集	1991
『沈目』	江本　直	熊本県文化財調査報告第13集	1974
『宇土城跡（西岡台）』	平山修一他	宇土市文化財調査報告第1集	1977
『羽山塚古墳調査報告書』	隈　昭志他	九州産業交通株式会社	1979
『大見観音崎古墳群』	村井真輝他	熊本県文化財調査報告第57集	1982
『上の原遺跡Ⅰ』	松本健郎他	熊本県文化財調査報告第58集	1983
『上の原遺跡Ⅲ』	野田拓治	熊本県文化財調査報告第73集	1985
『熊本地方の弥生後期土器』	蒲本正文	古文化談叢第6集 九州古文化研究会	1979
『下山西遺跡』	髙谷和生他	熊本県文化財調査報告第88集	1987
『方保田東原遺跡Ⅰ』	中村幸四郎	山鹿市立博物館調査報告書第2集	1982
『方保田東原遺跡Ⅲ』	中村幸四郎	山鹿市立博物館調査報告書第7集	1987

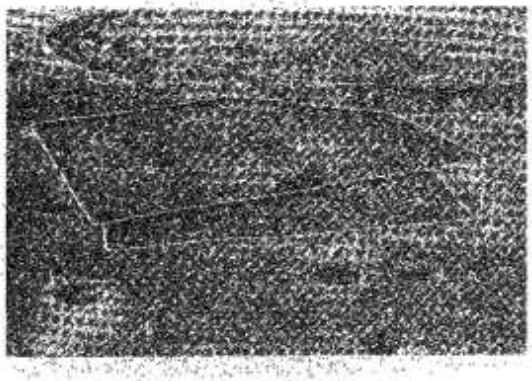
図　　版



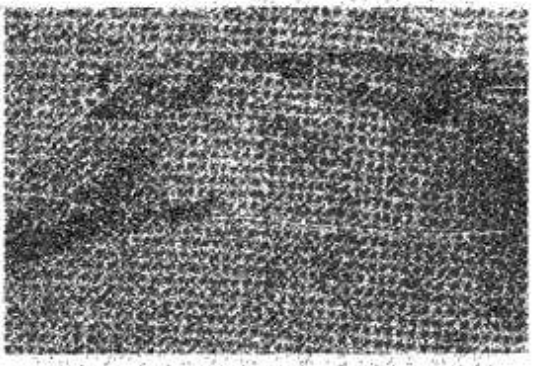
石立遺跡遠景（東より）



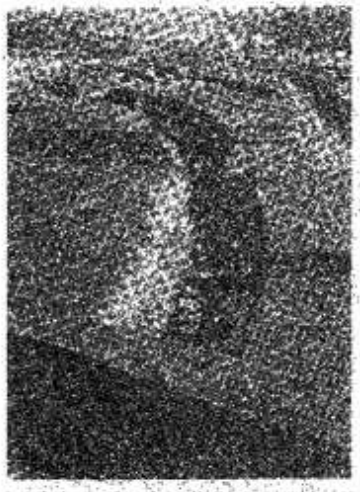
1号住居跡（石立）



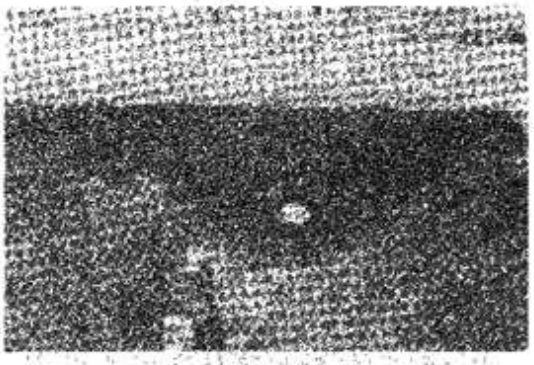
2号・3号住居跡（石立）



4号住居跡（石立）

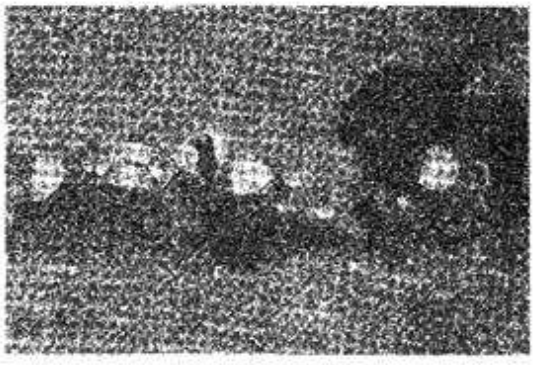


4号溝遺物
出土状況（石立）



4号溝土層断面

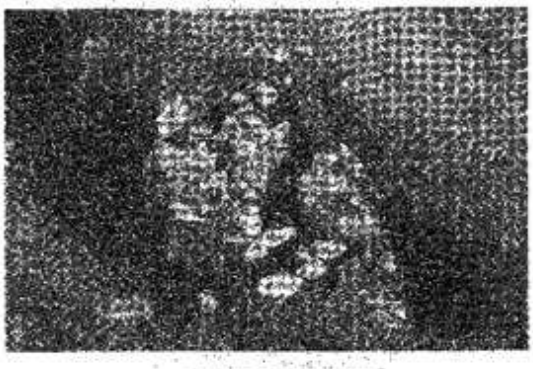
4号溝遺物出土状況



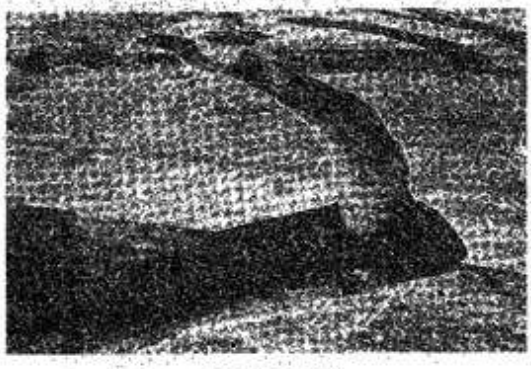
4号溝遺物出土状況

図 版 2

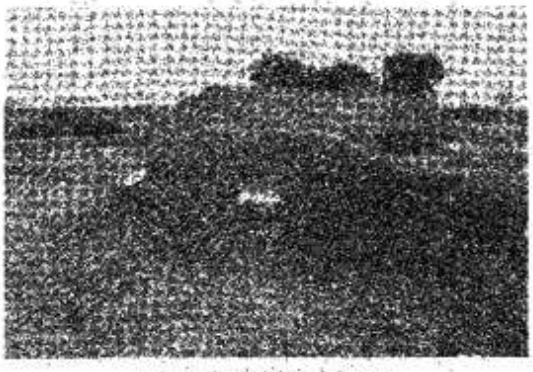
7号溝遺物
出土状況（石立）



7号溝遺物出土状況

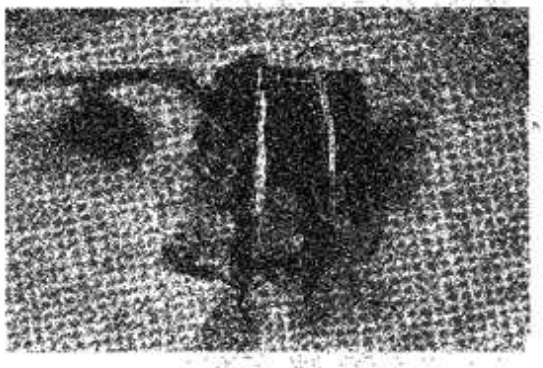


7号溝調査後

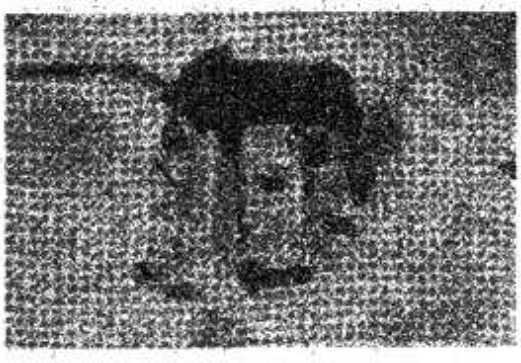


1号石棺調査前（石立）

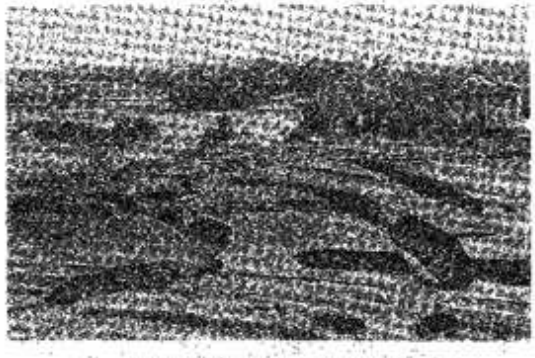
1号石棺検出状況



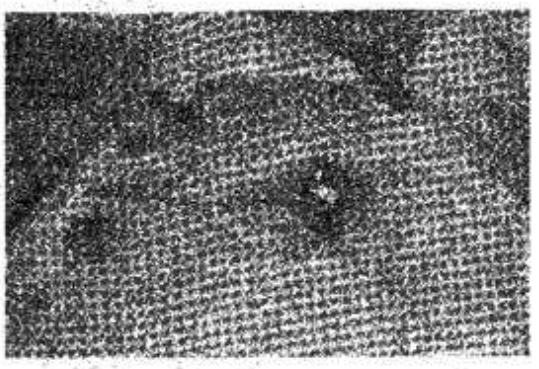
1石棺検出状況



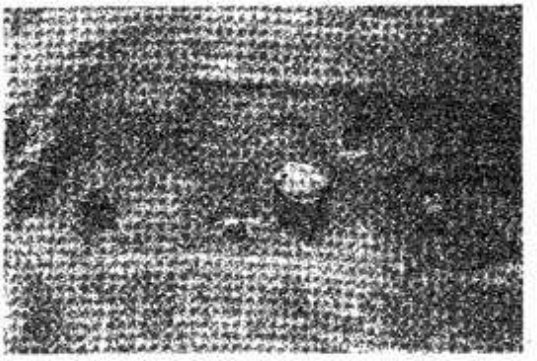
1号石棺墓壙



1号方形周溝墓（石立）

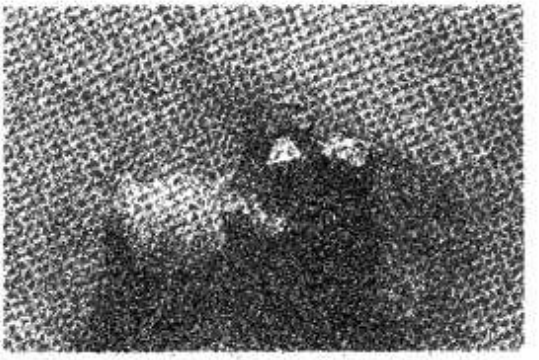


1号方形周溝墓遺物出土状況（石立）



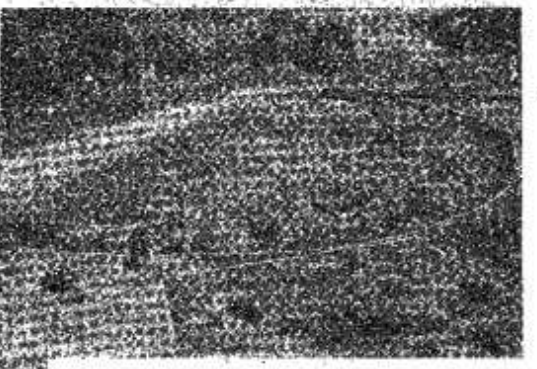
1号方形周溝墓遺物出土状況

1号方形周溝墓
遺物出土状況



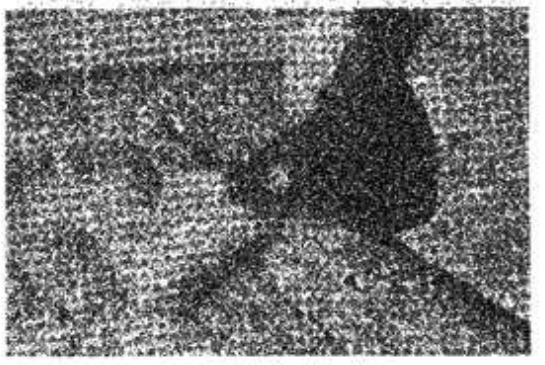
1号方形周溝墓遺物出土状況

2号円墳（石立）

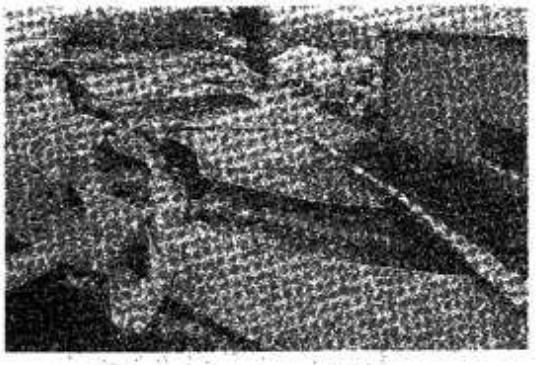


3号円墳（石立）

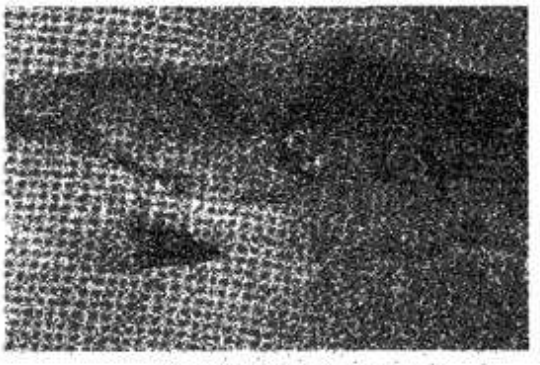
3号円墳遺物出土状況



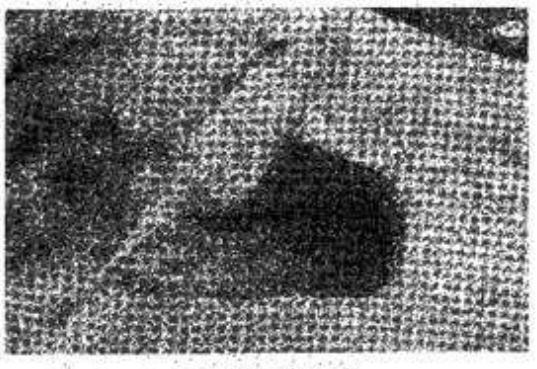
3号円墳遺物出土状況



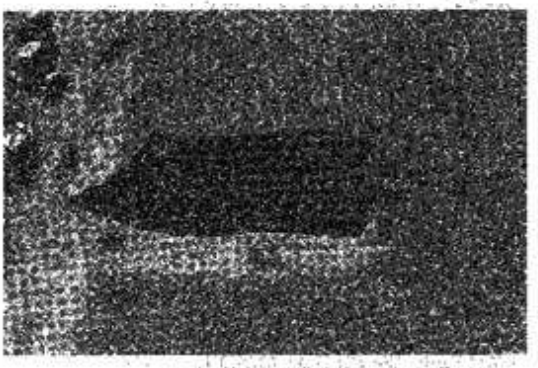
4号円墳（石立）



4号円墳遺物出土状況



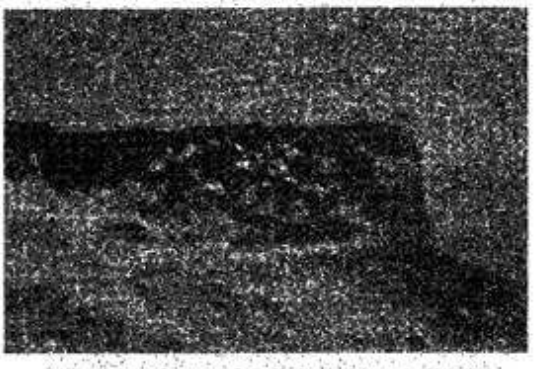
3号土壙（石立）



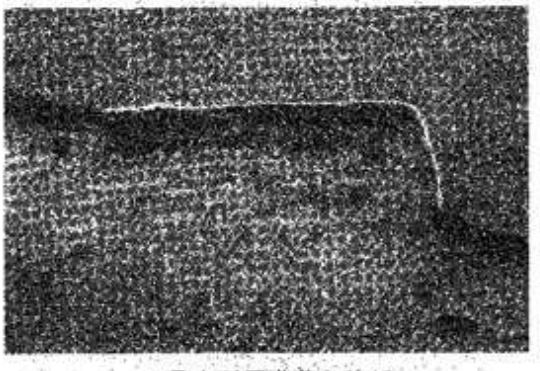
4号土壙（石立）

5号土壙（石立）

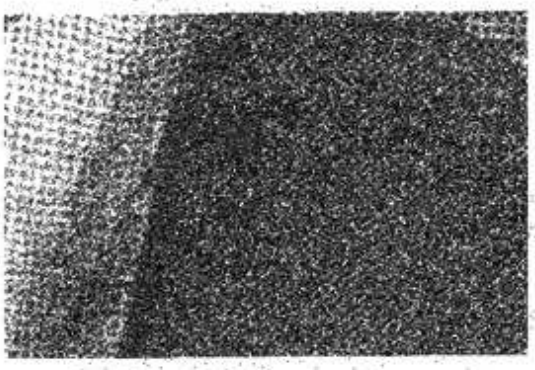
1号方形周溝墓（八反田C）



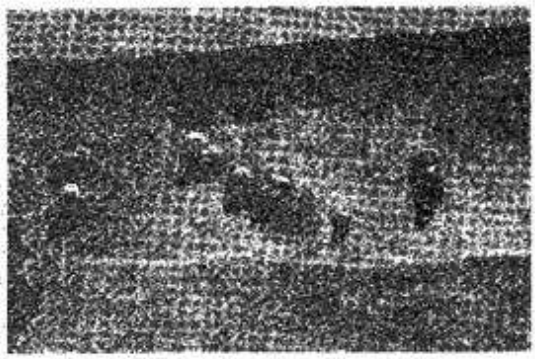
1号方形周溝墓主体部石材出土状況



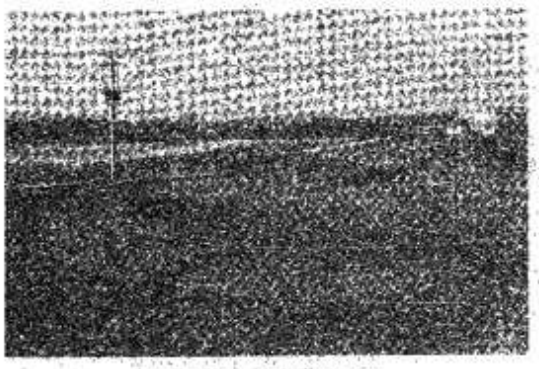
1号方形周溝墓主体部



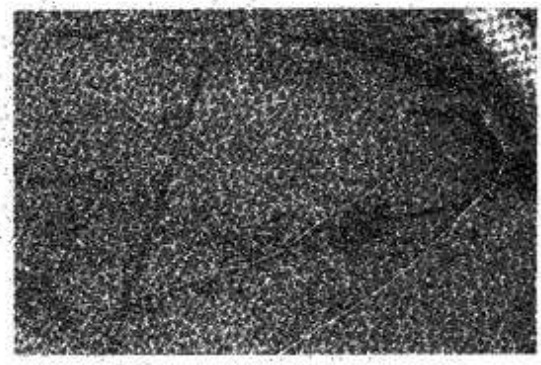
1号方形周溝墓遺物出土状況（八反田C）



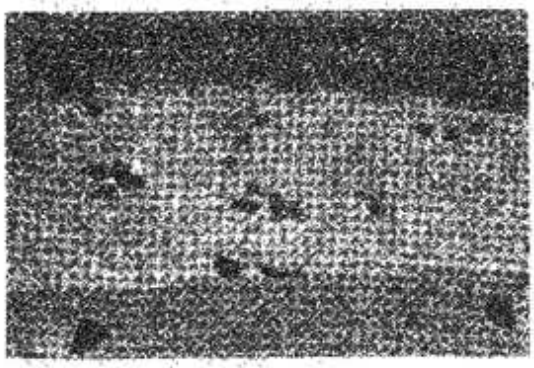
1号方形周溝墓遺物出土状況



1号円墳（八反田C）

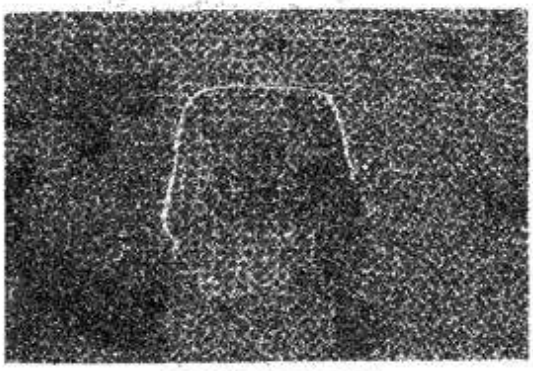


1号円墳

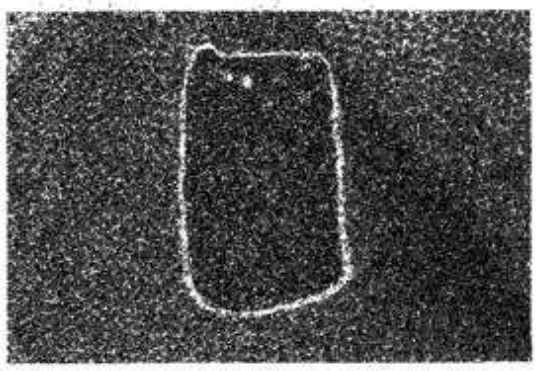


1号円墳遺物出土状況

1号円墳遺物出土状況

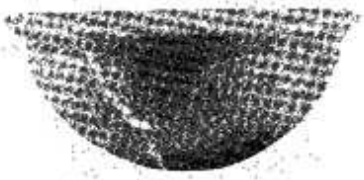


1号土壙（八反田C）



3号土壙（八反田C）

23－36


23－37

23－38

23－41

24－45

24－47

24－49

22－31

23－35

22－32

23－34

1/4

石立遺跡４号溝

18－1

19－8

19－13

20－14

20－17

21－19

21－20

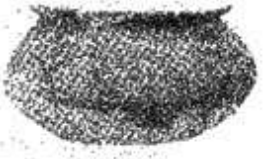
21－24

23－33

22－25

4号溝
1/8

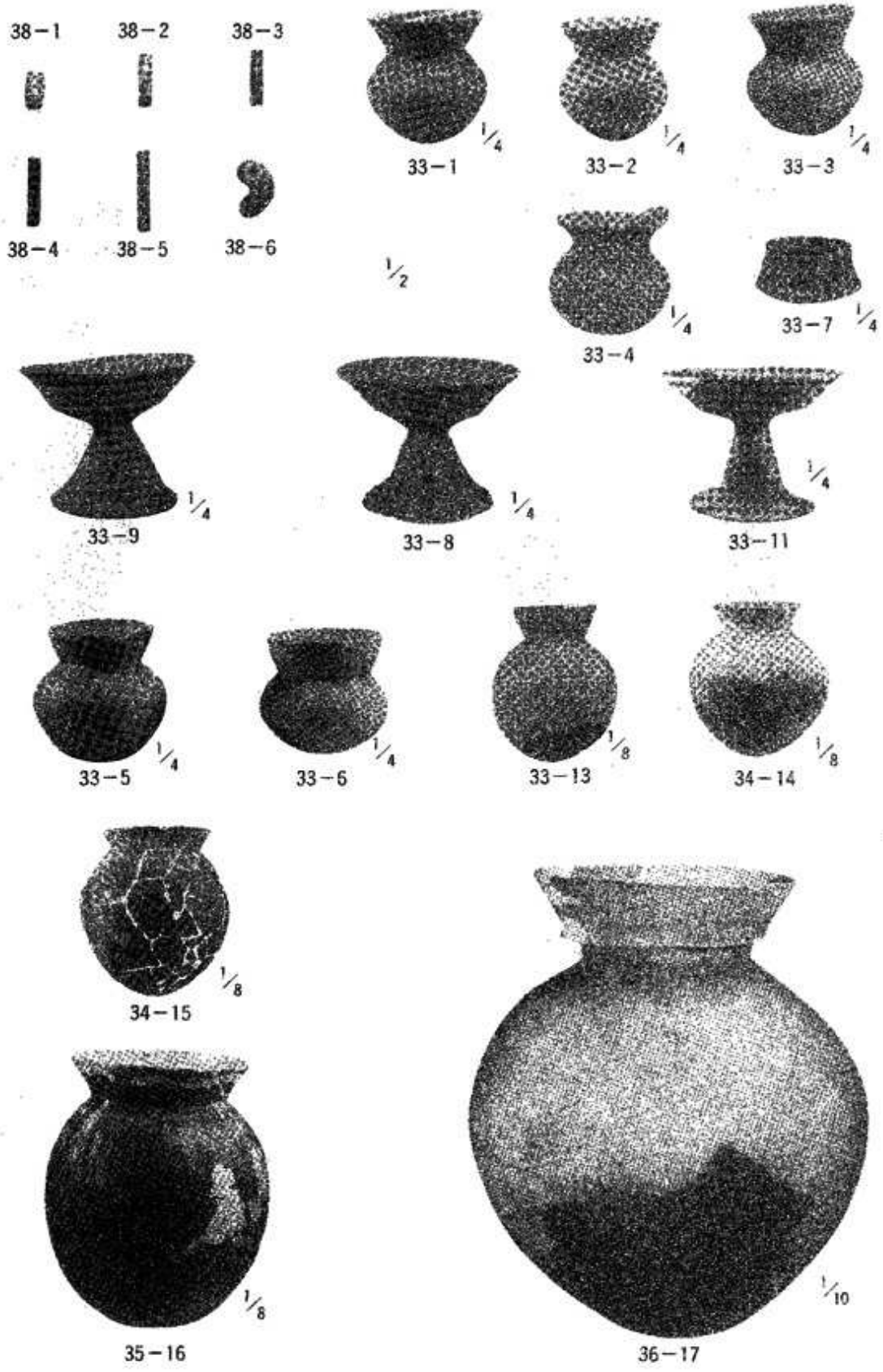
1/4


27－3

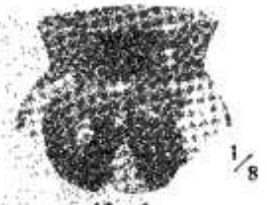
27－4

7号溝
1/8

石立遺跡4号溝・7号溝



石立遺跡１号方形周溝墓


1/8
42－1

1/8
42－2

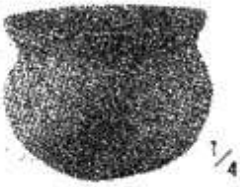
石立遺跡
3号円墳

1/10
43－3

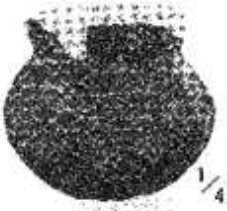
石立遺跡
4号円墳

1/4
46－3

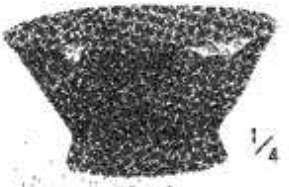
1/4
46－4


1/4
46－5

1/8
46－6

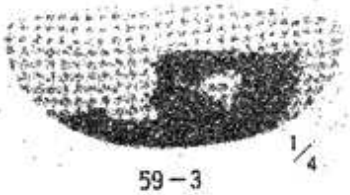

1/4
49－2

石立遺跡
3号土壙

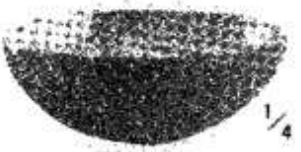

1/4
52－1

石立遺跡
2号土壙

八反田遺跡C地区
1号方形周溝墓

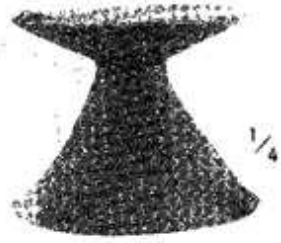

1/4
59－3

1/4
59－5

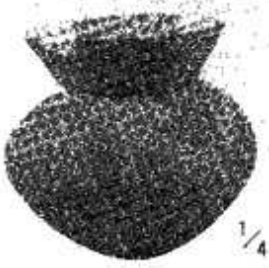

1/4
59－6

59－7

59－8



59－9



60－14

59－11

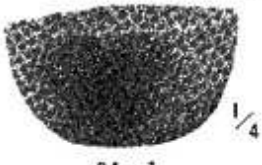
59－13

59－10

59－15

八反田遺跡Ｃ地区
１号方形周溝墓

八反田遺跡Ｃ地区
１号円墳



64－1

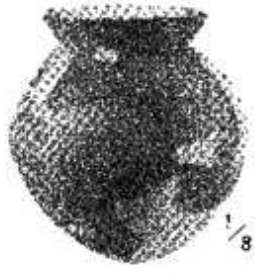
64－2

64－6

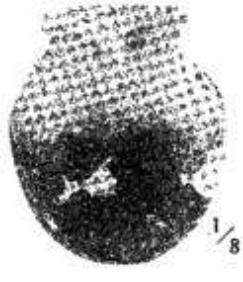
64－17

64－16

64－14



66－20



66－21

西合志町文化財調査報告第4集

石立遺跡
八反田C遺跡

1994年3月31日

発　行　西合志町教育委員会
菊池郡西合志町大字御代志1661-16

印　刷　（合資）橋本印刷
菊池郡泗水町豊水3515-1

A
B
C
D
E
F
G
H
I
1
2
3
4
5
6
7
8
X=-9.0K
土塀家山古墳
石立遺跡
八反田遺跡C地区
八反田遺跡B地区
八反田遺跡

平成元年度調査
平成2年度調査
平成2～3年度調査
平成3年度調査
合志川
J
L
M
N
O
八反原遺跡
八反畑遺跡
泊原遺跡
合志川グラウンド
9
10
Y=22,0k
0
100
500m